徳島市埋蔵文化財発掘調査概要3

1993. 3

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要3

1993. 3

徳島市教育委員会

序　　文

水と緑の豊かな自然環境と歴史に育まれ，数多くの歴史的文化遺産に恵まれた徳島市には，現代に至る幾千年もの間，悠久の眠りを続ける埋蔵文化財の包蔵地があります。

年々増加する開発に伴う発掘調査は，私たちの郷土に刻み込まれた歴史の一端を解き明かす貴重な資料を提供するとともに，これら，古代の人々の文化遺産を学ぶことは，また新たなる文化の創造の道を歩むことに通ずるものと思われます。

毎年，継続的に実施されてきました成果は今日，膨大なものとなり，これらの文化遺産の積極的な保護と活用は，今日の行政施策の重要課題の一つでもあります。このような成果物として，本書もまた微力ですが，生涯学習および歴史教育，さらには，学術研究の場において寄与することができれば，幸甚かと存じます。

なお，最後になりましたが，発掘調査にあたり，関係各位に多大な御配慮をいただきましたことに深く感謝申しあげます。

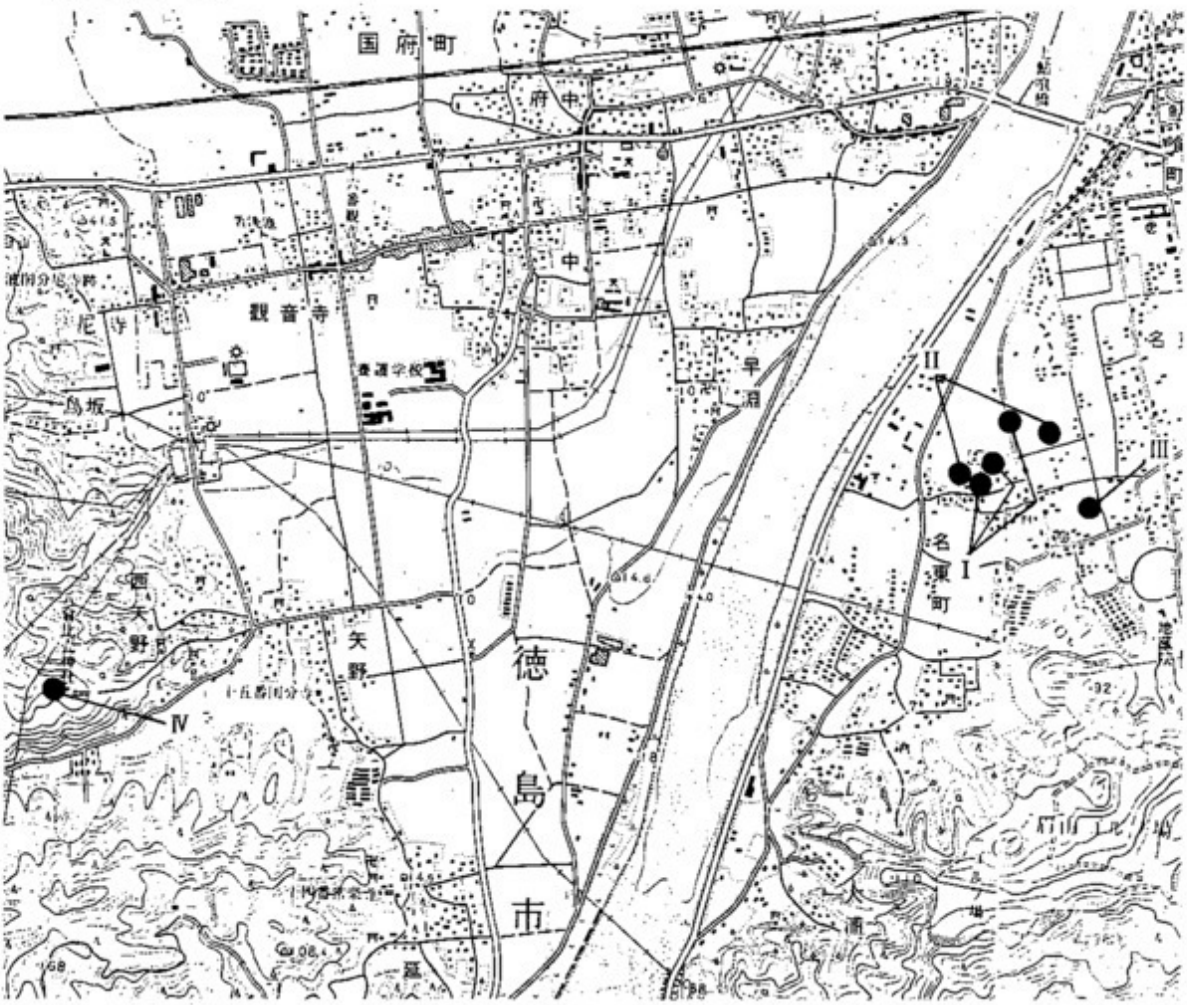
1993年３月30日

徳島市教育委員会

教育長　小　林　　實

例　　言

1．本書は，昭和63年度～平成４年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴う調査ならびに史跡整備関連事業として実施した２遺跡４件の発掘調査ならびに測量調査についての概要報告書である。
2．報告の対象となった遺跡名・調査原因・調査場所・調査期間・調査面積は，各項目の文頭に掲載した。
3．本書の作成は，各調査担当者（三宅良明・勝浦康守）が執筆し，目次欄に担当名を記した。なお，編集は勝浦が行った。
4．発掘調査は，徳島市教育委員会が主体となり，本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。
5．出土遺物・図面・写真の整理等，報告書作成に関する作業は各担当者が行った。また，資料の整理・報告書作成には，調査員ならびに調査補助員の協力を得た。
6．発掘調査に伴う日誌・写真・図面・台帳・出土遺物は，徳島市教育委員会が保管する。
7．発掘調査を実施するにあたり，徳島市下水道事務所建設課・徳島市開発部公園緑地課等の開発申請者ならびに，多数の関係者諸氏に多大な御配慮をいただいた。記して感謝の意を表する。



調　査　地　位　置　図

目　　次

序　　文

例　　言

本 文 目 次

Ⅰ．名東遺跡発掘調査概要
——名東西都市下水路建設工事に伴う発掘調査——……（勝浦）…… 1

Ⅱ．名東遺跡発掘調査概要
——宅地造成工事に伴う発掘調査——……（三宅）…… 9

Ⅲ．名東遺跡発掘調査概要
——マンション建設工事に伴う発掘調査——……（勝浦）……35

Ⅳ．八倉比売神社古墳群測量調査概要……（三宅）……57

挿 図 図 版

写 真 図 版

挿図・表図版

Ⅰ．名東遺跡発掘調査概要－名東西都市下水路建設工事に伴う発掘調査－

第１図　調査地概略図
第２図　調査地Ⅸ～Ⅺ区遺構配置図
第３図　調査地Ⅸ区溝SD01土器検出状況図
第４図　調査地Ⅸ区溝SD01・土壙SK01出土遺物
第５図　調査地Ⅹ区溝SD02・調査地Ⅺ区溝状遺構SD03出土遺物

Ⅱ．名東遺跡発掘調査概要

－宅地造成工事に伴う発掘調査－

第１図　調査地位置図
第２図　西区検出遺構
第３図　出土石器
第４図　掘立柱建物SB01
第５図　土壙SK04出土土器
第６図　東区検出遺構（第２遺構面）
第７図　方形周溝墓SL18
第８図　方形周溝墓SL18出土土器(1)
第９図　方形周溝墓SL18出土土器(2)
第10図　方形周溝墓SL18出土土器(3)
第11図　方形周溝墓SL18出土石鏃
第12図　木棺墓SJ01
第13図　土壙SK11出土土器
第14図　溝SD101
第15図　溝SD101出土土器(1)
第16図　溝SD101出土土器(2)
第17図　溝SD101出土土器(3)
表１　方形周溝墓SL18出土石鏃一覧表

Ⅲ．名東遺跡発掘調査概要

－マンション建設工事に伴う発掘調査－

第１図　調査地概略図
第２図　遺構配置図
第３図　竪穴住居跡SA01
第４図　竪穴住居跡SA01出土遺物
第５図　竪穴住居跡SA01出土遺物
第６図　竪穴住居跡SA01出土遺物
第７図　竪穴住居跡SA01，SA03出土遺物
第８図　竪穴住居跡SA02内土壙SK05土器検出状況図
第９図　竪穴住居跡SA02出土遺物
第10図　竪穴住居跡SA02内土壙SK03～SK05・竪穴住居跡SA03，SA04出土遺物
第11図　土壙SK06～SK11出土遺物
第12図　土壙SK12～SK14，Pit01出土遺物
第13図　土壙SK14土器出土状況
第14図　土壙SK14，Pit02，Pit03出土遺物

Ⅳ．八倉比売神社古墳群測量調査概要

第１図　八倉比売神社古墳群位置図
第２図　八倉比売神社１，２号墳測量図
第３図　曽我氏神社１，２号墳測量図

写 真 図 版

Ⅰ．名東遺跡発掘調査概要－名東西都市下水路建設工事に伴う発掘調査－

図版１　上：調査地Ⅸ区全景
　　下：調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況
図版２　上：調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況
　　下：調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況
図版３　上：調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況
　　下：調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況
図版４　上：調査地Ⅸ区土壙SK01
　　下：調査地Ⅸ区土壙SK01断面土層
図版５　上：調査地Ⅹ区全景
　　下：調査地Ⅹ区溝SD02
図版６　上：調査地Ⅹ区溝SD02堆積状況
　　下：調査地Ⅹ区溝SD02土器出土状況
図版７　上：調査地Ⅺ区全景
　　下：調査地Ⅺ区溝状遺構SD03検出状況
図版８　調査地Ⅸ区溝SD01，土壙SK01
　　調査地Ⅹ区溝SD02出土遺物
図版９　調査地Ⅹ区溝SD02，Ⅺ区溝状遺構SD03出土遺物

Ⅱ．名東遺跡発掘調査概要－宅地造成工事に伴う発掘調査－

図版１　上：西区第１遺構面遺構検出状況
　　下：西区第２遺構面遺構検出状況
図版２　上：掘立柱建物SB01検出状況
　　下：掘立柱建物SB01検出状況
図版３　上：掘立柱建物SB01柱穴完掘状況
　　下：溝SD06，07石帯出土状況
図版４　西区出土遺物
図版５　右上：溝SD14出土土師器坏
　　左上：東区第１遺構面溝検出状況
　　下：第１遺構面検出溝と土師器坏出土状況
図版６　上：方形周溝墓SL18検出状況
　　下：方形周溝墓SL18検出状況
図版７　上：方形周溝墓SL18北東溝埋土堆積状況
　　下：方形周溝墓SL18遺物出土状況
図版８　上：方形周溝墓SL18北東溝遺物出土状況
　　下：方形周溝墓SL18北東溝遺物出土状況
図版９　上：方形周溝墓SL18北東溝遺物出土状況
　　下：方形周溝墓SL18南東溝遺物出土状況
図版10　方形周溝墓SL18溝出土遺物
図版11　方形周溝墓SL18溝出土遺物
図版12　上：木棺墓SJ01検出状況

下：焼土壙SK12検出状況（部分）
図版13　上：溝SD101遺物出土状態
下：溝SD101遺物出土状態
図版14　溝SD101出土遺物
図版15　溝SD101出土遺物

Ⅲ．名東遺跡発掘調査概要－マンション建設工事に伴う発掘調査－

図版１　調査地全景と銅鐸出土地
図版２　上：調査地全景
下：竪穴住居跡SA01
図版３　上：竪穴住居跡SA01内炉SC01，SC02検出状況
下：竪穴住居跡SA01床面土器出土状況
図版４　上：竪穴住居跡SA01張出部土器出土状況
下：竪穴住居跡SA01内SP01検出状況
図版５　上：竪穴住居跡SA02内土壙SK05土器出土状況
下：竪穴住居跡SA02内土壙SK05土器出土状況
図版６　上：竪穴住居跡SA04
下：竪穴住居跡SA04床面土器出土状況
図版７　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版８　竪穴住居跡SA01出土遺物
図版９　竪穴住居跡SA02，SA02内土壙SK05出土遺物
図版10　竪穴住居跡SA02内土壙SK05，竪穴住居跡SA03，SA04，土壙SK06～SK11出土遺物
図版11　土壙SK12～SK15，P01，P02，竪穴住居跡SA01，SA03出土遺物

Ⅳ．八倉比売神社古墳群測量調査概要

図版１　上：１号墳現況
下：１号墳基底部葺石露出状況
図版２　２号墳現況

Ⅰ．名東遺跡発掘調査概要

――名東西都市下水路建設工事に伴う発掘調査――

調査場所：徳島市名東町２丁目162番地外

調査期間：昭和63年４月１日～平成元年３月31日

調査面積：約500m²

１．調査に至る経緯と経過（第１図）

名東西都市下水路建設工事は，周知の遺跡である名東遺跡の西域部において，昭和60年度より徳島市下水道事務所建設課が実施している都市下水路建設事業である。昭和61，62年度の事業に伴う事前の調査においては，弥生，古墳時代および歴史時代の遺構，遺物を検出している。調査面積が狭少ながら，特に，鮎喰川旧河川地域との境界の明確化や弥生時代の方形周溝墓の検出等，得られた成果には大きなものがある。

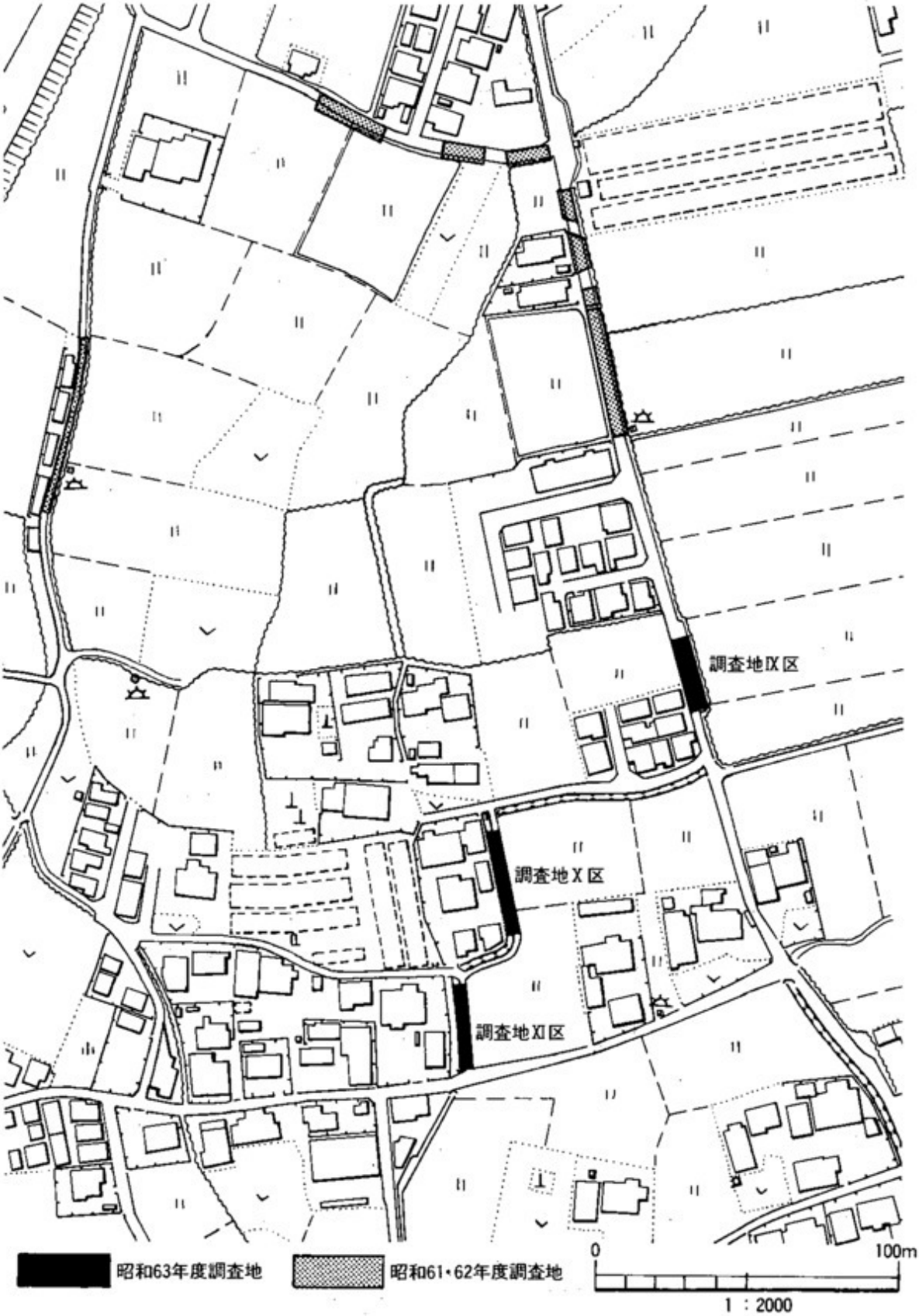
今回の調査は，昭和62年度の建設計画に継続する事業の事前調査であり，調査地は名東遺跡の西域にあたり，天正年間の鮎喰川付替工事以前の旧河川地域を西側に間近に控える地域であり，名東遺跡西端域において，断片的ではあるが，集落構造に関する貴重な資料が得られる調査として期待された。

調査は，下水路建設工事計画に従い，鋼矢板の打設後，断続的に実施した。調査地（Ⅸ～Ⅺ区）が現道路部および旧既設用水路部にあたることから，重機により盛土およびコンクリートの撤去を行い，以後，人力掘削により，遺構・遺物の検出に努めた。

調査地Ⅸ区は，旧既設排水路建設時の攪乱を大幅に受けながらも，遺構検出面上に堆積する近世の旧水田耕作土層が60cmと厚く，遺構攪乱を最小限で留める結果となっている。また，調査地Ⅹ，Ⅺ区でも，排水路の影響を受けているが，遺構検出において特に支障になるような攪乱はなく，各調査地とも，黄色シルト層（遺構検出面）上面において，遺構を確認している。

調査では，弥生時代の溝，土壙，溝状遺構等を確認しており，今後，周辺地域で実施される調査のトレンチ的役割を持つ調査として，僅少ながらも，貴重な成果を得ている。以下，主な遺構，遺物について概略する。

なお，調査地周辺の標高はT.P.＋8.5m前後を測り，遺構検出面の標高は，調査地Ⅸ区では，T.P.＋7.4m，調査地Ⅹ区では，T.P.＋8.0m，調査地Ⅺ区では，T.P.＋7.8mを測る。



第1図　調査地概略図

2．調査概要

Ⅰ．溝SD01（第2～4図，図版1～3，8）

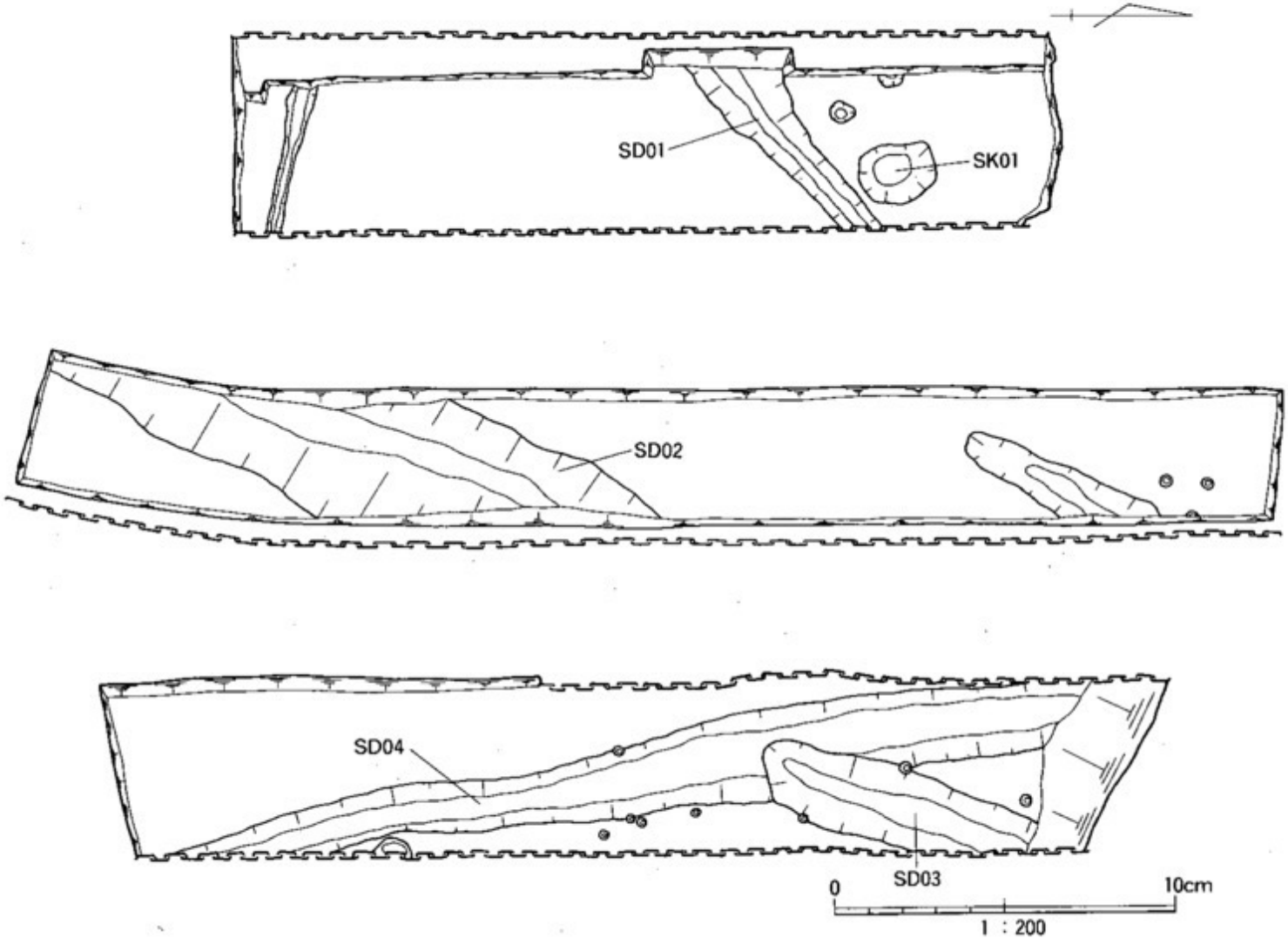
調査地Ⅸ区で検出した，幅1～2m，深さ70cm，断面形が深い皿状を呈する南西～北東方向の溝であり，旧既設排水路により一部攪乱を受ける。埋土は，層厚55cmのにぶい黄色シルト（上層）と層厚15cmの淡黄色シルト質粘土（下層）である。上層より，甕(2)，高坏(4)，下層より壺(1)，鉢(3)が出土している。

壺1は，口縁部を欠損するが，頸部外面から体部外面にかけて，ハケ調整後，体部上位4/5まで，縦位のヘラミガキが施される。甕2は，口縁部の端部を斜め上方にわずかに拡張させ，体部外面ハケ調整後，体部上位3/4まで，縦位のヘラミガキが施される。鉢3は，内弯しながら立ち上がる体部から外反する口縁部を持ち，体部外面には，縦・斜位のヘラミガキが施される。高坏4は，口縁部を水平に広げ，端部を下方へ拡張させる。表面の磨滅が著しく，坏部外面にヘラミガキの痕跡が残る。坏部と脚部の接合は，円板充填法である。

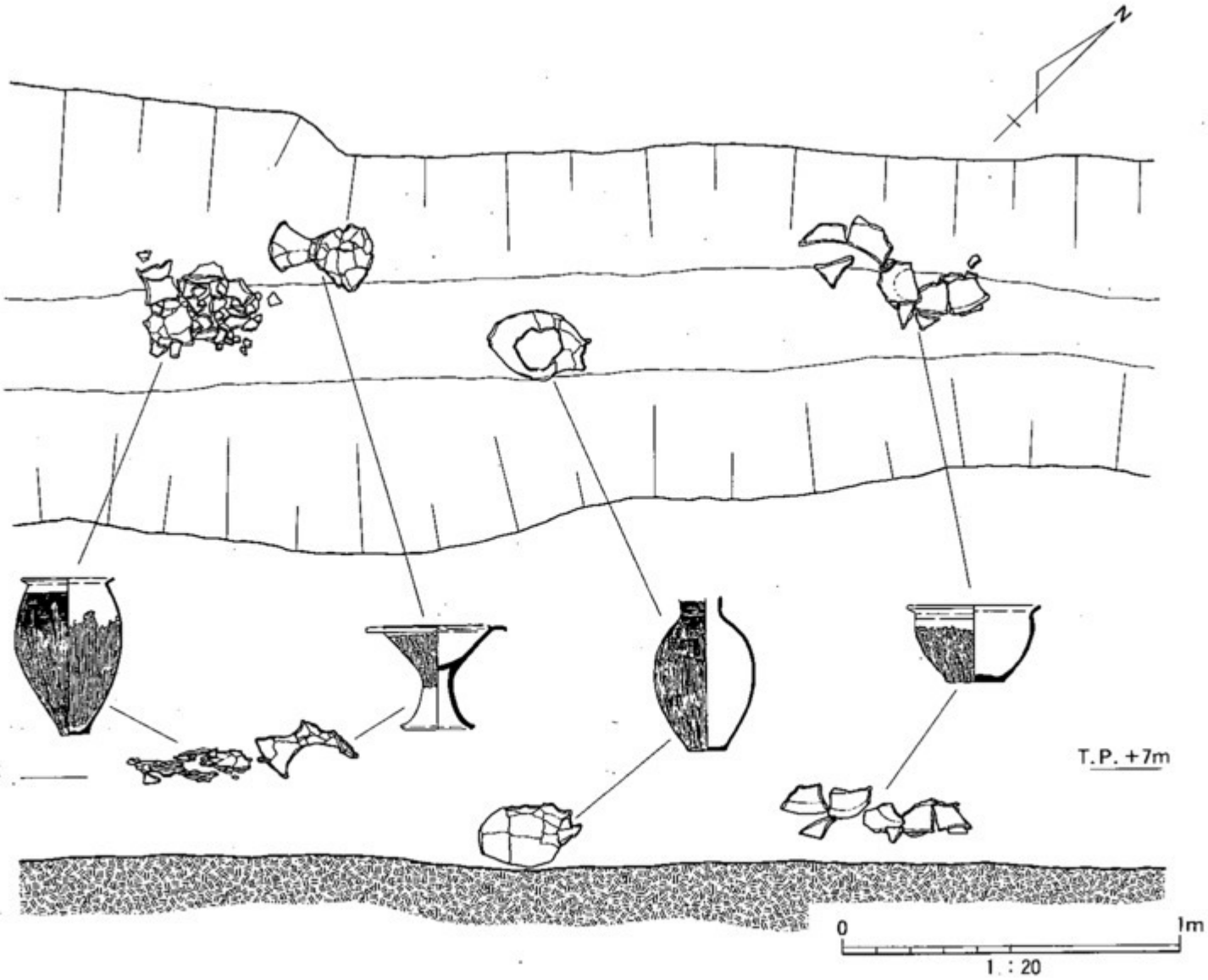
Ⅱ．溝SD02（第2図，図版5，6，9）

調査地Ⅹ区で検出した，幅3m，深さ1.8m，断面形が深い皿状を呈する南西～北東方向の溝である。埋土は，層厚55cmの黒色シルト（上層），層厚15cmの淡黄色シルト（中層），層厚20cmの灰色砂礫（下層）が堆積する。最下層に砂礫層が見られ，また，その上位（中層）には細砂～粗砂の堆積も見られることから，溝割当時での水流痕跡が窺われる。溝の検出が面的に狭少であるため，その方向性・規模については明確にし難い。出土遺物には，短頸壺(6，11)，広口壺(7，8)，甕(9，10)，高坏(12，13，15)，鉢(14)がある。

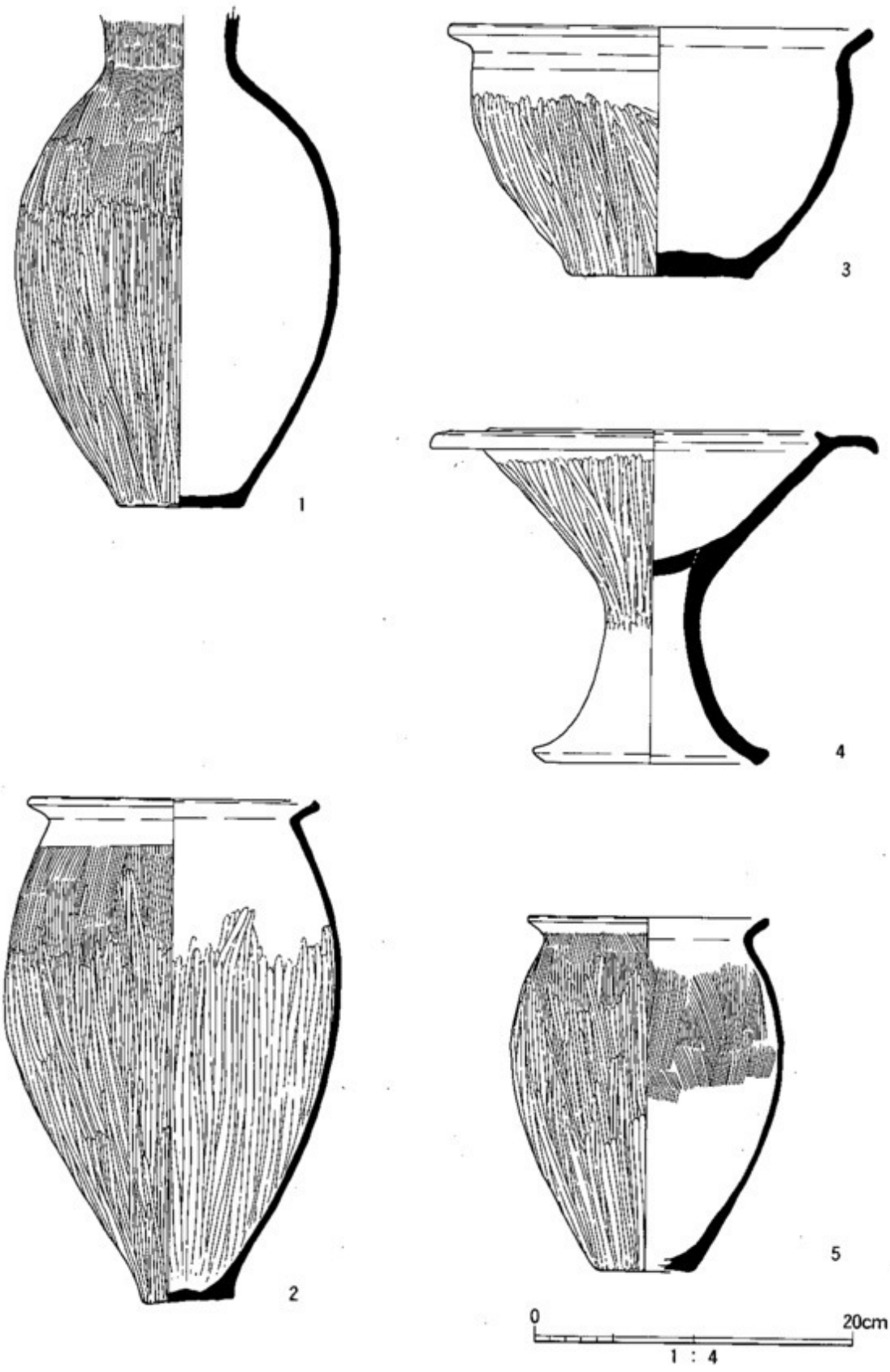
短頸壺6は，外反する口頸部の端部を内側に拡張させ，端面を外傾させ，端部直下に1条の凹線文が施される。広口壺7は，直立する頸部から外反する口縁部を持ち，端部を上方へ拡張させる。広口壺8は，外反しながら立ち上がる口頸部を持ち，端面は平坦に仕上げる。頸部外面から体部外面にかけて粗いハケ調整が施される。甕9は，「く」の字状に屈曲する端部を斜め上方に拡張し，頸部の貼付突帯に指頭圧痕が施される。甕10は，端部を上方に拡張させ，体部外面上位にまで，縦位のヘラミガキが施される。短頸壺11は，体部から短く直立する口頸部を持ち，口縁端部を平坦に仕上げ，内側に拡張させる。口頸部から体部外面にハケ調整後，体部外面1/2に縦位のヘラミガキが施される。高坏12は，口縁部片であり，端部を水平に伸ばし，端面は平坦におさめる。高坏13は，椀形の坏部の口縁部に3条の凹線文を持ち，ヘラによる沈線文が施される。高坏15は，椀形の坏部の口縁端部を内側に拡張し，口縁部直下に4条の凹線文を持つ。鉢14は，口縁端部を左右に拡張



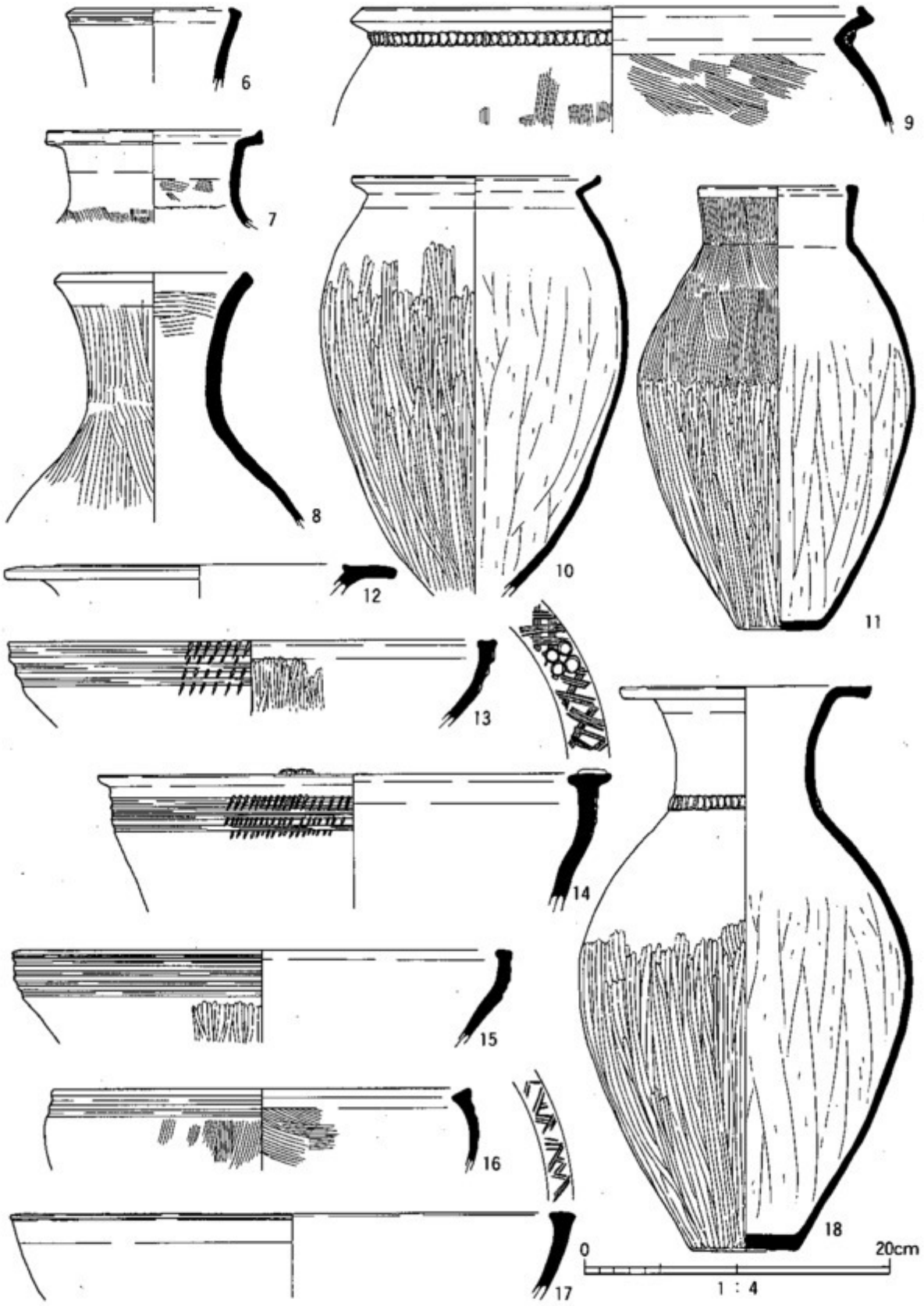
第2図　検出遺構図（上段：調査地Ⅸ区，中段：調査地Ⅹ区，下段：調査地Ⅺ区）



第3図　調査地IX区溝SD01土器出土状況図



第4図　調査地Ⅸ区溝SD01，土壙SK01出土遺物



第5図　調査地X区溝SD02，調査地XI区溝状遺構SD03出土遺物

し，端面には，円形浮文とヘラ描沈線の構成により加飾される。口縁端部直下に４条の凹線文を施し，ヘラによる沈線文が施される。

Ⅲ．土壙SK01（第２，４図，図版１，４，８）

調査地Ⅸ区で検出した，平面形が長辺2.2m，短辺1.6mの隅丸長方形を呈し，深さは70cmを測る。甕(5)が出土している。

甕５は「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち，端部を単純化させている。体部外面にハケ調整後，体部上位まで縦位のヘラミガキが施される。体部内面上半には，ハケ調整が見られる。

Ⅳ．溝状遺構SD03（第２，５図，図版７，９）

調査地Ⅸ区で検出した，幅2.2m，深さ60cm，断面形が浅い皿状を呈し，調査地内での長さが８mを測り，端部が収束する溝である。鉢(16)，高坏(17)，広口壺(18)が出土している。

鉢16は，内弯する口縁部の端部を内傾させ，端部直下に２条の凹線文を持つ。広口壺18は，外反する頸部から水平方向に伸びる口縁端部を上方に拡張させる。頸部屈曲部の貼付突帯に指頭圧痕が施される。

３．小　結

今回の調査では，弥生時代の遺構，遺物を検出しており，名東遺跡の弥生時代の集落跡の復原に関し，また，一つの貴重なデータを蓄積している。

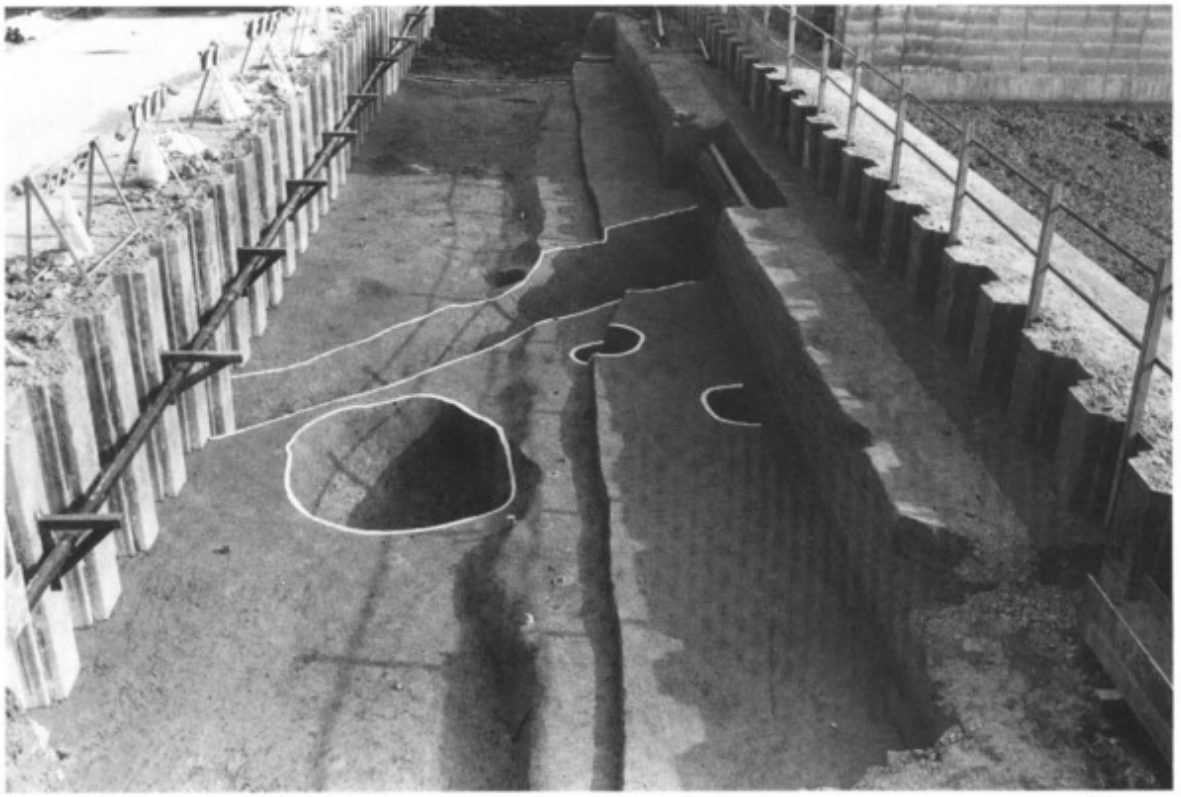
調査地Ｘ区で検出した溝SD02は，溝の僅かな部分の検出であるが，名東遺跡においては今までに知られていない規模を持つ溝である。溝埋土の最下層には，砂礫層が見られることから，当初は，自然河川から水の引き込みが行われていたものと考えられる。環濠として機能する溝か否かについては，周辺地域での調査情報がなく不明であるが，集落内において主要な機能を果たすために割られた溝である可能性が考えられる。

また，収束する溝状遺構が調査地Ｘ，Ⅺ区で検出されている。調査地が狭少のため，この形態の遺構についても明確にし得ないが，一つの可能性として，方形周溝墓の一部とも考えられる。昭和62年度の調査では，この形態を呈する溝の底部において，穿孔を受けた供献土器が並べられた状態での発見があり，以来，この地域での調査では，住居跡の確認がなされていないことを考慮すれば，集落内における墓域空間に該当しているものと考えられる。(1)

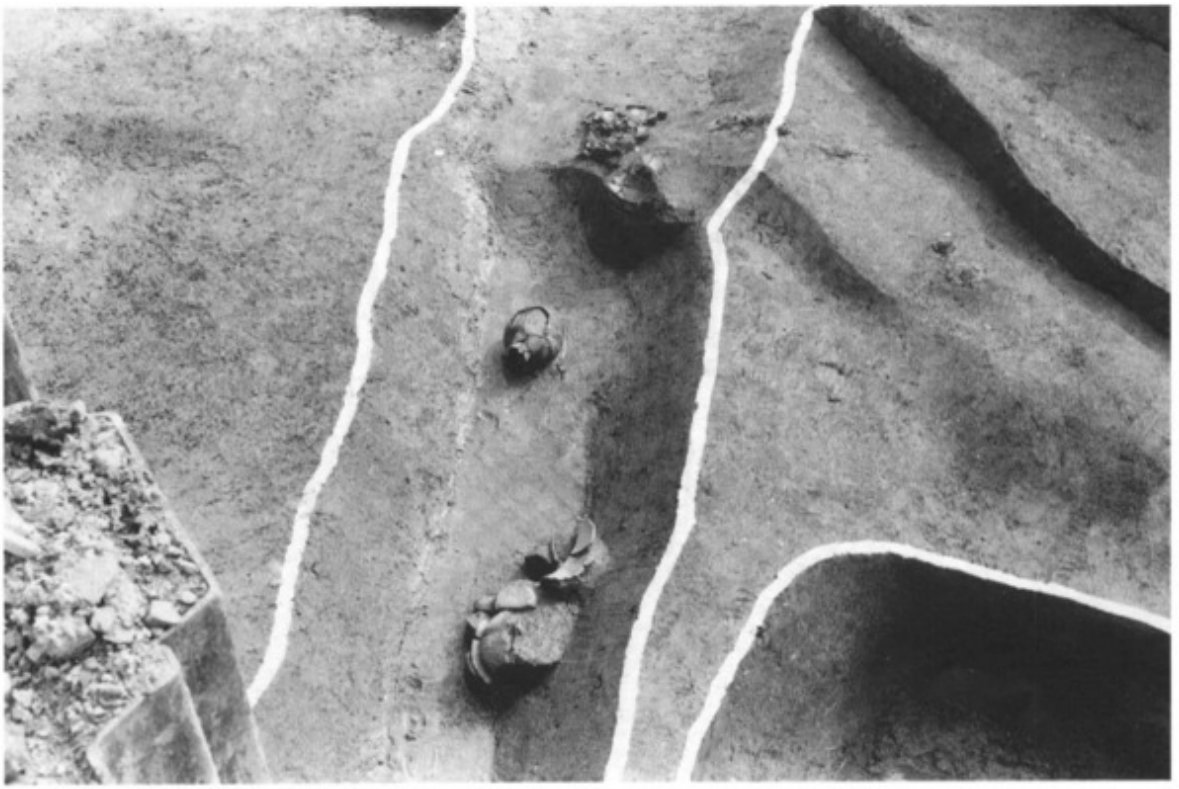
今後の調査では，弥生時代の集落における住居の構成単位，さらには，住居と墓の占地の問題等についてのより明確化が望まれる。

（註）

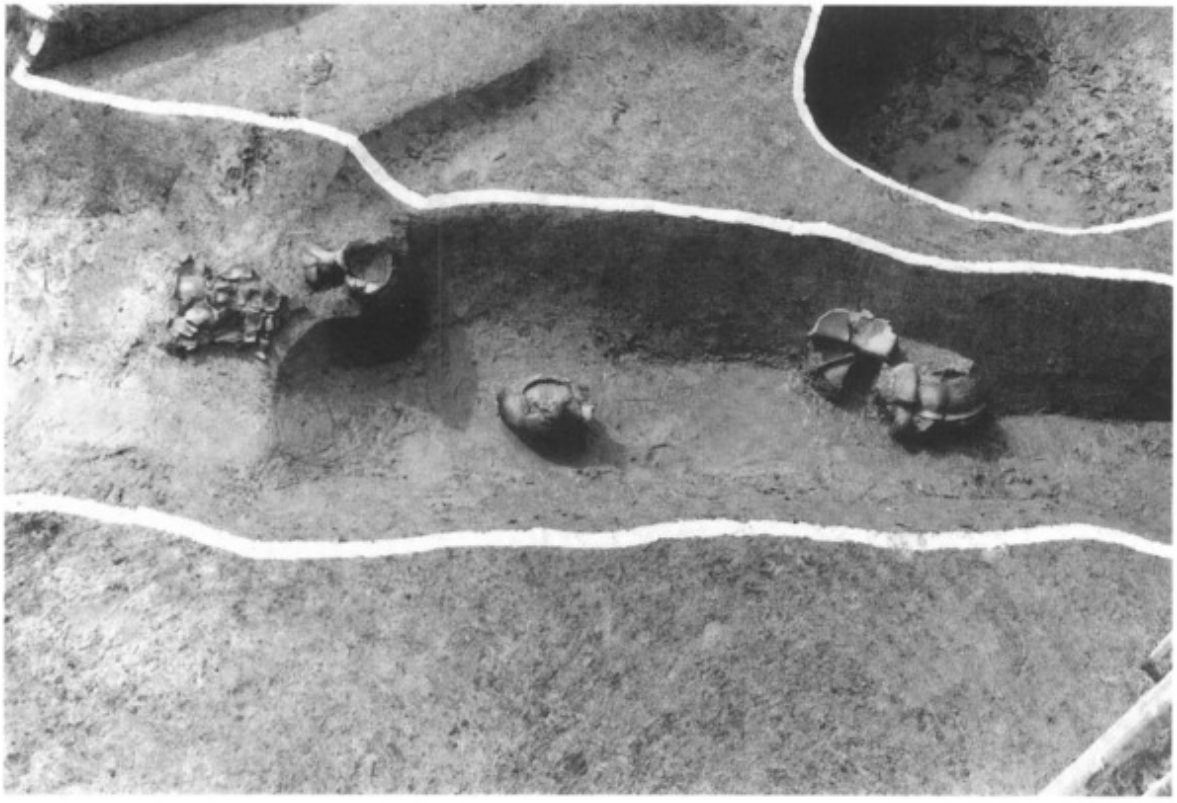
(1)　徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要１』，1989年，徳島。



調査地Ⅸ区全景　　北より



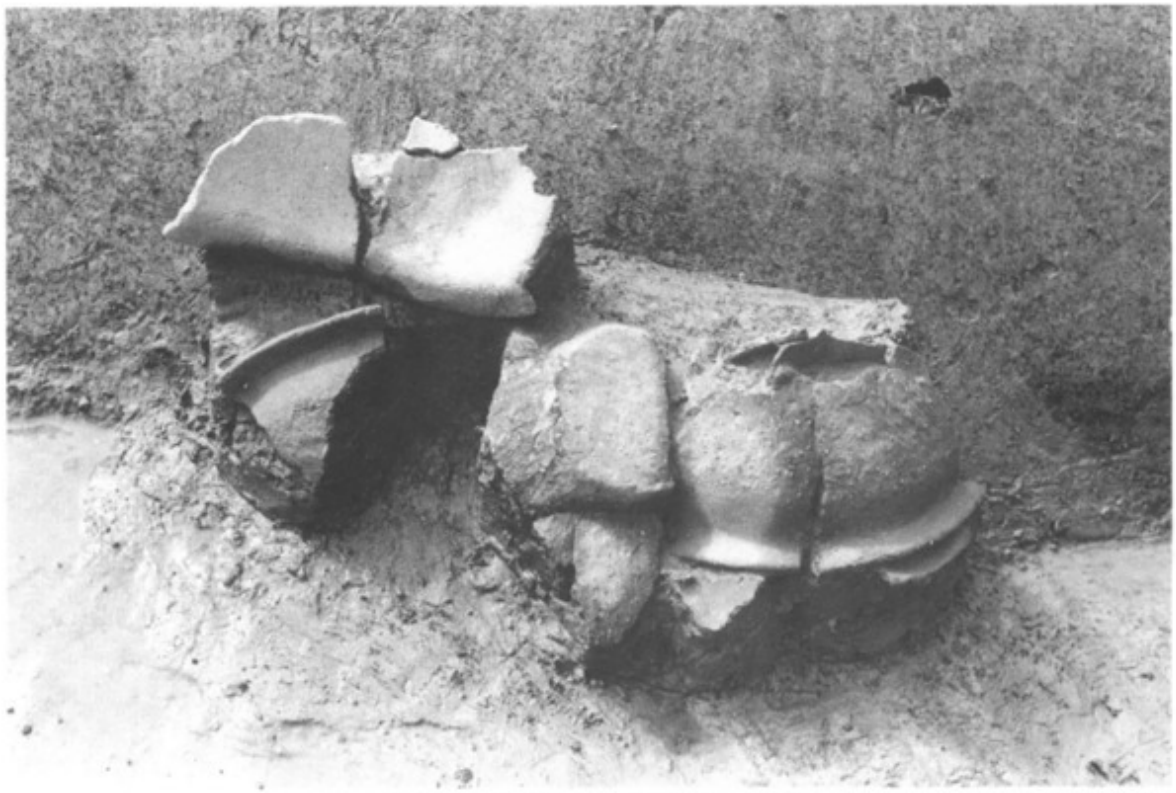
調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況　　北東より



調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況　南東より

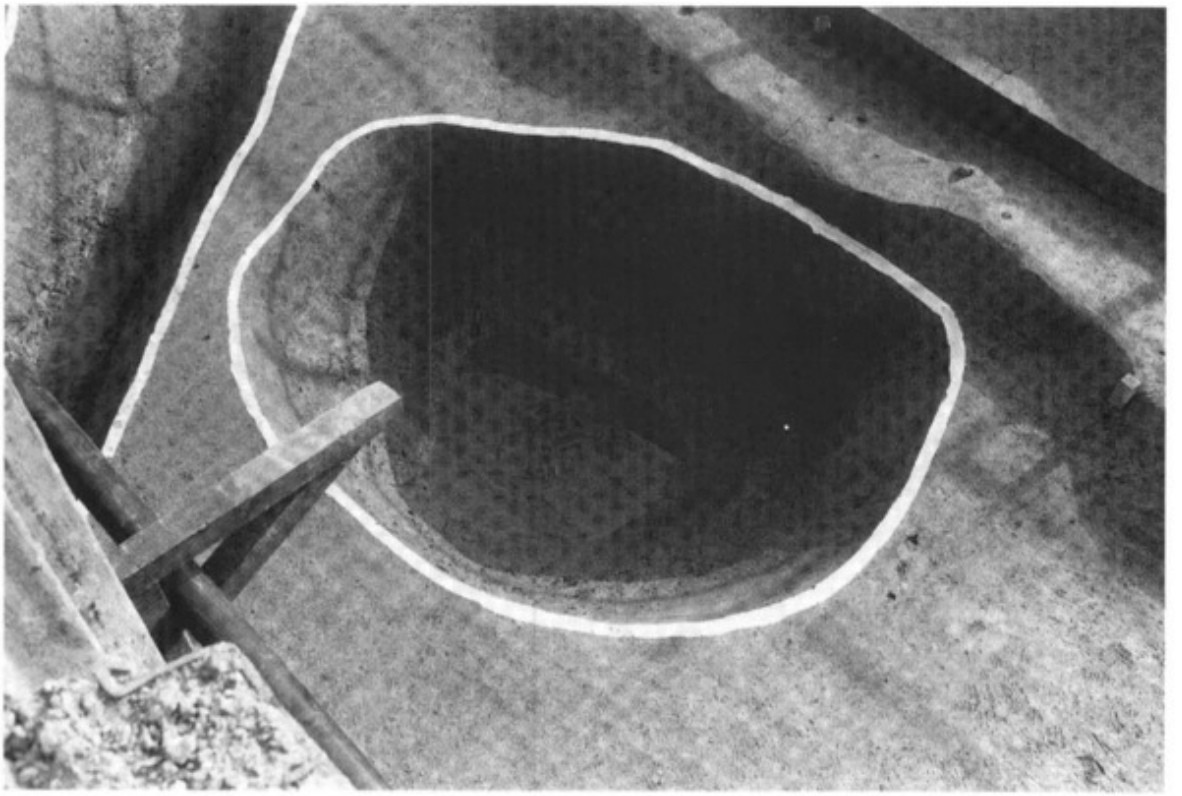
調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況　南東より

調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況　　南東より

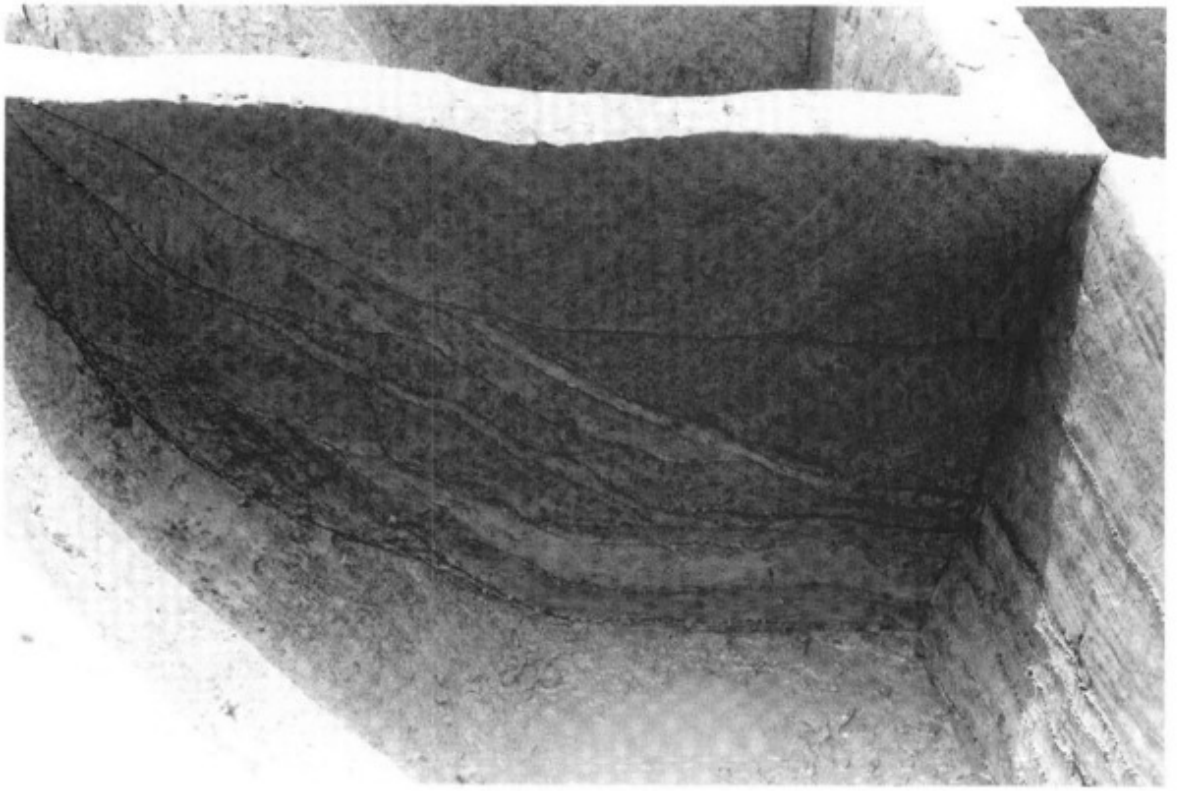


調査地Ⅸ区溝SD01土器出土状況　　南東より

図版4

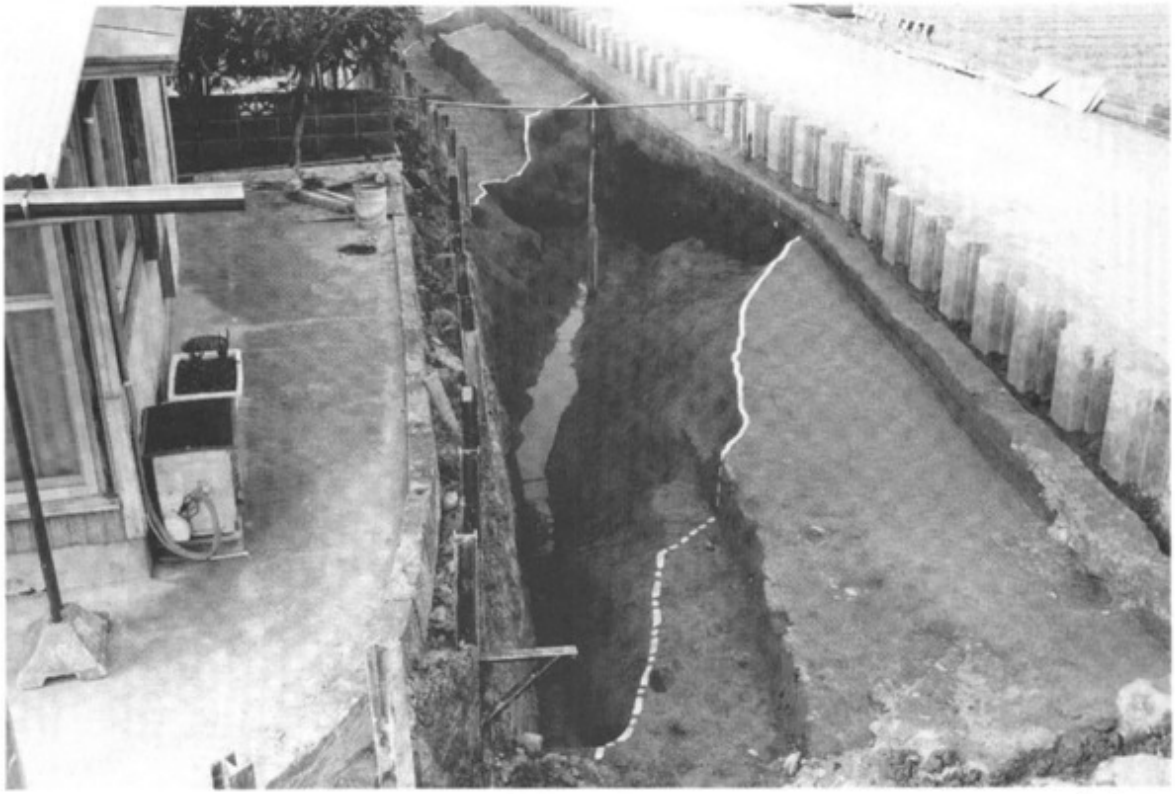


調査地Ⅸ区土壙SK01　　北東より

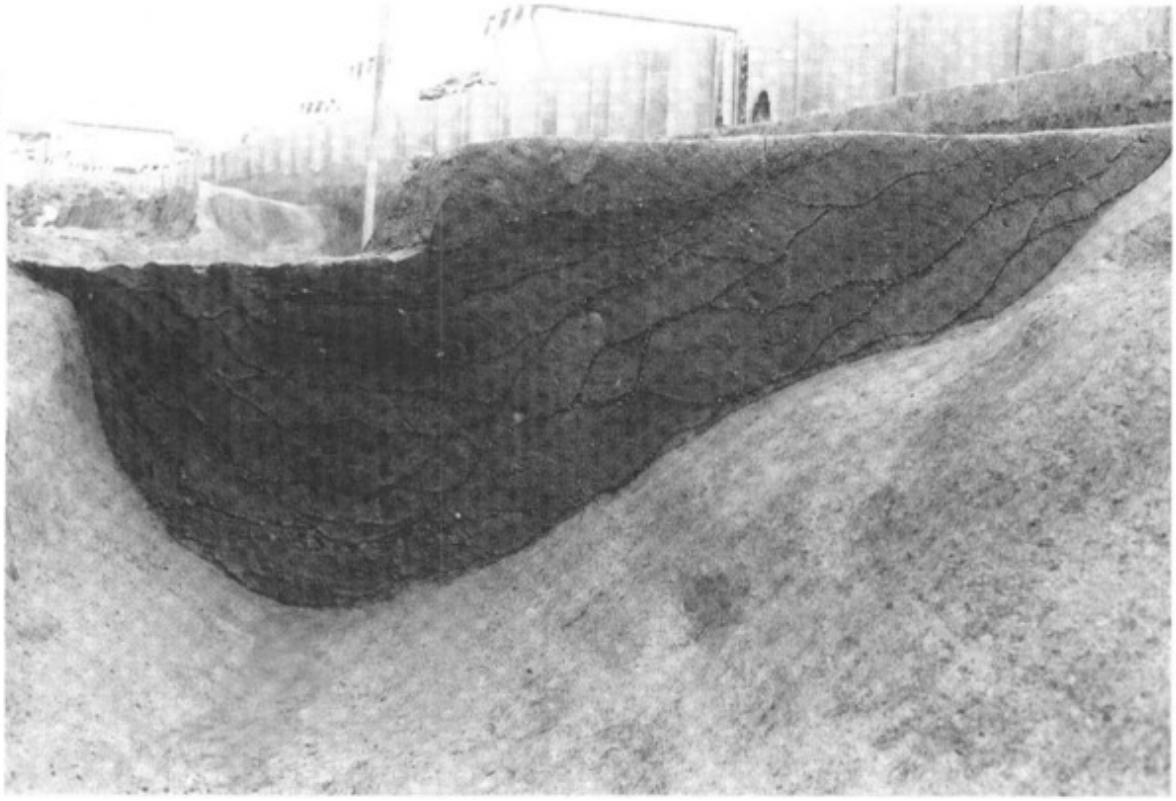


調査地Ⅸ区土壙SK01断面土層（部分）　　東より

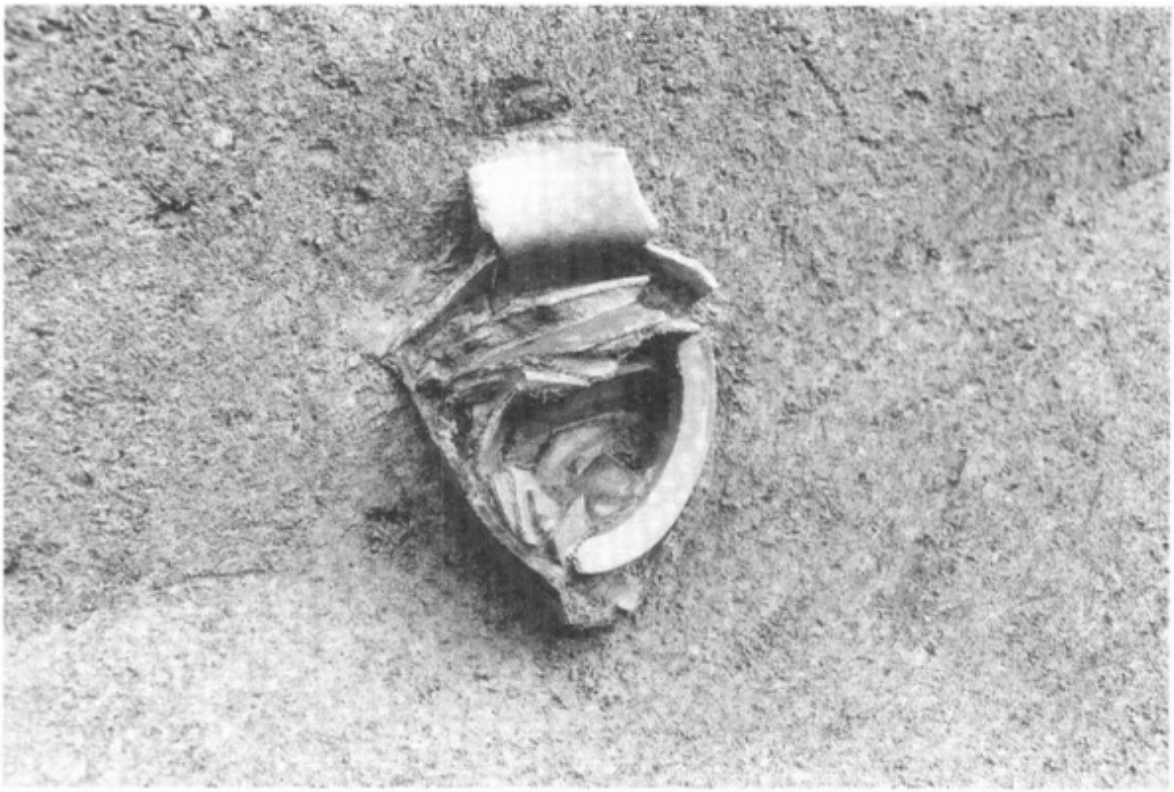
調査地X区全景　　南より



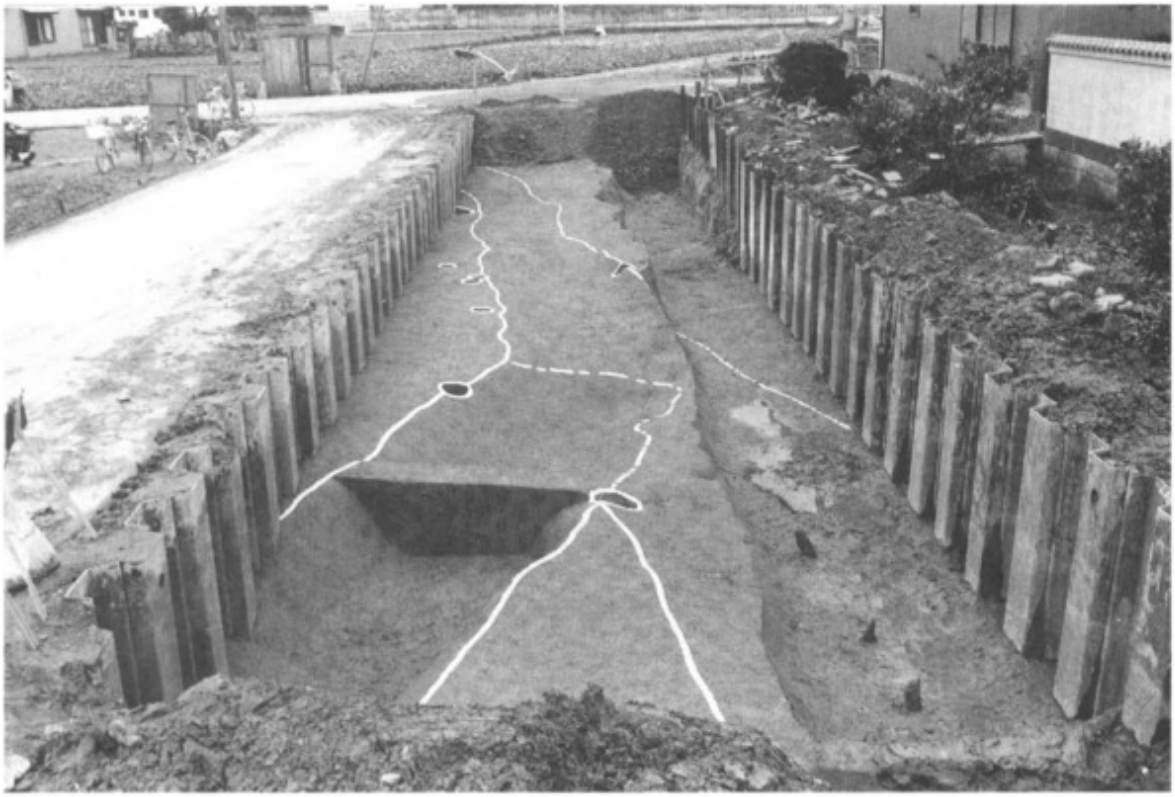
調査地X区溝SD02　　南より



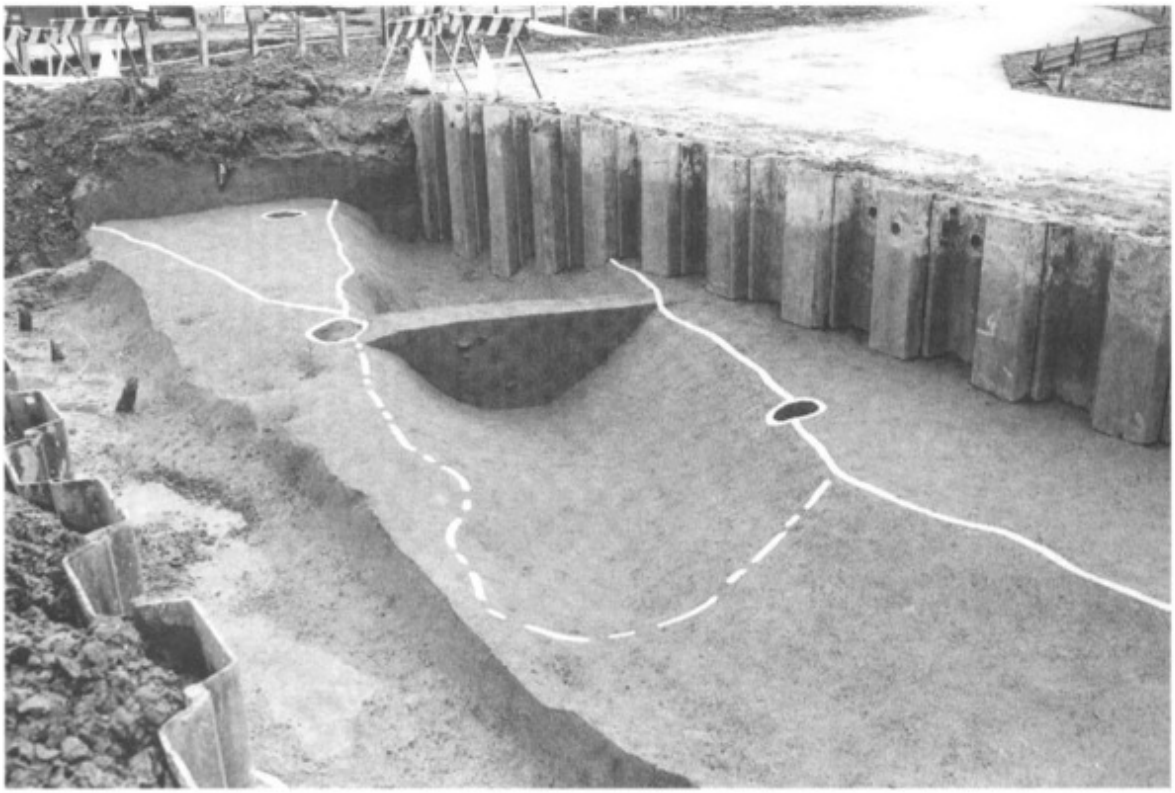
調査地X区溝SD02　堆積状況　　南より



調査地X区溝SD02　土器出土状況　　西より



調査地XI区全景　　北より

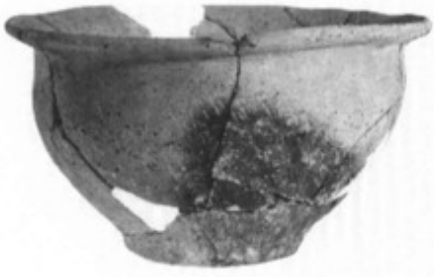


調査地XI区溝状遺構SD03　　南西より

図版8

1

2



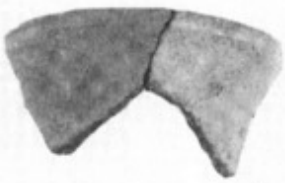
3

4

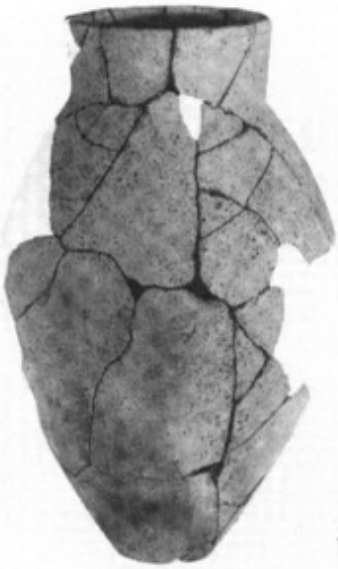
5

10

調査地Ⅸ区溝SD01，土壙SK01，調査地Ⅸ区溝SD02出土遺物


6

7


11

14

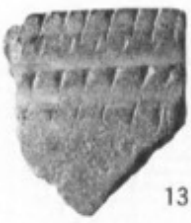
15

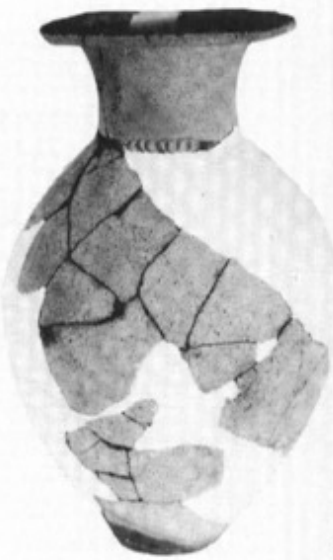
8

16

9

12


13


18

調査地Ⅹ区溝SD02，調査地Ⅺ区溝状遺構SD03出土遺物

II．名東遺跡発掘調査概要

——宅地造成工事に伴う発掘調査——

調査場所　　徳島市名東町２丁目129番地１（東区），207番地（西区）

調査期間　　平成３年９月30日～平成３年12月26日

調査面積　　東区：約230㎡，西区：約150㎡

１．遺跡の立地概要

名東遺跡は，四国山地に源を発し徳島市の北西平野部でその流れを北東方向に転じて吉野川に流れ込む鮎喰川の右岸，名東町に所在する。当地から南蔵本町に至る地域には，同水系の旧河川が形成した海抜７ｍ前後の幾つかの沖積微高地が発達しており，これらの旧微高地上に名東遺跡，鮎喰遺跡，南庄遺跡，庄遺跡などの集落遺跡が展開し，眉山北麓の一大遺跡群を構成している。名東遺跡は，この遺跡群の西南端に位置する縄文時代晩期～近世に至る複合遺跡である。

過去数次の調査による資料の蓄積によって同遺跡の様相は徐々に具現化しつつあるが，依然不明瞭な点が多いのも事実である。いわゆる「名東遺跡」は，行政区画上の名東町１丁目～３丁目の範囲内に所在する遺跡の総称であるが，微高地単位で複数の集落に分かれることは明白であり，また一部が，南庄遺跡や鮎喰遺跡など隣接遺跡と同じ微高地上にのる同一の集落である可能性も存在している。したがって，検出遺構を微高地単位で把握することも，遺跡の諸様相解明へ向けての課題のひとつとして重要視される[1]。

２．調査に至る経緯と経過

平成３年６月18日付で，文化財保護法第57条２第１項の規定に基づく２件の埋蔵文化財発掘の届け出がなされた。これを受けて９月10日に試掘調査を実施し，両地区ともに遺物包含層と遺構面の存在が確認されたため，徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会（委員長：岩崎正夫）は申請者と協議を行い発掘調査の実施で合意，文化財保護法第57条第１項の規定に基づき調査を実施するに至った。開発申請面積は，129番地１（以下東区）が約1,300㎡，207番地（以下西区）が約320㎡で，うち東区で約230㎡，西区で約150㎡を調査対象とし（第１図），工程上まず西区の調査を先行した。西区では，９月30日の重機による表土掘削から１カ月余りを要して遺構面２枚の調査を終了。西区の調査終盤から東区の調査を併行し，ここでも２枚の遺構面を捉え，12月26日に調査の全行程を終了した。

第1図 調査地位置図

3．西区の調査成果概要

(1) 層序

当調査区はハウス栽培の跡地で，現地表面での標高はT.P.＋約9.0mを測る。基本層序は第1，2層が盛土による現耕作土，第3層が盛土以前の畑作土で，3層上面が周辺部の水田面レベルにほぼ一致し，標高T.P.＋約8.6mを測る。第4層は旧水田耕作土で，部分的に攪乱を受けており，土師器・陶磁器片などが混在しているが耕作時期は不明である。第5層はくすんだ灰黄褐色粘質シルト層で第1遺構面をなす。標高はT.P.＋約8.3mを測る。本層厚約20cmで第6層黄褐色粘質シルト層に至り，第2遺構面となる。以下深さ約1mの試掘により，この範囲では同一層が続くことを確認したが，遺物の包含は認められなかった。

(2) おもな検出遺構・出土遺物

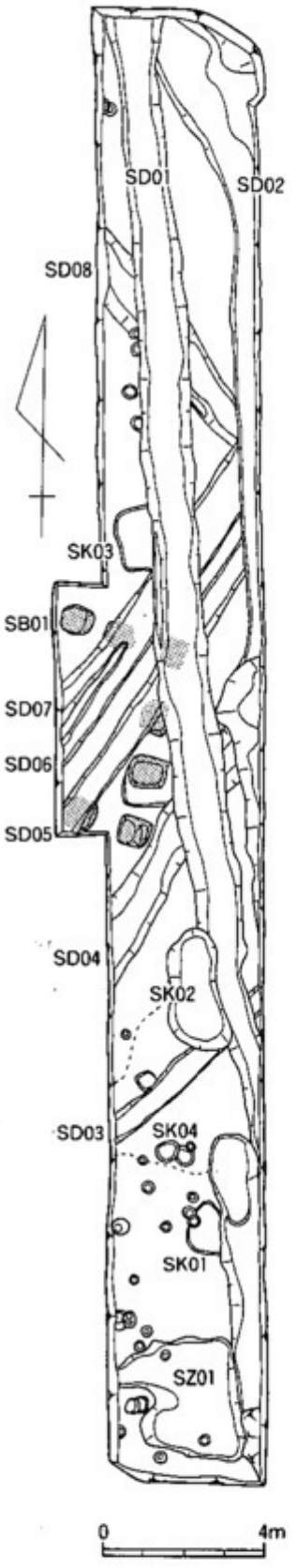
第1遺構面では，溝2条（SD－01，02），土壙3基（SK－01，02，03），ピット22基，不明遺構1基（SZ－01）を，第2遺構面では，溝6条（SD－03，04，05，06，07，08），掘立柱建物1棟（SB－01），ピット5基，土壙1基（SK－04）を検出した（第2図，図版1）。以下それらの主なものと出土遺物について概要を述べる。

溝SD01

ほぼ南北に走る溝で，幅約1.2m，深さ約30～50cmを測り，断面形は船底状を呈す。埋土は灰黄褐色系シルト層が3層に大別され，須恵器，土師器皿，陶器，白磁碗（図版4－68），染付碗，鉄釘，砥石などの破片が，上～中層を中心に若干出土している。

溝SD02

SD01の東側をほぼ並走する溝である。幅はSD01と同等以上と推定され，深さ約10～40cmを測る。断面形は船



第2図　西区検出遺構

底状を呈し，灰オリーブ色と黄褐色の粘質シルトを埋土とする。土師器，須恵器，青磁，白磁碗，染付碗（図版４－66，67）などの破片が若干出土している。調査区北端でSD01との切り合い関係が認められ，SD01に先行することが確認できた。

土壙SK01

長径約1.3m，短径約1.1m，深さ約10cmを測る。埋土は灰黄褐色粘質シルトで，ごく少量の土師器片を含む。

土壙SK02

長径約３m，短径約1.2m，深さ約25cmを測る。埋土は暗灰色混じりの黄褐色シルトで，土師器（椀・杯・小皿・甕または鍋），須恵器，磁器などの破片が若干出土している。

土壙SK03

SD01に切られ，検出部での長径約1.5m，深さ約10cmを測る方形状の土壙。埋土は灰褐色粘質シルトで，土師器甕，須恵器杯などの破片が僅かに出土している。

不明遺構SZ01

調査区南端で検出された一辺約2.5～2.8m，深さ約20～30cmを測る歪な方形状遺構。北西隅部が一段浅くなり，西方向へ溝状に延びていくものと思われるが，埋土等の状況から溜水遺構ではないと考えられる。埋土は灰褐色と灰色の２層の粘質シルトで，遺物は土師器の小片が僅かに認められただけである。底部に直径約20cm，深さ約20～25cmの２基のピットが検出された。ともに土師器の小片が２点ずつ出土したのみである。

以上が，第１遺構面における検出遺構，出土遺物の概要である。

第２遺構面では，溝，掘立柱建物跡に遺構の切り合いによる新旧関係が認められたが，いずれも同じ面で検出されたため，同一遺構面とした。

溝SD03

南西－北東方向の底部がほぼ平坦な浅い溝で，幅約60cmを測る。深さは約10～20cmで，上部の大半が削平されたものと思われる。にぶい黄褐色粘質シルトを埋土とし，無遺物。

溝SD04

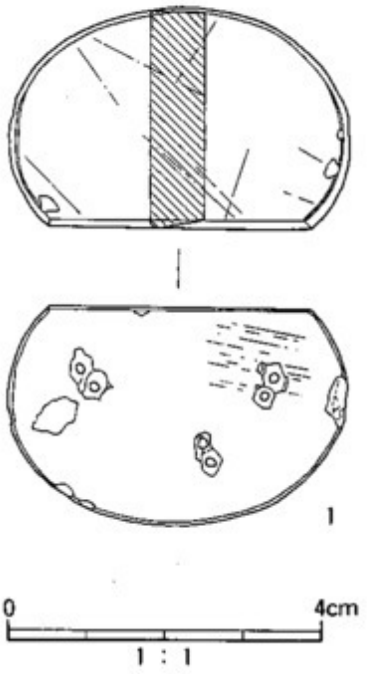
南西－北東方向の溝で，幅約１～1.3m，深さ約40～50cmを測る。断面形は船底状を呈している。埋土は灰褐色シルトをベースに黄褐色シルトが混在し，概ね10層に細分される。出土遺物としては，小片であるが土師器（椀・内外面丹彩杯），須恵器（甕・広口壺）などがある。

溝SD05

南西－北東方向の溝で，幅約80cm，深さ約15cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトの単層で，内外面丹彩の土師器杯，須恵器甕，鉄製品（釘？）などの破片が少量出土している。

溝SD06，07

SD05の北側を並走する。ともに幅約50cm，深さ約20cmを測り，途中幅約１mの１本の溝となる。埋土は暗灰黄褐色シルトの単層で，出土遺物には，石帯（第３図，図版４－１），須恵器甕，土師器（杯・皿・甕），黒色土器(B)椀などの破片，土錘３点（図版４－63～65）などがある。石帯(1)は，横幅4.3cm，縦幅2.8cm，厚さ７mmの丸鞆で，石材は頁岩である。裏面には金具留めの潜穴が３カ所あり，うち下部の２カ所は底辺に対して斜めに位置しており，型式的には最新段階のＦ２型式に位置づけられる。(3)



第３図　出土石帯

なおSD04，05，06，07は，走向の一致，出土遺物などから大幅な時期差はないと思われる。

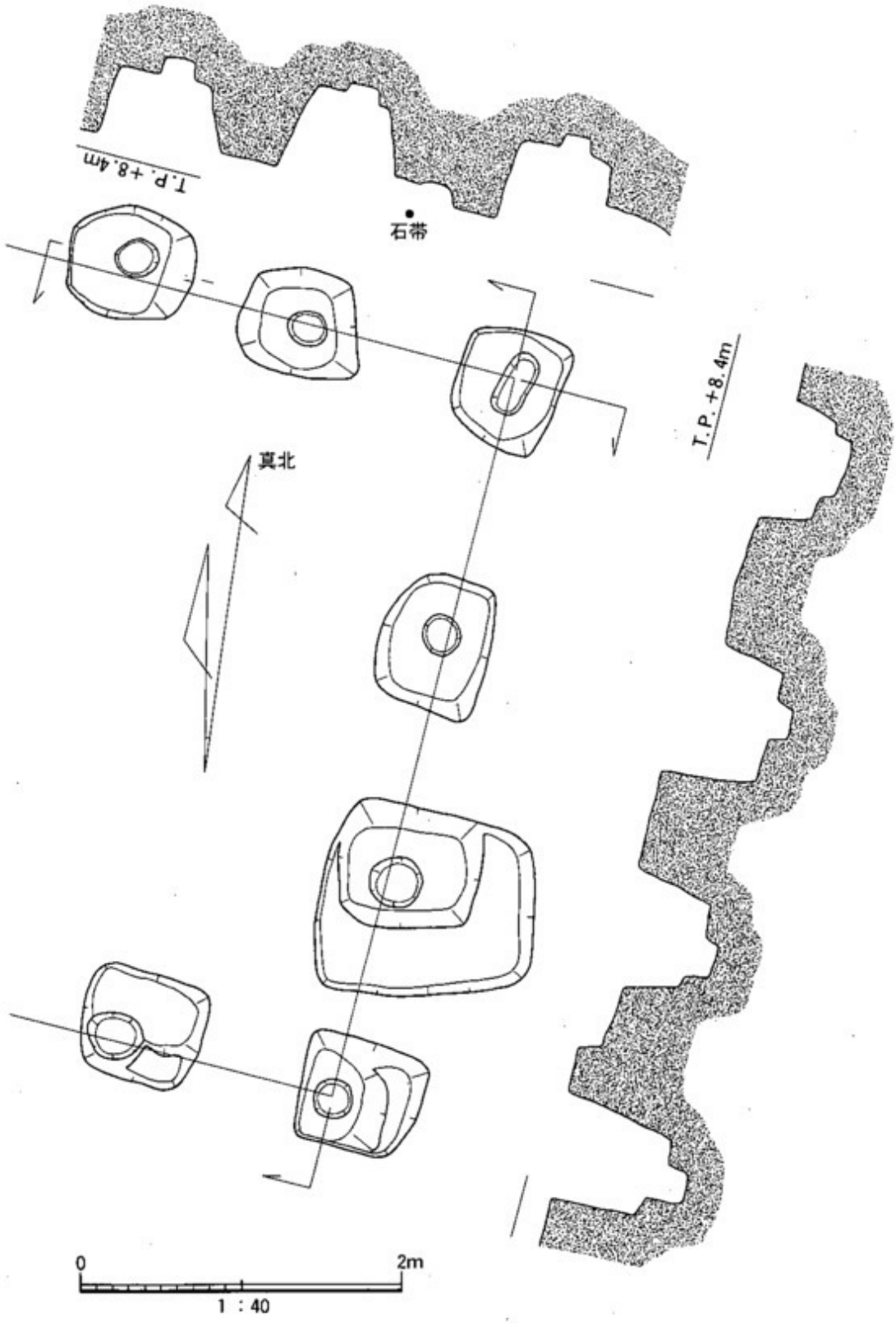
溝SD08

北西－南東方向の溝で，検出溝のなかで最も先行するものである。幅約90cm～1.3m，深さ約30cmを測る。埋土はにぶい黄橙色粘質シルトで，土師器（甕？）片が出土している。

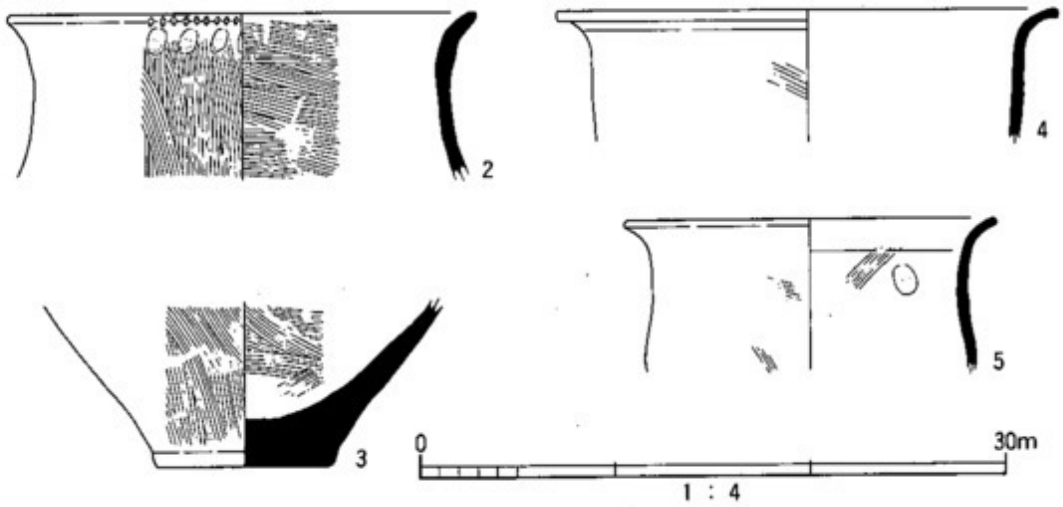
掘立柱建物SB01（第４図，図版２，３上）

柱穴掘形の平面形がいずれも約70cm×80cmのほぼ正方形を呈し，深さ約50cm～90cm，柱痕部掘形径約25cm～30cmを測る大型の掘立柱建物である。なお柱穴のひとつは，その南東部に幅約20～40cmのテラス状の掘形を有し，この部分を含めると一辺約１～1.4mの大規模な柱掘形となる。しかしこの柱穴に限ってみられる形態で，その意味するところは不明である。

同建物の全容は検出できなかったが，桁行３間×梁行２間もしくはそれ以上の規模の建物が想定される。柱間寸法は東桁（梁）行が南から1.4－1.6－1.6m，北梁（桁）行が東から1.4－1.2mを測る。建物主軸は，桁行３間×梁行２間の南北棟と仮定すれば，真北からのずれは東へ約６度である。



第4図　掘立柱建物SB01



第５図　土壙SK04出土土器

柱穴埋土は，いずれも灰黄褐色および黒褐色を主体とした粘質シルトが，４～７層の不規則な混在層として認められた。いずれにおいても柱痕状の堆積は認められず，柱材抜き取り後の柱穴内残土の乱堆積状況を示しているものと解される。

時期特定が可能な遺物の柱穴内からの出土はないが，溝SD05～07との切り合いから，これらの溝に先行する建物である。

土壙SK04

長径約60cm，短径約45cm，深さ約５～10cmの浅い窪地状の遺構である。埋土はベース層がやや茶褐色にくすんだ程度のもので，掘形の見極めが困難であったが，土器片が集中的に出土したため土壙として捉えた。出土土器は畿内第２様式併行に比定される甕に限定される（第５図，図版４－２，４）。甕はいずれも如意形口縁をなすが，体部に張りを持つもの（２，５）と持たないもの(4)がある。２は口縁部が緩やかに外反し，口縁端部に刻み目を施す。また外面縦方向，内面横方向のハケ調整を施す。３は２の底部であり，復元器高30cm前後を測る。４は，口縁部が大きく外反し端部がやや肥厚する。

自然落ち込みSX01

土壙SK04付近から北側に約４ｍの範囲で，深さ５cm前後の浅い落ちが確認された（第２図中の破線の範囲）。橙茶褐色土が一段低い自然地形に堆積した程度のものと思われるが，土壙SK04出土のものと同形態の甕の破片，サヌカイト剥片などがごく少量出土しており，当該期の薄い包含層を形成したかたちになっている。

4．東区の調査成果概要

(1) 層序

本調査区の地目も西区同様もとハウス栽培地である。現地表面での標高はT.P.＋約8.0mを測り，西区周辺部との比高差は，－約0.4mである。

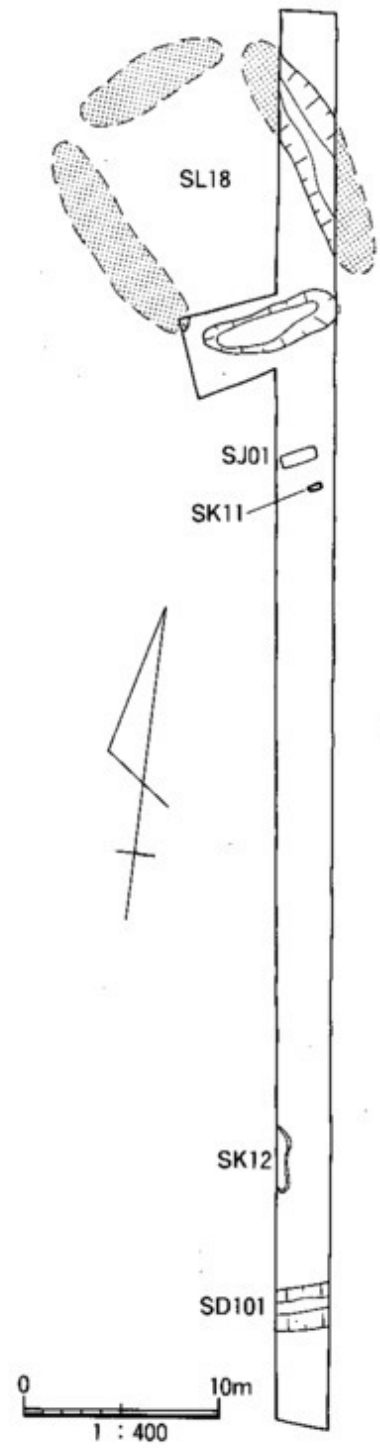
基本層序は，第1層が現耕作土，第2・3層が旧水田耕作土aと床土（マンガン含有層），第4層が旧水田耕作土b（黄褐混じり灰オリーブ粘質土），第5層がにぶい黄褐色粘質シルト層（第1遺構面：標高T.P.＋約7.6m），第6層が黄褐色シルト層（第2遺構面：標高T.P.＋7.4～7.3m）である。

(2) おもな検出遺構・出土遺物

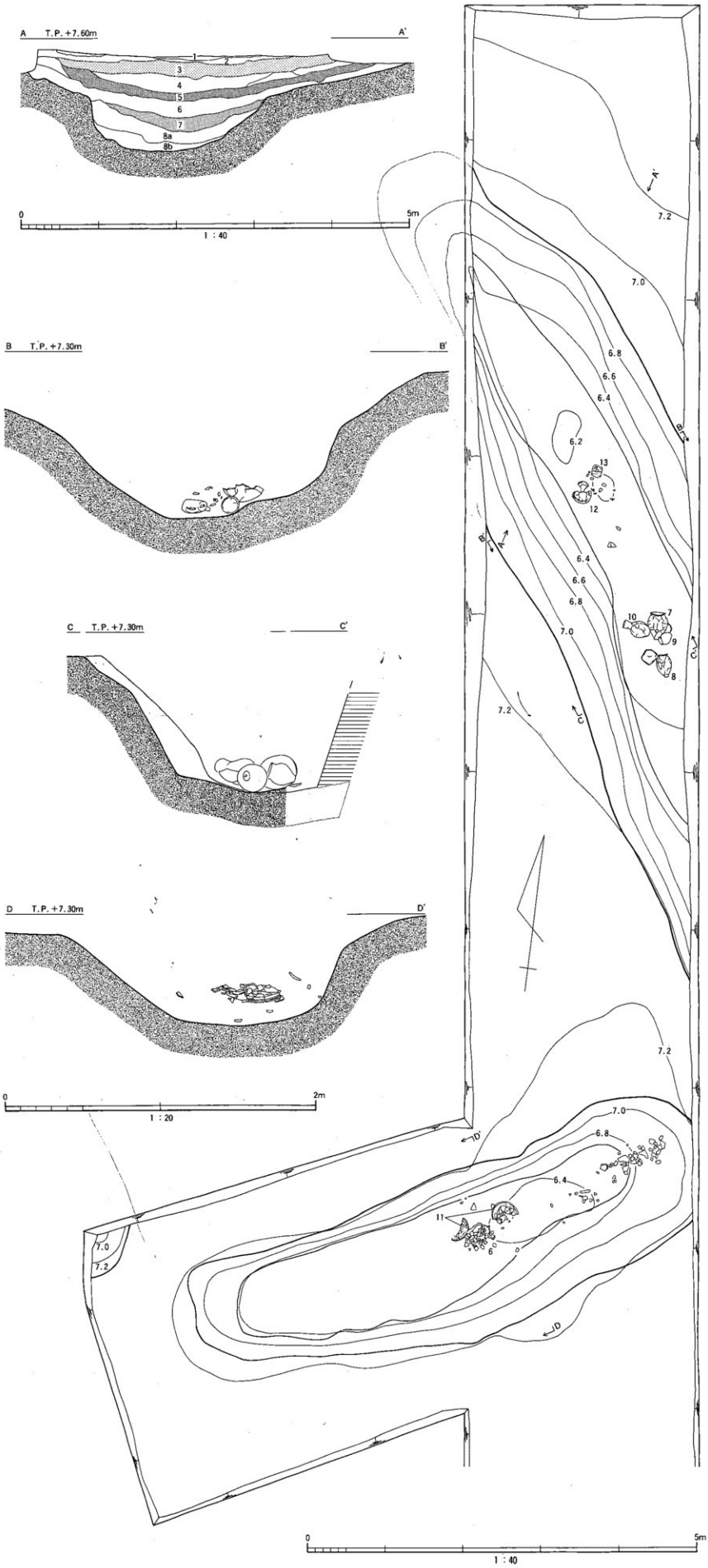
第1遺構面では溝6条（SD－11，12，13，14，15，16）と柵1列（SH01）が検出されたのみである（図版5，ただし柵列掘削後）。第2遺構面では方形周溝墓1基（SL18），木棺墓1基（SJ01），土壙1基（SK11），溝1条（SD101），焼土壙1基（SK12）が検出された（第6図）。

溝SD－11，12，13，14，15，16，柵列SH01

調査区（全長72m）を南北方向に貫通する溝で，幅約30～50cm，深さ約10～30cmを測り，断面U字形を呈する。埋土は，灰黄褐色または灰褐色の弱粘質シルトである。切り合いによる新旧関係が認められ，溝SD16の東沿いには，これに先行する溝SD15の埋土を掘り込んで，径20cm前後，深さ50cm前後の柱穴が約2m等間で25mに及んで検出された。同溝に付随する柵と考えられる。遺物は，SD14底部から内外面丹彩の土師器杯（図版5－69）が出土している。なおこれらの溝の方向は，当地域に残る条里地割りの方向に一致している（第1図）。



第6図　東区検出遺構
（第2遺構面）



第7図　方形周溝墓SL18（コンタ単位：m）

方形周溝墓SL18（第７図，図版６～９）

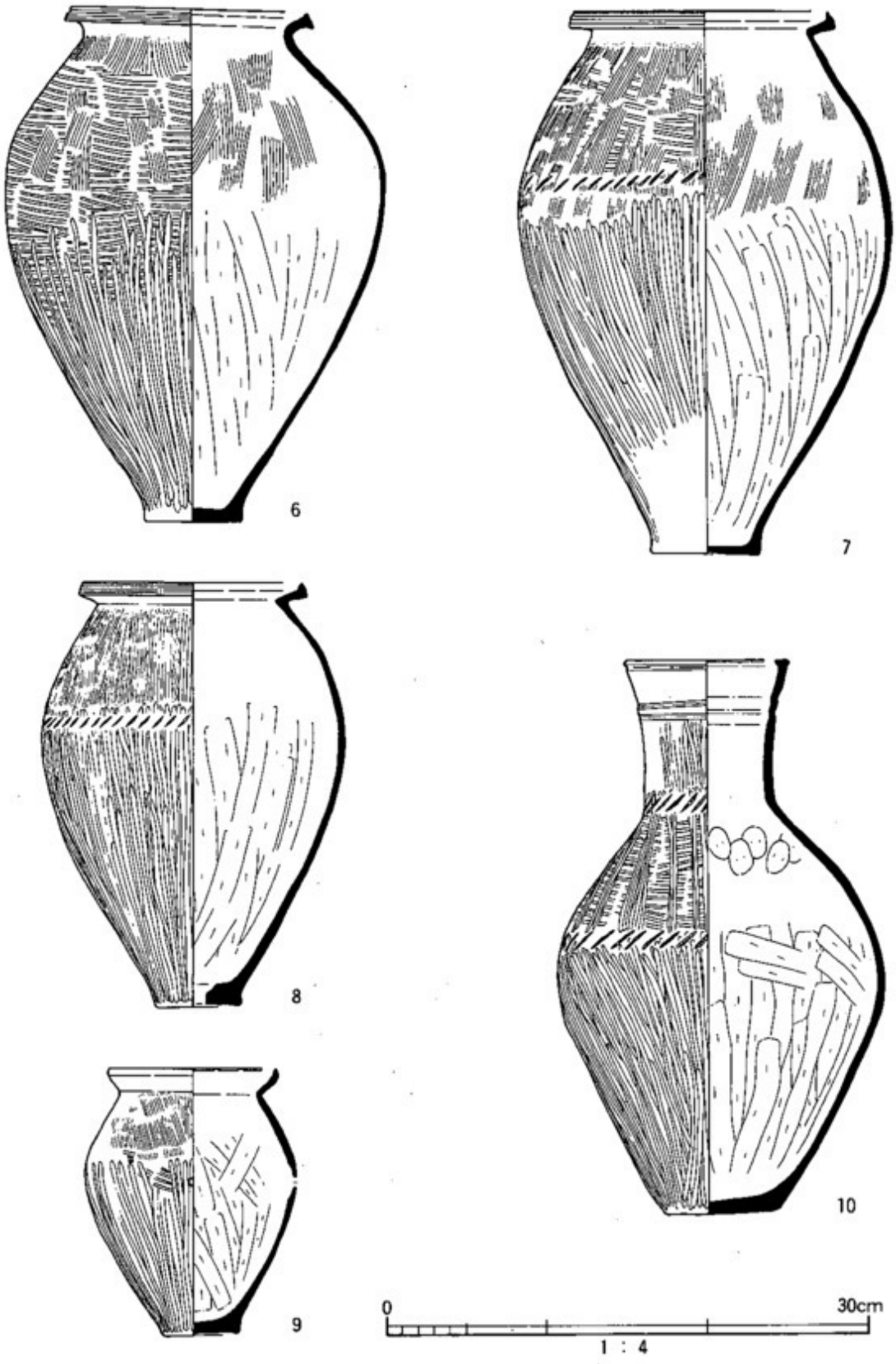
調査区内北側で，南東溝の全体と北東溝の中央部，南西溝の南東端を検出した。全容を検出できなかったため，中央部周辺に埋葬施設の痕跡が遺存するか否かは不明であるが，いずれにしても墳丘盛土は残存していない。

検出された各周溝の規模は，北東溝が最大幅約2.4m，最深約１m，南東溝が全長約７m，最大幅約2.1m，最深約0.7mを測る。検出部分から，最大長16m前後，最大幅14m前後の規模の方形周溝墓であることが推定される。

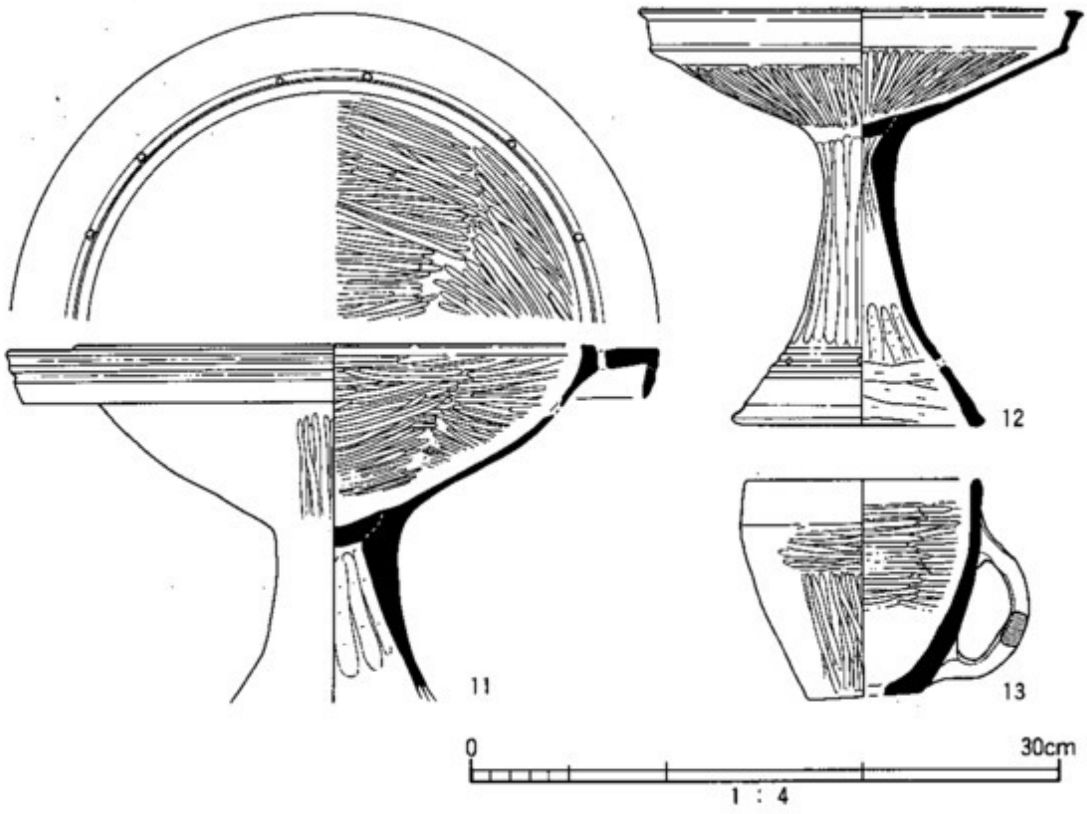
周溝埋土は，北東溝，南東溝ともにほぼ同様の堆積状態を示し，色質が明瞭に異なる土が層的に安定した堆積を成すため分層が容易であった。以下北東溝における堆積埋土層について概要を述べる（第７図，図版７：上）。

埋土は概ね８層に分層される。第１層：灰褐色弱粘質シルト，第２層：暗灰黄褐色弱粘質シルトでともに層厚10cm前後の薄い層であるが，調査区壁面において幅約６mにわたって堆積することが確認された。明らかにマウンド崩壊後の堆積層として捉えることが可能である。第３層：黒褐色粘質シルト，第４層：黒色混在の褐灰色粘質シルト，第５層：黒色粘質シルトで，第３層，第５層においては遺物の集中的出土が認められた。第６層：にぶい灰黄褐色弱粘質シルト，第７層：褐灰色弱粘質シルト，第８ａ・ｂ層：灰黄褐色弱粘質シルトで，マウンド崩壊以前に堆積した可能性が強いのは，第７層と第８ａ・ｂ層である。

周溝内出土遺物には，溝底部の供献土器として，北東溝の甕（７～９），壺（10），高杯（12），把手付き鉢（13），南東溝の甕(6)，高杯（11）がある（第８，９図，図版10，11）。甕(6)は，胴部の張りが強く，口縁部が「く」字状に外反し，端部を上下に拡張させ端面に２条の凹線を巡らす。体部外面は，タタキの後刷毛調整を施し，下半部にヘラ磨きを施す。内面は，刷毛調整と下半部縦方向のヘラ削りである。なお底部外面にも同一方向のヘラ磨きが施される。甕(7)は，「く」字状に大きく外反する口縁部を有し，端部を上方に拡張させる。口縁端面には２条の凹線を巡らす。体部外面は，タタキ＋刷毛＋下半部ヘラ磨きで，胴部に刺突文を巡らす。内面は刷毛＋下半部ヘラ削りである。甕(8)も「く」字状に大きく外反する口縁の端部を上方に拡張させ，端面に２条の凹線を巡らす。体部外面は，タタキをほぼ掃き消す刷毛調整の後，下半部にヘラ磨きを施す。内面は下半部に縦方向のヘラ削りを施す。底部穿孔土器である。甕(9)は小型品である。口縁部は内彎ぎみに立ちあがり，端部が受け口状を呈する。体部外面は，タタキの痕跡を微かにとどめる程度の刷毛調整と，下半部にヘラ磨きを施す。内面は概ね縦方向のヘラ削りである。胴部に径５㎜の小孔を穿



第８図　方形周溝墓SL18出土土器(1)



第９図　方形周溝墓SL18出土土器(2)

つ。壺（10）は，胴長の体部から緩やかに外反しながら伸びる口頸部をもち，口縁端部は内外に拡張させ，水平端面に２条の凹線を巡らす。また外面端部直下に１条，頸部にも２条の凹線を巡らし，肩部と胴部には刺突文を巡らす。体部外面はタタキ＋ヘラ磨き，内面は下半部に縦と斜め方向のヘラ削りを施す。高杯（11）は，浅い椀形の杯部に肥厚した水平口縁を付し，口縁端部を内向ぎみに垂下させ，端部外面上半には２条の凹線を巡らす。杯部と水平口縁の境には６組12個の小孔を穿ち，杯部には径６㎜の穿孔が１カ所認められる。杯部内面は横方向の精緻なヘラ磨きを施し，底部は円盤充塡法による。高杯（12）は，深い皿形の杯部から屈曲して斜め外方に立ち上がる口縁をもち，端部を拡張させる。端面には凹線が２条巡る。口縁外面はナデにより成形され，屈曲部に稜をもつ。脚部裾には３条の凹線を巡らせ６つの小孔を穿つ。杯部は内外面ともに縦方向のヘラ磨き，脚部は外面凹線上方部がヘラ削り，内面裾部が横方向のヘラ削りである。杯底部は高杯（11）同様円盤充塡法による。把手付き鉢（13）は，深い鉢形の体部内外面にヘラ磨きを施す。底部に焼成前穿孔がなされている。

以上が周溝内供献土器であるが，埋土中からも弥生土器，石鏃，細部調整剝片，石杵と思われる破片などが出土しており（第10・11図，図版11），その出土状況は前述のとおり，北東溝，南東溝ともに第3・5層に集中する。

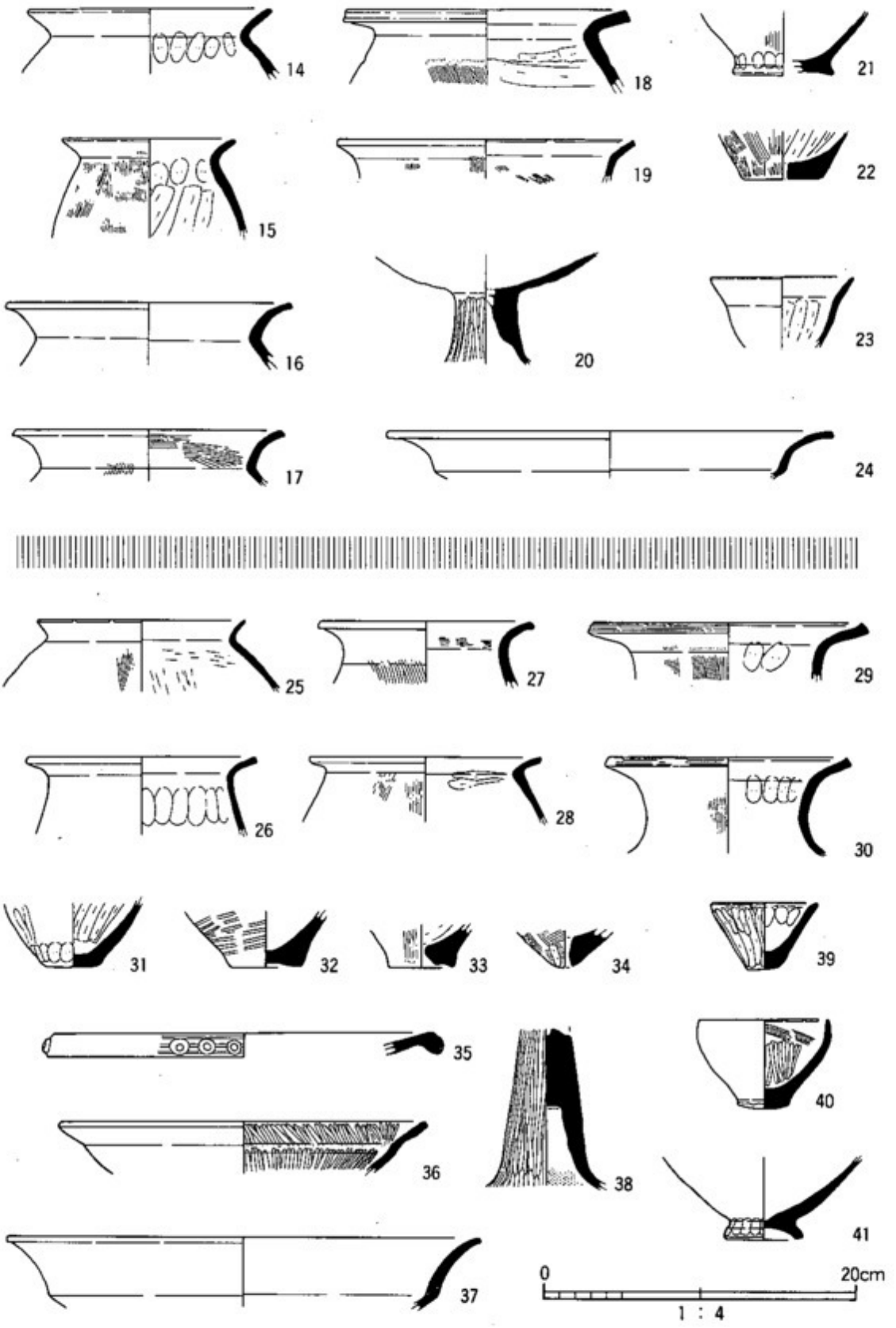
土器は完形のミニチュア鉢（39，40）を除き，他は原形復元が不可能なものである。器種としてはミニチュア鉢のほかに，甕（14～18，25～28），壺（29，30，35），高杯（20，24，36～38），鉢（19，41）と底部（21，22，31～34）などがある。なお，第10図の上段が第3層からの，下段が第5層からの出土である。

いずれも磨滅が著しく成形法が不明瞭なものが多い。タタキの痕跡を明瞭に残すものは底部（32）など僅かである。甕は，ほとんどのものが口縁端部を肥厚させずに，同じ厚みか先窄まりで丸くおさめるものと，ナデにより端面を平らに面どるものが目立つ。壺（29，30）は，口縁端部を上方へ僅かに肥厚させ，端面には弱い凹線を2条巡らす。壺（35）は，垂下する口縁端部外面に3条の凹線を巡らし，円形浮文を付す。高杯には，椀形の杯部をなすもの（20）と稜をもって口縁部が立ち上がるもの（24，37）などが見られる。（24）は（37）に比して立ち上がりが低く外反度が大きい。なお高杯脚部（38）の裾内面には，布目状の圧痕が認められる。ミニチュア鉢（39）は逆円錐台形を呈し，外面に丁寧なヘラ削りを施す。ミニチュア鉢（40）は，体部が内彎ぎみに立ち上がり半球状を呈する。底部成形は粘土充塡手法による。鉢（23）は，体部がやや内彎ぎみに立ち上がるが，口縁部が外傾し直線的に伸びる。内面ヘラ削りを施す。鉢（41）の底部は，高台状の上げ底を呈する。底部（22）は，平底で中央に穿孔を施す。底部（33）は，やや上げ底で穿孔を施す。底部（34）は，尖底に穿孔を施す。

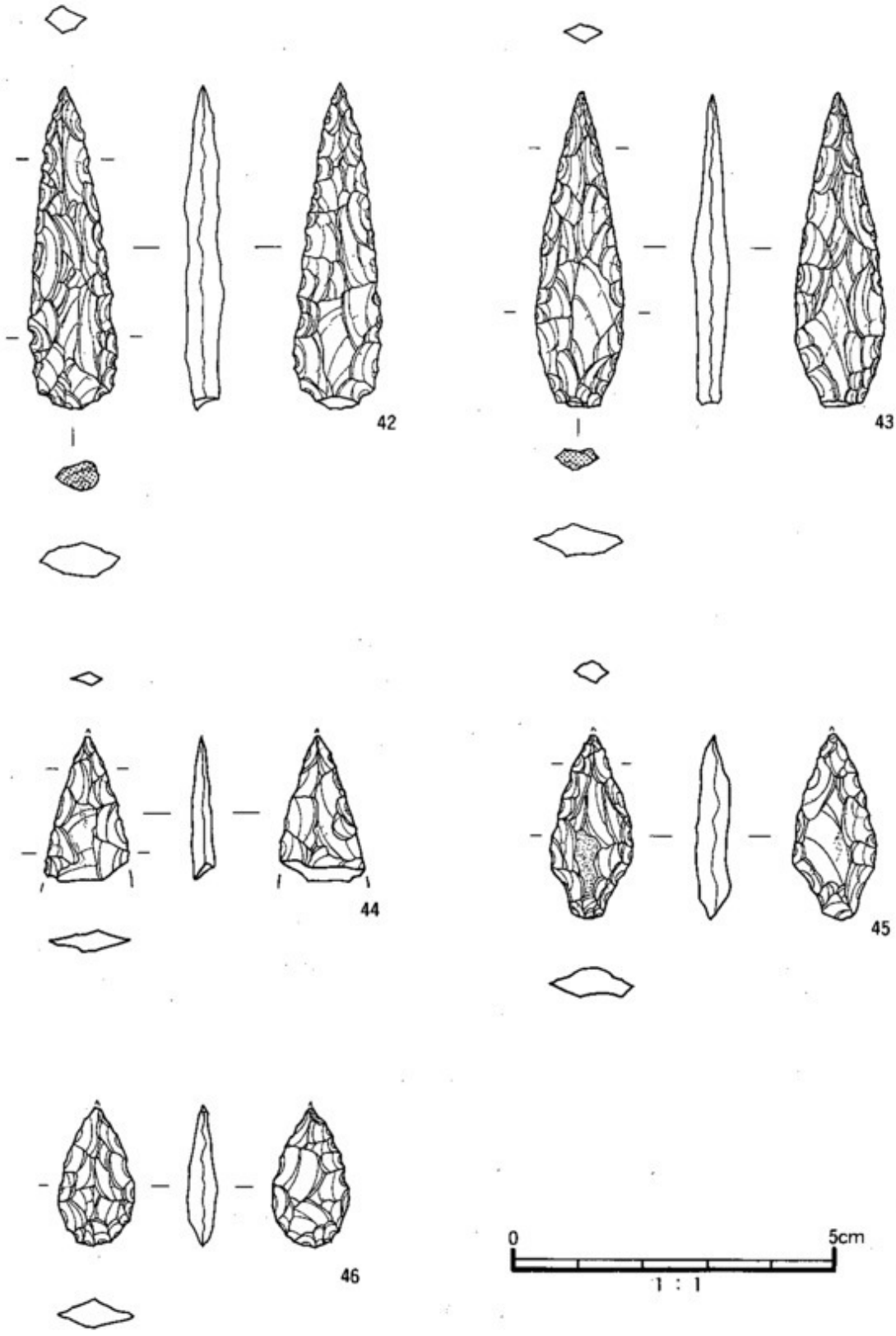
石鏃は合計5点出土している（第11図，図版11）。（42），（43）は北東溝，（44）～（46）は南東溝からの出土であり，すべてサヌカイト製である。各石鏃については表1のとおりである。

No.	基部形態	折損部	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	先端角度	型　式
42	凸基有茎	茎　部	49	14	6	3.7	45°	有茎式
43	凸基有茎	茎　部	48	14	6	3.1	30°	有茎式
44		基　部	22	13	4	0.9	48°	
45	凸基有茎	－	28	13	5	1.8	51°	有茎式
46	凸基無茎	－	21	12	5	1.0	60°	凸基Ⅰ式

表1　方形周溝墓SL18出土石鏃一覧表（型式分類は註4に拠る）



第10図　方形周溝墓SL18出土土器(3)



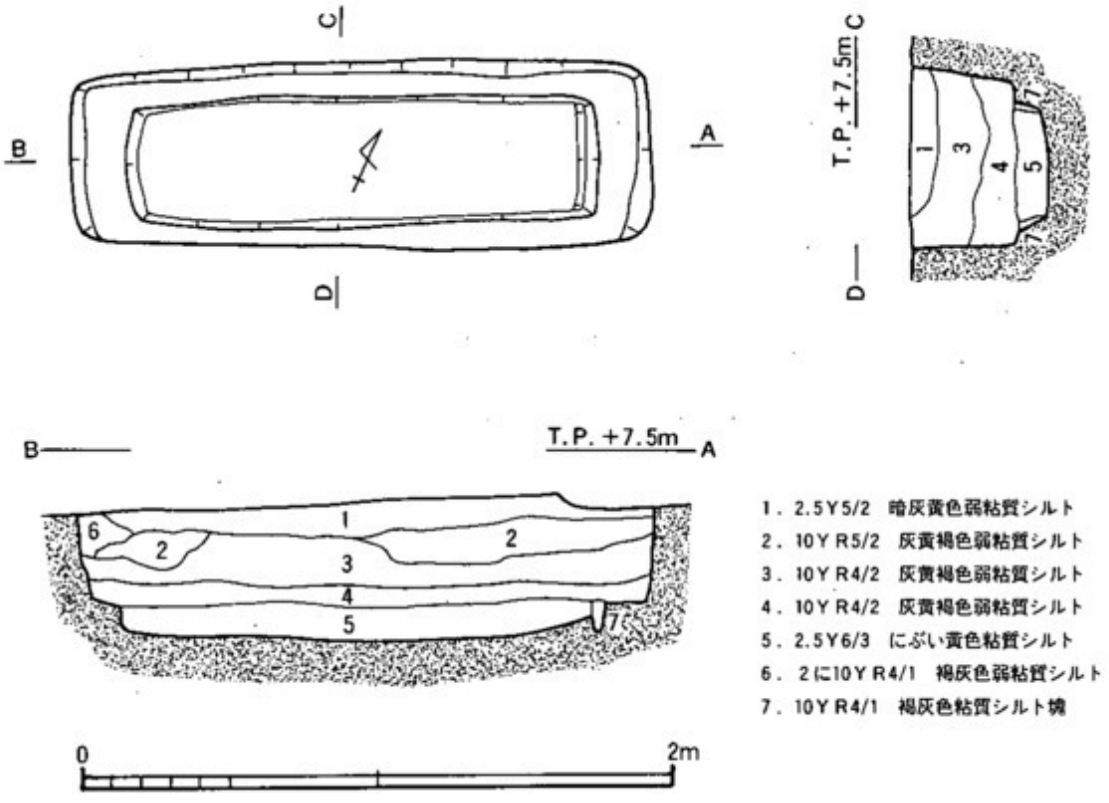
第11図　方形周溝墓SL18出土石鏃

細部調整剝片（図版11－70）は，横長剝片の両端を切断後，鋭利な側縁部に調整を施し，スクレイパー状の刃部を作出したものである。サヌカイト製。北東溝出土。

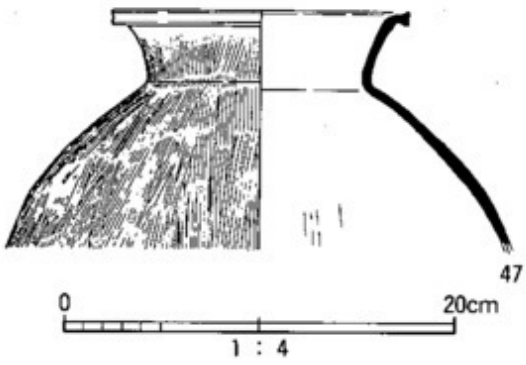
石杵と思われる破片（図版11－69）は，復元長５～６㎝の砂岩の小円礫片で，端部を欠失しているため使用痕は不明である。赤色顔料の付着も認められないが，周溝内出土の円礫がこれに限られることや，当調査区の南側で同年度に調査を実施した竪穴住居SA05において，水銀朱の付着した同質砂岩製の石杵・石臼が出土していることを考慮すると，石杵の可能性が強いと思われる。

木棺墓SJ01（第12図，図版12：上）

方形周溝墓SL18の南６ｍの所で検出された。全長約1.95m，幅約60㎝，最深約50㎝を測り，うち床面部は長さ1.6m×幅40㎝×深さ10～15㎝で２段掘りの形跡をとどめる。掘形壁面はほぼ垂直をなす。埋土は７層に大別され，ほぼ水平に安定した堆積をなす。最下層の第５層は，他の埋土層に比べて粘性が強い。なお，第７層として識別した土は，塊状に比較的硬く締まったもので，断片的にではあるが２段掘り部分の外周に認められ，なかでも東短片部においては幅約５㎝，深さ約６㎝の溝状掘り込みの痕跡とともに検出された。



第12図　木棺墓SJ01



第13図　土壙SK11出土土器

このことから，組合せ式箱形木棺を埋葬主体とする木棺墓を想定するが，この場合，棺幅40cmは成人埋葬には狭すぎる幅である。

なお，供献遺物はもとより埋土中からの遺物の出土も見られなかった。ちなみに当墓の主軸方向は北35°西である。

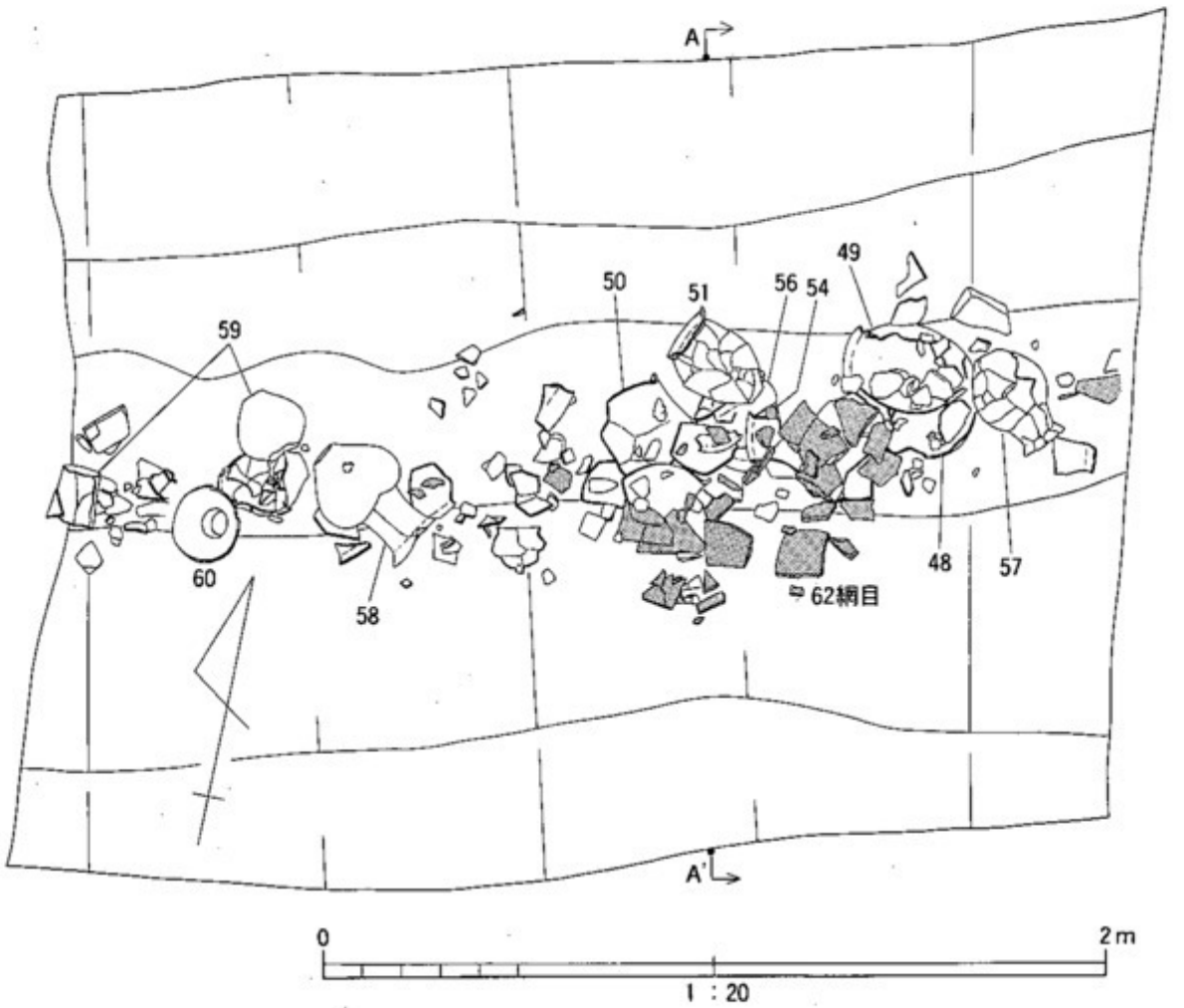
土壙SK11

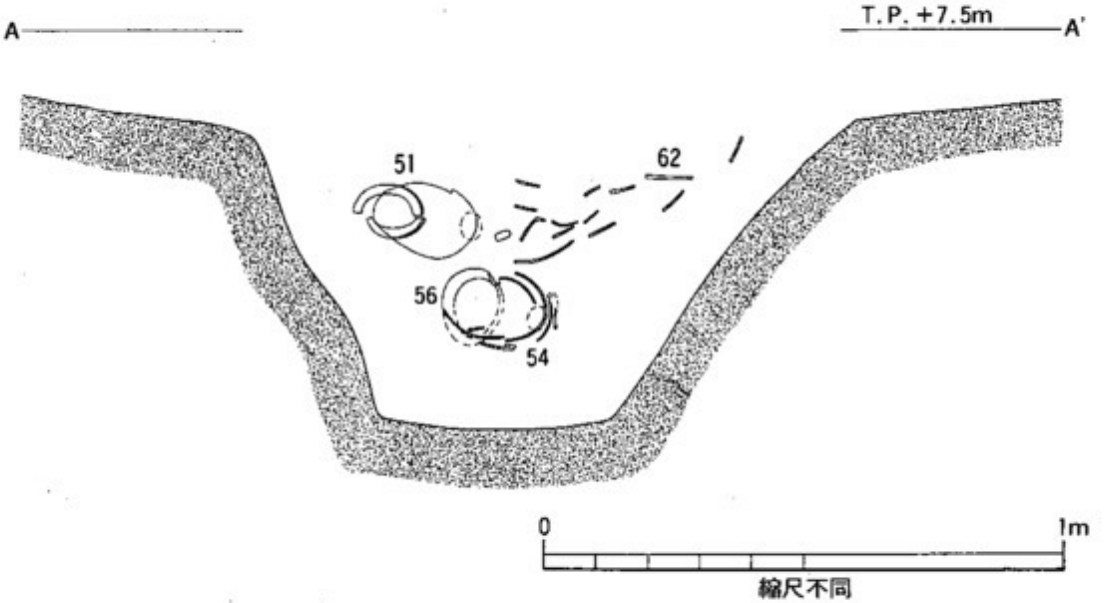
長径約90cm，短径約40cmで，深さ約20cmの浅い椀状の窪みを呈する。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトの単層で，壺（47）が出土している（第13図）。壺（47）は，胴部の張りが大きく，頸部が短く外傾する広口壺で，大きく屈曲する口縁を有する。口縁端部は上下に肥厚させ，端面はナデによって仕上げる。体部外面は刷毛調整を施し，内面は体部下半のヘラ削りの痕跡を微かにとどめる。

溝SD101（第14図，図版13）

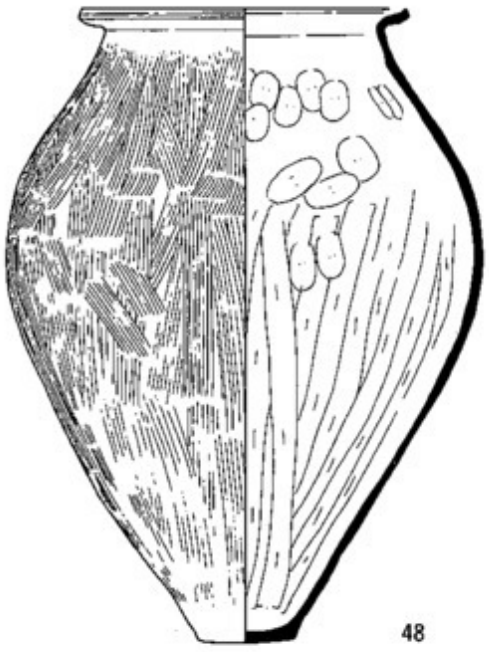
調査区南端付近で検出されたほぼ東西方向に走る溝である。幅約1.3～1.7m，深さ約60～80cmの断面逆台形状を呈するが，緩やかな傾斜をみせる肩部を含めると，その幅は2m以上を測る。埋土は3層に大別され，上から第1層：黄混じり黒褐色粘質シルト層，第2a・b層：黒色粘質シルト層，第3層：灰黄褐色粘質シルト層である。第2a・b層から甕（48～56），壺（57～60），高杯（61），鉢（62）など（第15～17図，図版14，15）が出土している。

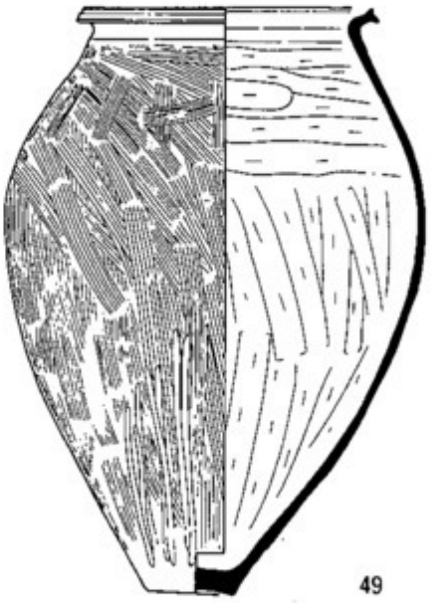
甕（48）は，体部の中位～上半部が張り出す。口縁部はやや彎曲ぎみに「く」字状に短く屈曲させ，端部を僅かに摘み上げる。端面には擬凹線が1条巡る。体部外面は刷毛調整，内面は下2/3に縦方向のヘラ削りを施す。甕（49）も（48）同様長い体部をもち，口縁を「く」字状に短く外反させる。端部は上下に肥厚させ，端面には擬凹線が1条巡る。体部外面は縦方向の刷毛調整の後，上半部に斜め方向の刷毛調整を施す。下部には僅かにヘラ磨きが見られる。内面は下2/3に縦方向の，上1/3に横方向のヘラ削りを施す。なお（48），（49）ともに口縁下部外面は明瞭なナデによって仕上げる。甕（50）は，底部が突出する縦長球形の体部をもち，口縁端部断面は矩形を呈する。体部外面はタタキをそのまま残し，内面は下半部が縦方向，上半部が斜め方向のヘラ削りである。甕（51）は，卵形のスリムな体部から肥厚して「く」字状に屈曲する口縁をもつ。口縁端部はやや受け口状に丸くおさめる。体部外面の刷毛調整は弱く，上半部には主として左下がりのタタキが明瞭に残る。

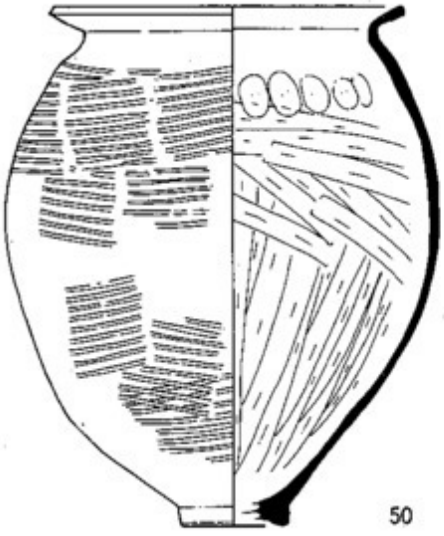

A
A'
59
60
58
50
51
56
54
49
48
57
62網目
0
2m
1 : 20

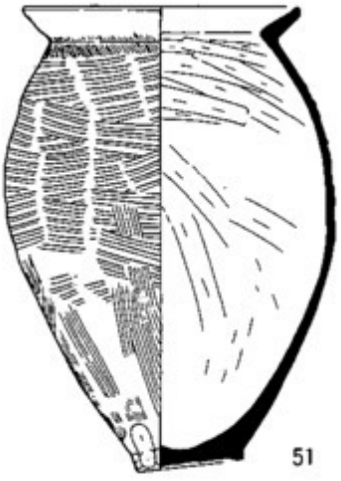

A
A'
T.P. +7.5m
51
62
56
54
0
1m
縮尺不同

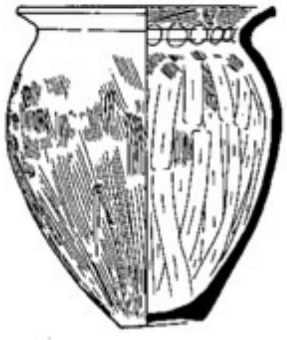
第14図　溝SD101

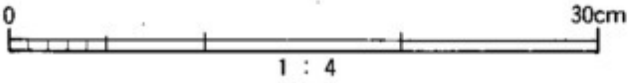




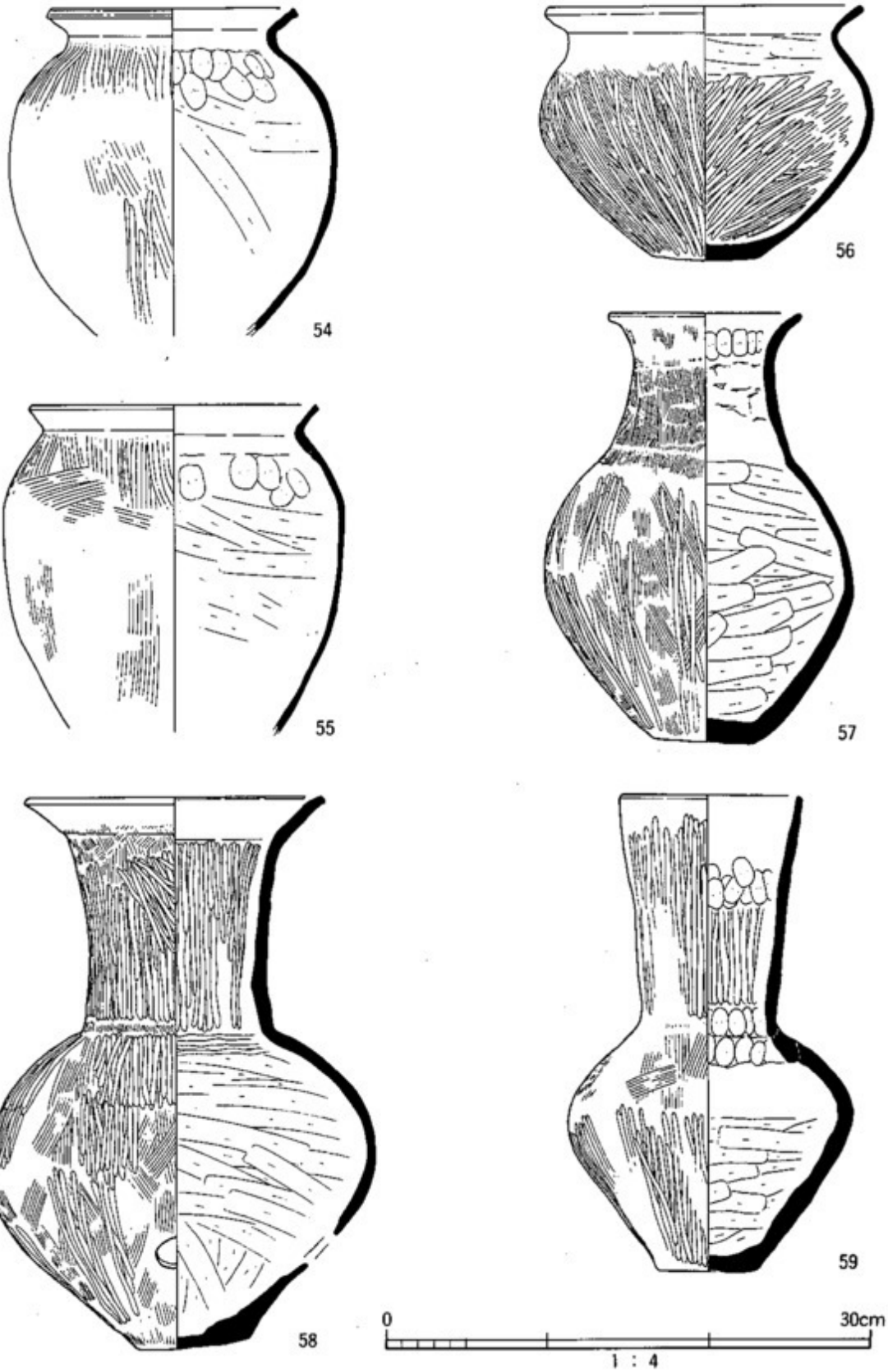




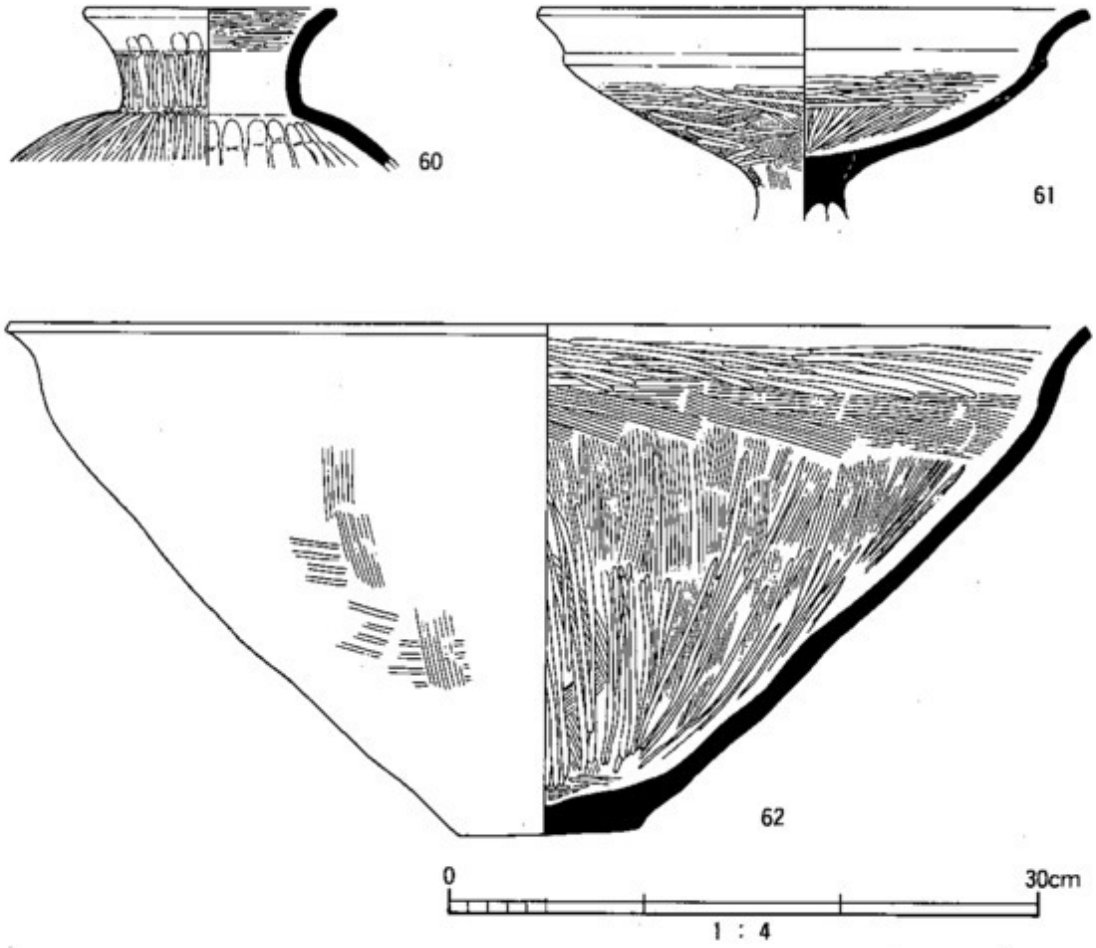




第15図　溝SD101出土土器(1)



第16図　溝SD101出土土器(2)



第17図　溝SD101出土土器(3)

内面は斜め～横方向のヘラ削りを施す。甕（52，53）はともに小型品である。（52）は，やや外反ぎみの口縁端部を断面矩形におさめ，内面には刷毛調整を施す。体部外面は刷毛，内面は刷毛の後縦方向のヘラ削りを施す。口縁への屈曲部は指押さえにより平坦な面を生じている。（53）は，体部最大径と同径の口縁を有し，直線的に外傾する口縁の端部は，部分的に矩形におさめるが，基本的にはそのまま先窄まりに流す粗雑な成形である。体部内外面とも刷毛調整である。甕（54，55）は，ともに磨滅が著しいが体部外面には荒い刷毛調整痕をとどめ，内面は斜め及び横方向のヘラ削りである。口縁端部は断面矩形におさめる。（54）は球形の体部をもつ。中型の甕（56）は，胴部上位が張る偏平状のもので，口縁部は肥厚しながらやや緩やかに「く」字状に外反する。端部は矩形と丸形の中間形態をなす。体部外面は刷毛＋上下方向のヘラ磨き，内面は上部を横方向にヘラ削りし，以下を斜め方向にヘラ磨きする。なお，甕はいずれも平底で，（49）～（51）は僅かに上げ底

状を呈する。

壺（57）は，球形の体部から頸部が内窄まりに立ち上がり，連続的に口縁部が外反する。口縁端部は丸くおさめる。外面は刷毛調整と胴部のみヘラ磨き，内面は体部に横方向のヘラ削りを施す。広口壺（58）は，中位が張った扁球形の体部にやや外反ぎみに直立する長い頸部をもち，口縁部が直線的に大きく外反する。口縁端部はナデによって面をとる。外面は胴部，頸部ともハケ＋ヘラ磨き，内面は頸部のみヘラ磨きで，体部は底部付近に縦方向，中～上部に横方向を主流とするヘラ削りを施す。なお，体部下部には穿孔がなされている。長頸壺（59）は，肩の張った体部から外傾して直線状に立ち上がる長い口頸部をもち，体部高と頸部高が近似する。口縁端部は丸くおさめる。外面は，体部下半と頸部をヘラ磨きで整形し，体部上半は刷毛調整痕を残す。内面は，体部下半に横方向のヘラ削り，頸部下半にヘラ磨きを施す。体部から頸部への屈曲部内面には，丁寧な指押さえがみられる。壺（60）は，口頸部が連続的に外彎する短頸広口壺で，外面は頸部以下をヘラ磨きし，内面は口縁外反部に横方向のヘラ磨きを施す。肩部内面は顕著な指押さえがみられる。

高杯（61）は，皿状の杯部端部が外面ナデにより明瞭な稜を生じて僅かに立ち上がった後，口縁部がやや短めに大きく外反する。口縁端部は部分的に矩形におさめる。杯部外面は刷毛＋横方向のヘラ磨き，内面は縦方向のヘラ磨きの後，上部を横方向にヘラ磨きする。口縁部内外面はナデ整形による。

鉢（62）は，器高26cm，口径55cmの大型品である。直線状に伸びる体部が口縁部に至って僅かに内彎し，そのまま連続的に外反していく。体部外面は磨滅が著しく，タタキと刷毛調整痕を微かにとどめる程度である。内面は縦刷毛の後，下部にヘラ磨き，上部に横刷毛を施し，口縁内面は横方向のヘラ磨きを施す。

焼土壙SK12（図版12：下）

溝SD101の北側５ｍのところで検出された。調査区外に広がるため全容は不明であるが検出部分は最大幅約3.5ｍで，なだらかに落ち込む不整形な掘形ラインを呈する。底部は凹凸が著しく深さも一定しないが，平均30cm前後を測る。埋土は黄褐色シルトをベースに焼土・炭化物の含有量の差により微妙に色調を変える層が不規則に混在するため，明確な分層は困難であった。ただ底部付近では厚さ１～５cmの焼土層が部分的に認められ，またその上層部では炭化材の遺存が顕著である。遺物は弥生土器の細片を僅かに含む程度である。遺構の性格は不明で「焼土壙」としたが，土器焼成のための土壙であろうか。いずれにしろ平面形，床部の状況などから住居跡の可能性はないと思われる。

5 小　　結

今回の西区調査地点は日枝神社の北西約250mに位置し，西方200mで鮎喰川の堤防に至る地点である。鮎喰川の旧氾濫原を間近に控えるが，試掘時に安定した地山面が確認されたため，当初弥生時代の遺構の密な検出も期待された。しかし少面積の調査でもあり，結果は中期前半に位置づけられる土壙1基（SK04）と，同時期の薄い包含層が部分的に確認されたのみで，住居跡などの生活遺構の検出には至らなかった。名東遺跡における当該期の遺構に伴う一括資料は県教委が調査を実施した天神地区[5]などにおいて散見される程度であり，該期については依然不明瞭な点が多く，集落構成等を論じる域には達していない。なお前期に関しては皆無と言っても過言でなく，現在名東遺跡における集落造営の完全な空白期を呈している。今後検出事例が挙がることに期待が寄せられる。

西区の調査成果として特筆すべき点は掘立柱建物SB01の検出である。SB01は官衙関連建物を想起させる規模を有する。『類聚三代格』巻第7「郡司事の条」によると，寛平八（896）年に「名東郡」が設置されたとあり，同建物が名東郡衙の一角を占める可能性もあると思われる。このことは同建物脇より出土した石帯が示唆するところでもある。石帯を伴う（大規模）建物は，これまでに庄遺跡（兵営西内線地区[6]，加茂名中学校地区，庄町3丁目地区）を中心に検出されており，名東郡衙が庄町を中心とした地域に所在していたとする見解が従来強い感があった。しかしその所在については依然不明であり，今回の名東町における検出は，転移の可能性も含めて名東郡衙の所在を考えるに際しての新たな課題を投じたと言える。

東区で検出された方形周溝墓SL18は，名東遺跡では18例目となる。昭和62年度の名東西都市下水路工事に伴う調査（名東西幹線地区）での検出を初例とし[7]，同年度の天理教国名大教会地区で6基[8]，翌63年度の名東西幹線地区で3基[9]，平成元年度の天満病院地区で7基[10]と，ここ数年で急増の傾向にあり，名東地区における方形周溝墓分布域の推定がなされるまでに至っている[11]。

方形周溝墓SL18は全容を検出していないためその形態に関しては不詳であるが，これまでの検出例から推察すれば，四隅が途切れ平面形がやや長方形を呈するタイプのものである可能性が強い。ただし周溝端部がなだらかに立ち上がっていき，いわゆる陸橋部が幅1mに達しない狭小なものであること，および後世削平を受けている点を考慮すると，はたして本来コーナー部が完全に途切れ，明瞭な陸橋部を形成していたものであるのか疑問が残るところではある[12]。当方形周溝墓の造営時期は，周溝底部の供献土器より弥生中期末

に比定される。なお，周溝埋没過程で流入した土器が僅少ながら層位的な新旧関係をもって検出された。大局的には両層（埋土第３層，第５層）の間に大幅な時間差は存在しないと思われるが，周溝底部供献土器との間には，明らかに形態的変移・時間的推移が看取される。もし，この層位的な推移の具象が，「墓の周溝」の埋没過程において生じやすい現象であるとすれば，今後遺存の良好な方形周溝墓の周溝において，土器編年ひいては方形周溝墓相互の時間的前後関係の究明に供される層位的資料が増加することにも期待したい。

木棺墓SJ03は，南側において周溝になり得る溝が検出されていないことなどから，方形周溝墓の埋葬施設である可能性は低く，周辺部埋葬の可能性が強いと考える。ただし，これまでの木棺墓の検出例をみる限りでは，２基以上が並列して埋葬されるという，形態上いわゆる「集合墓」的な様相を呈しており[03][04]，SJ03の単独的埋葬形態が，時期差によるものなのか方形周溝墓造営域における特異性としての現れであるのかは，木棺墓の検出例が少ない現段階では判断しがたい。名東遺跡における方形周溝墓と木棺墓という形態の異なる墓制の在り方の問題として，今後検出例の増加を待って，多角的方向からの検討が望まれる。

溝SD101は，遺物の出土状況などから方形周溝墓の溝とは考え難い。溝の性格については，今回の調査区において住居跡は検出されていないが，本調査区にほぼ南接する前回の調査区では住居跡群が検出されていることなどから，居住域と墓域を画する溝である可能性も指摘されよう。ただし本溝出土土器について見てみると，ヘラ磨きの顕在な広口長頸壺の存在，甕口縁端面における凹線文の退化あるいは擬凹線化，体部内面上部にまで至る顕著なヘラ削り，高杯の器形など諸特徴において，明らかに方形周溝墓SL18供献土器との間に変化が認められる[09]。方形周溝墓の造営からSD101埋没までの単なる時間差として捉えるべきものであろうか。仮に本溝が区画溝でないとすれば，墓域と居住域が明確に画されていなかった可能性も考えられる。

方形周溝墓，木棺墓の検出例が増加しつつある今日，居住域と墓域という相異空間を相関的に捉えることによって，集落構成がより明確に把握されてゆくものと思われる。

註

(1) これについては旧河道の検出が重要性をもつところであり，名東遺跡においてもその検出例は増加しつつある。

徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要２』1992年所収「Ⅳ．名東遺跡発

掘調査概要－宅地造成工事に伴う発掘調査－」ほか。

(2) 名東遺跡発掘調査委員会『名東遺跡発掘調査概要－名東町２丁目・宗教法人天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査－』1990年，図48「名東遺跡における方形周溝墓群推定域図」に基づきマッピングした。

(3) 亀田　博「銙帯と石帯」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論叢』1983年における型式分類に従う。

(4) 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性－とくに打製石鏃について－」『考古学研究』第35巻第４号，1989年。

(5) (6) 徳島県教育委員会『－県営名東団地建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－名東遺跡（天神地区）』1990年。

(6) 一山　典「庄遺跡－兵営西内線地区－調査概要」『徳島市史だより』第11号，1985年。

(7) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要１』1989年所収「第Ⅲ章　名東西都市下水路築造工事に伴う名東遺跡発掘調査概要－昭和61・62年度－」

(8) (2)に同じ。

(9) 本書所収「Ⅰ．名東遺跡発掘調査概要－名東西都市下水路建設工事に伴う発掘調査」

(10) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要２』1992年所収「Ⅰ．名東遺跡発掘調査概要－老保健施設建設に伴う発掘調査－」

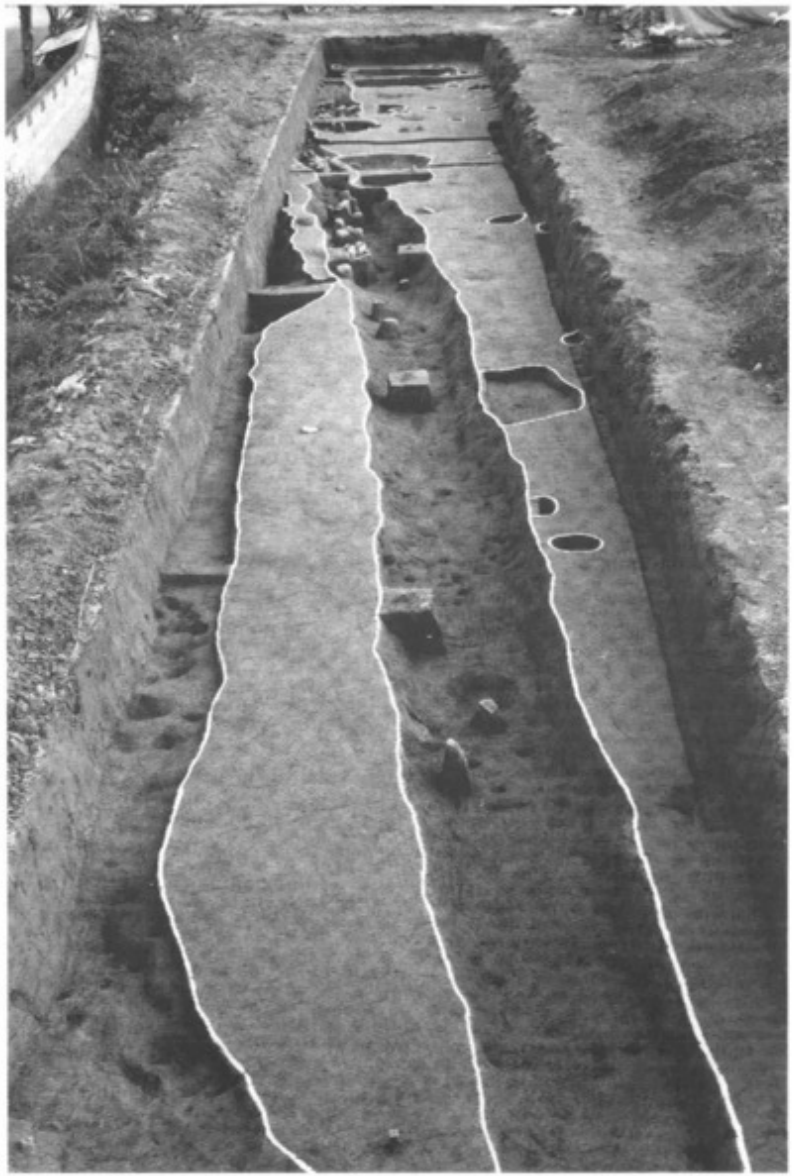
(11) (2)に同じ。

(12) この点に関しては，１～17号方形周溝墓の調査者である勝浦康守氏の指摘するところでもあり，名東遺跡における方形周溝墓の一般的形態として捉えることが可能かもしれない。

(13) (1)に同じ。

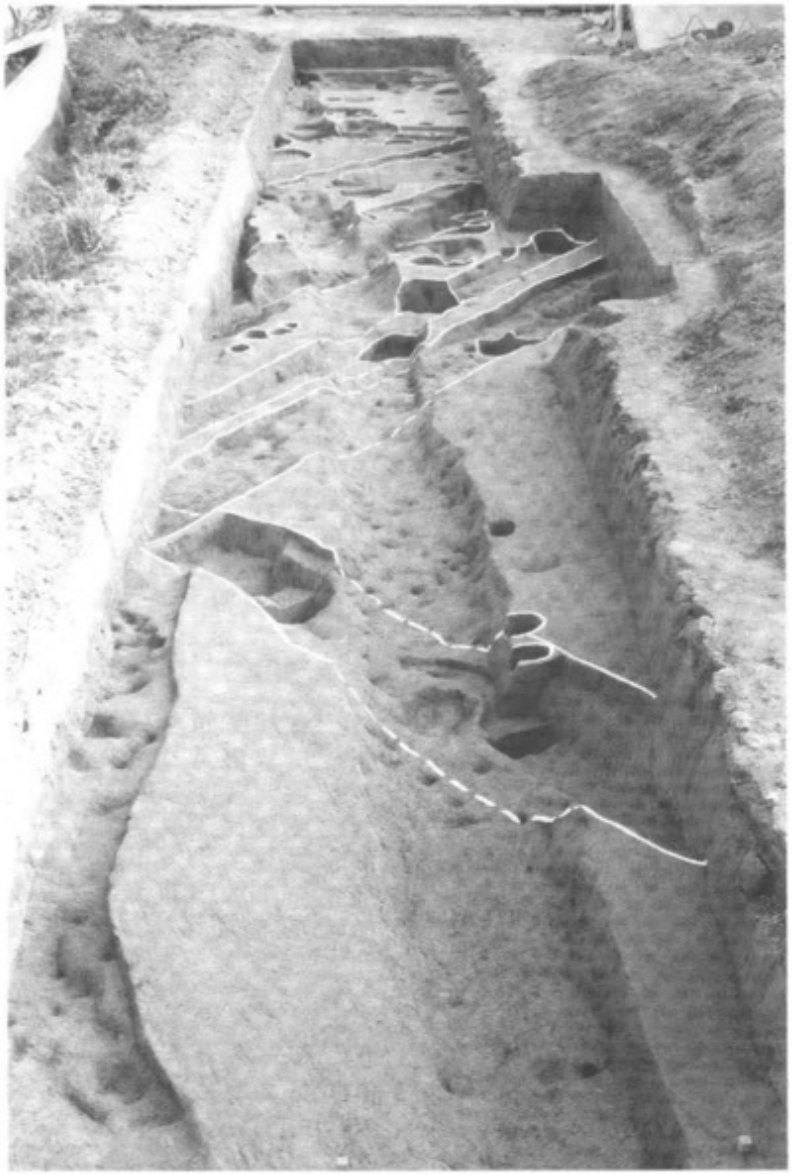
(14) 徳島市市教育委員会『第７回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る－最近の発掘調査－』1986年所収「鮎喰南遺跡」

(15) 壺（57,58）などの類例は，黒谷川郡頭遺跡の溝15，溝１などに認められ，黒谷川Ⅰ式（第Ⅴ様式後半）期に位置づけられる。徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』1986年，同『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』1987年。



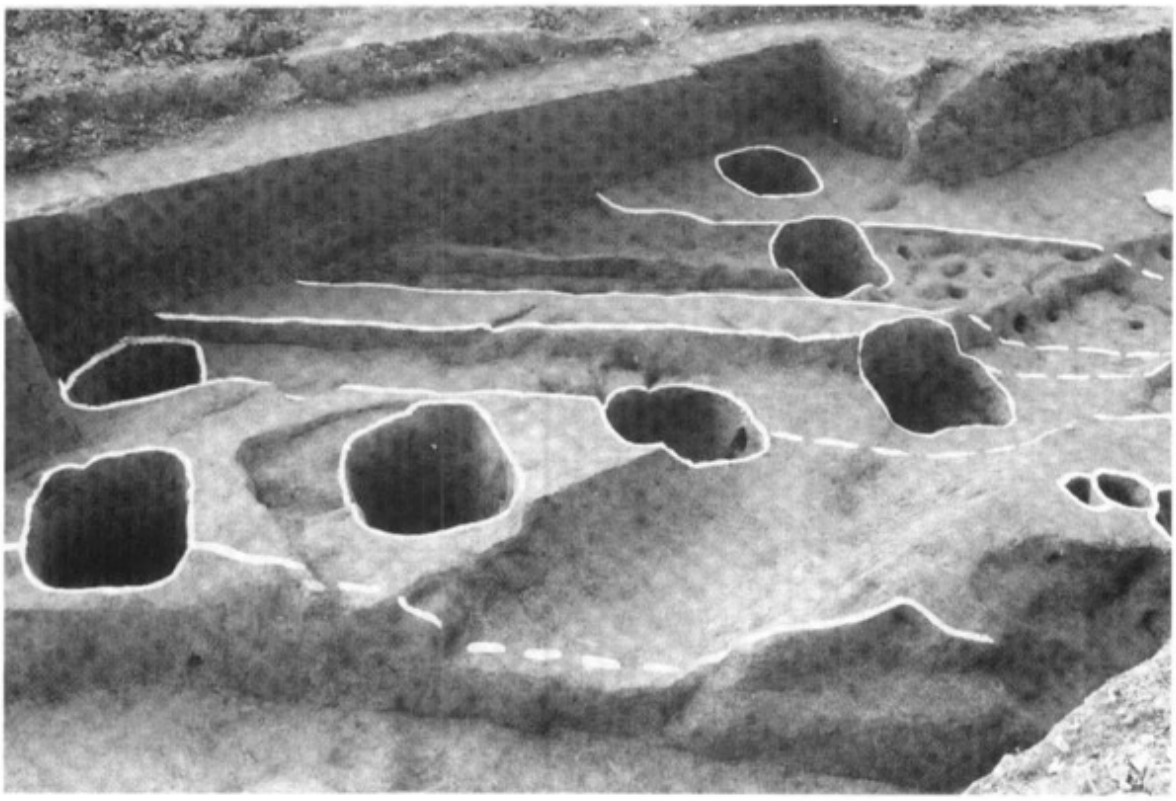
図版1

西区第1遺構面　遺構検出状況　北より

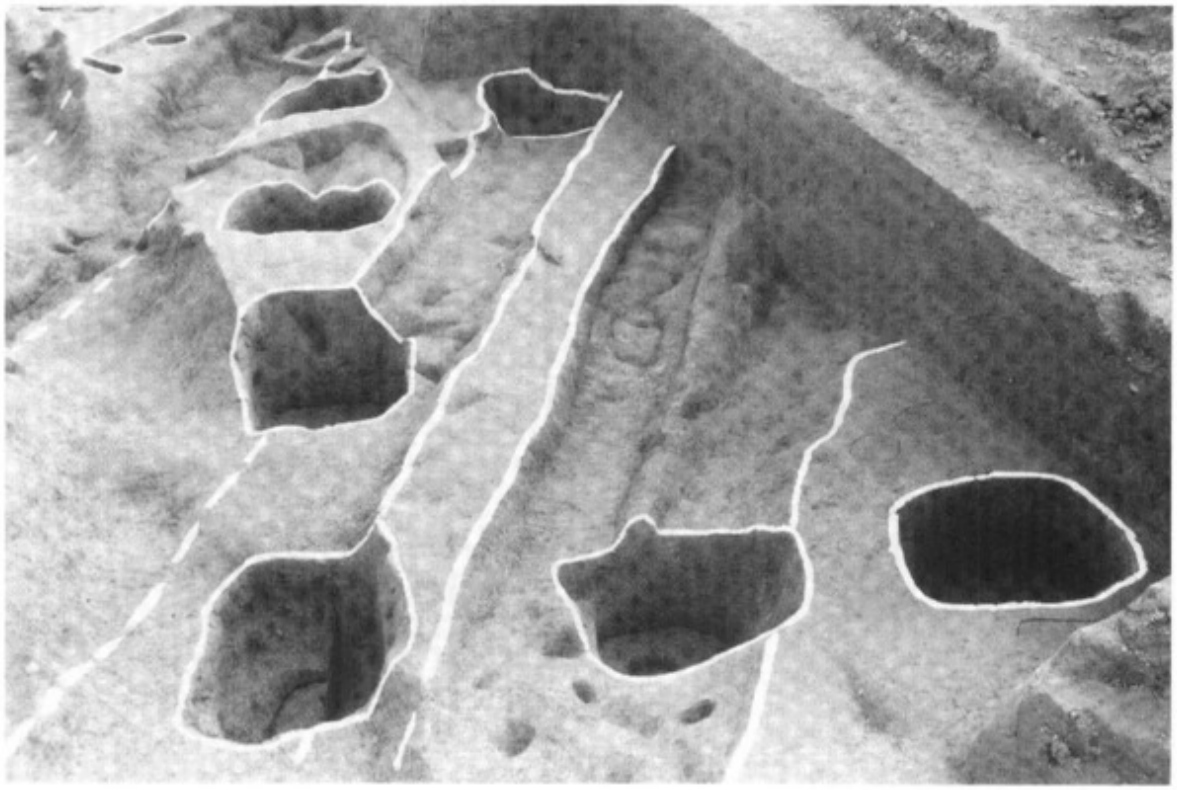


同　第2遺構面　遺構検出状況　北より

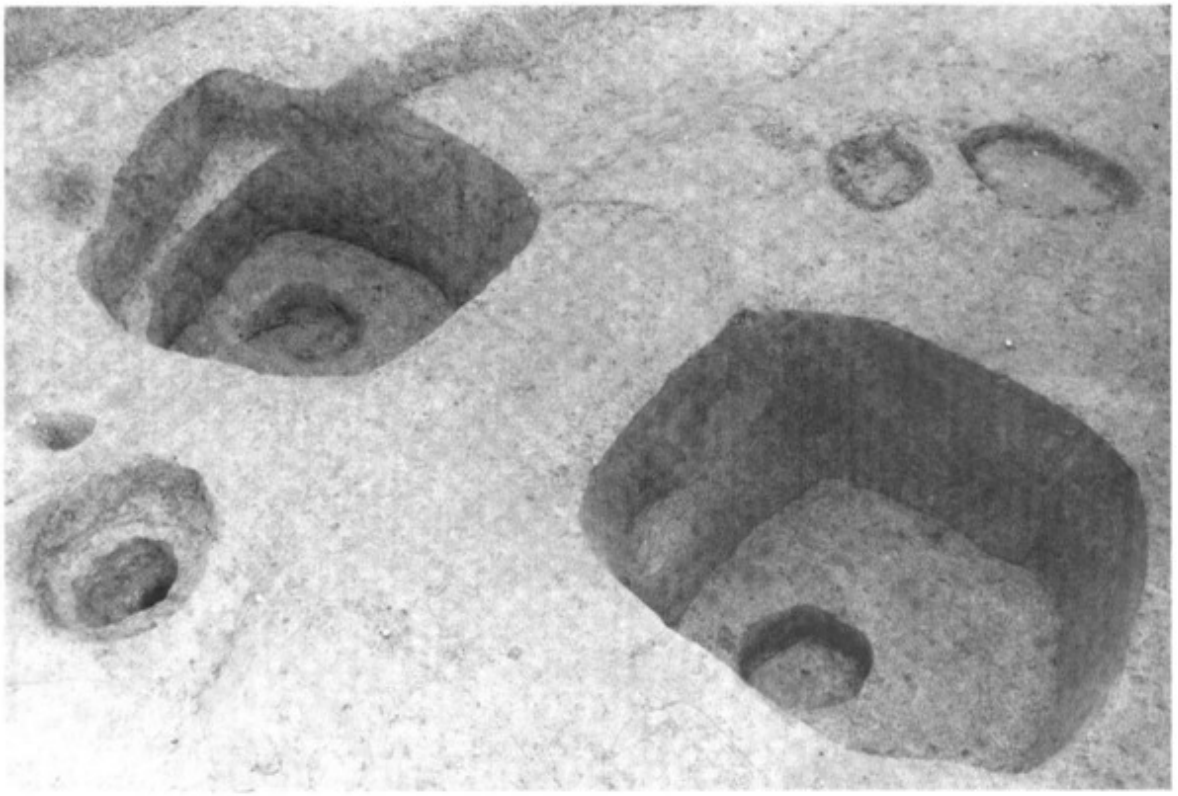
図版2



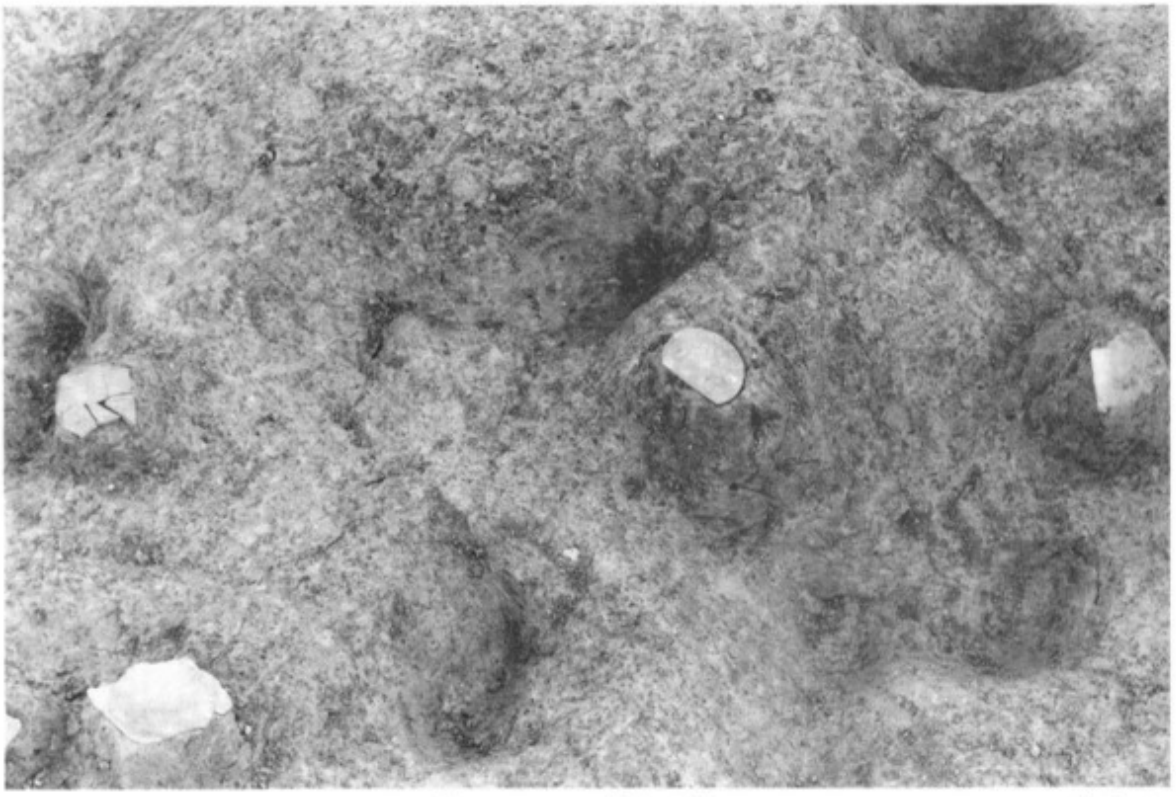
掘立柱建物SB01検出状況　　南東より



同　　上　　北東より

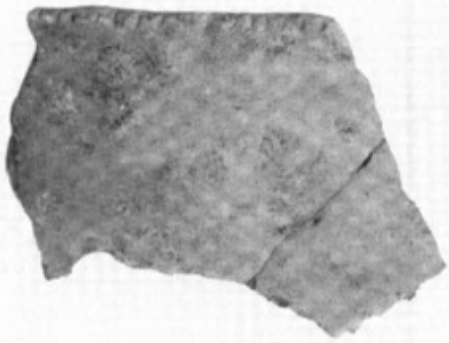


掘立柱建物SB01柱穴完掘状況（部分）　北より

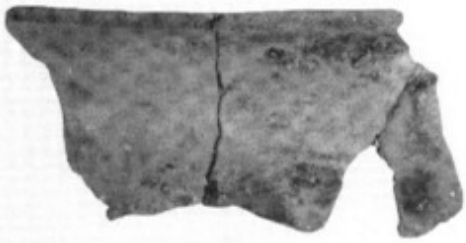


溝SD06,07石帯出土状況　北より

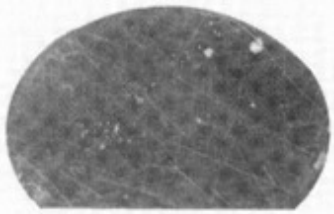
図版4

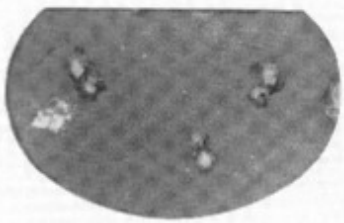


2



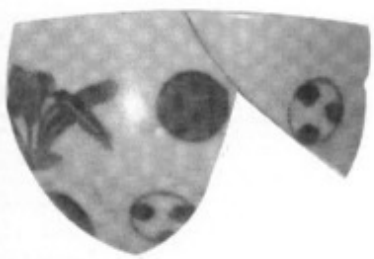
4





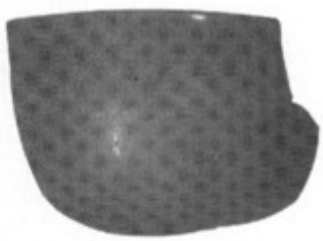
1

66

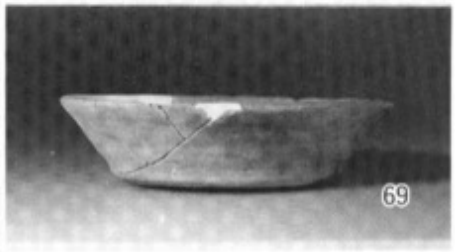


67

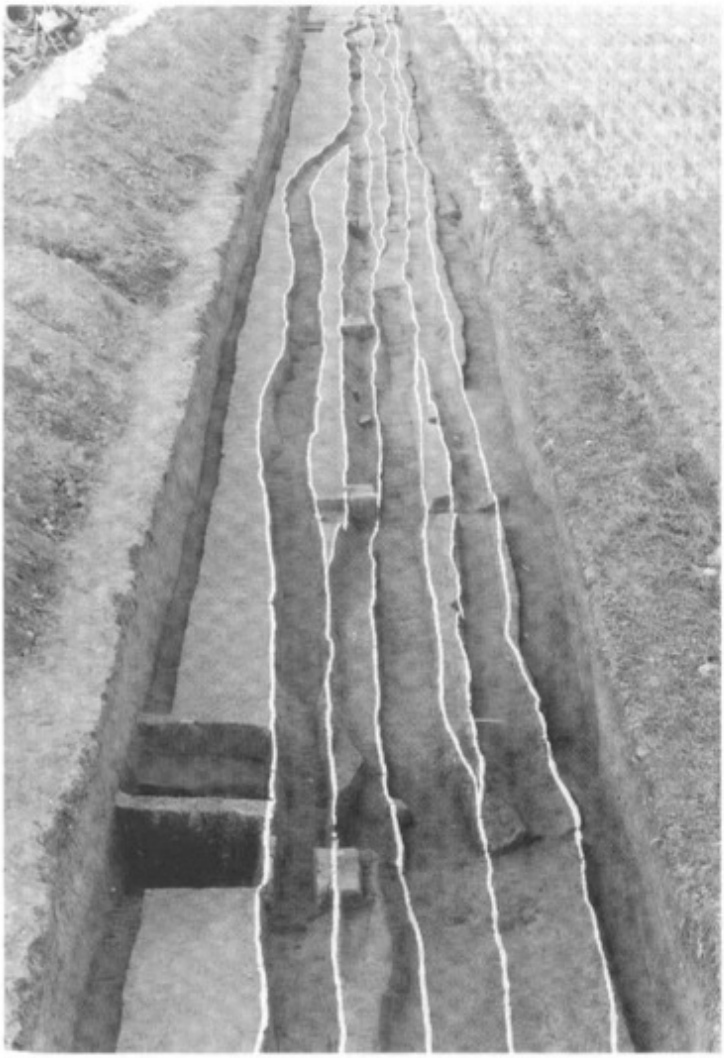
63 64 65



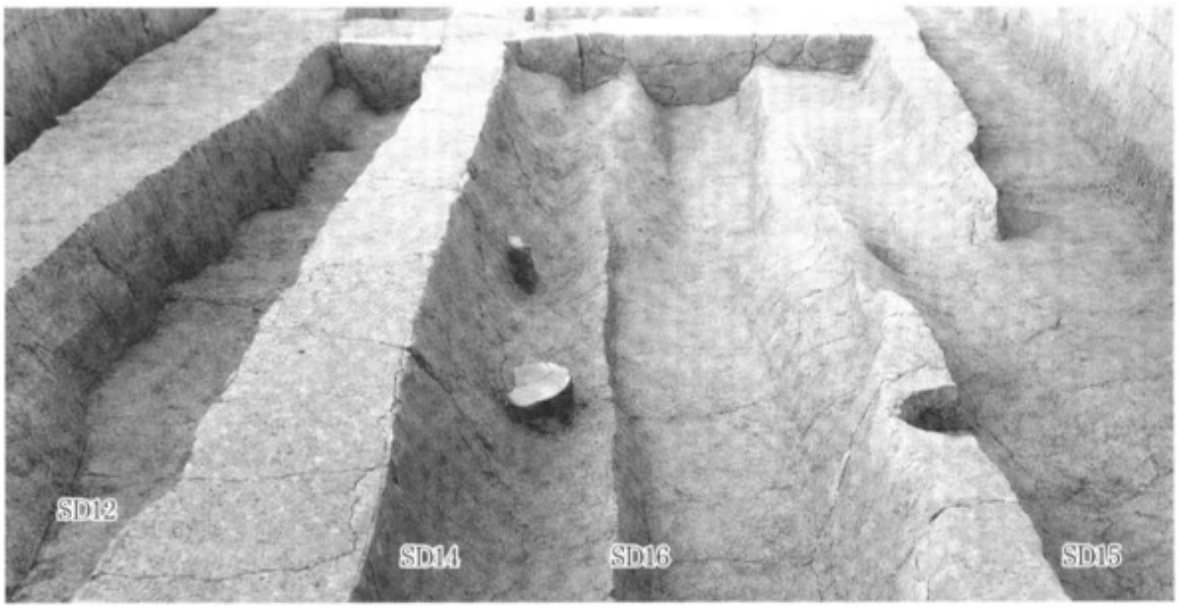
68



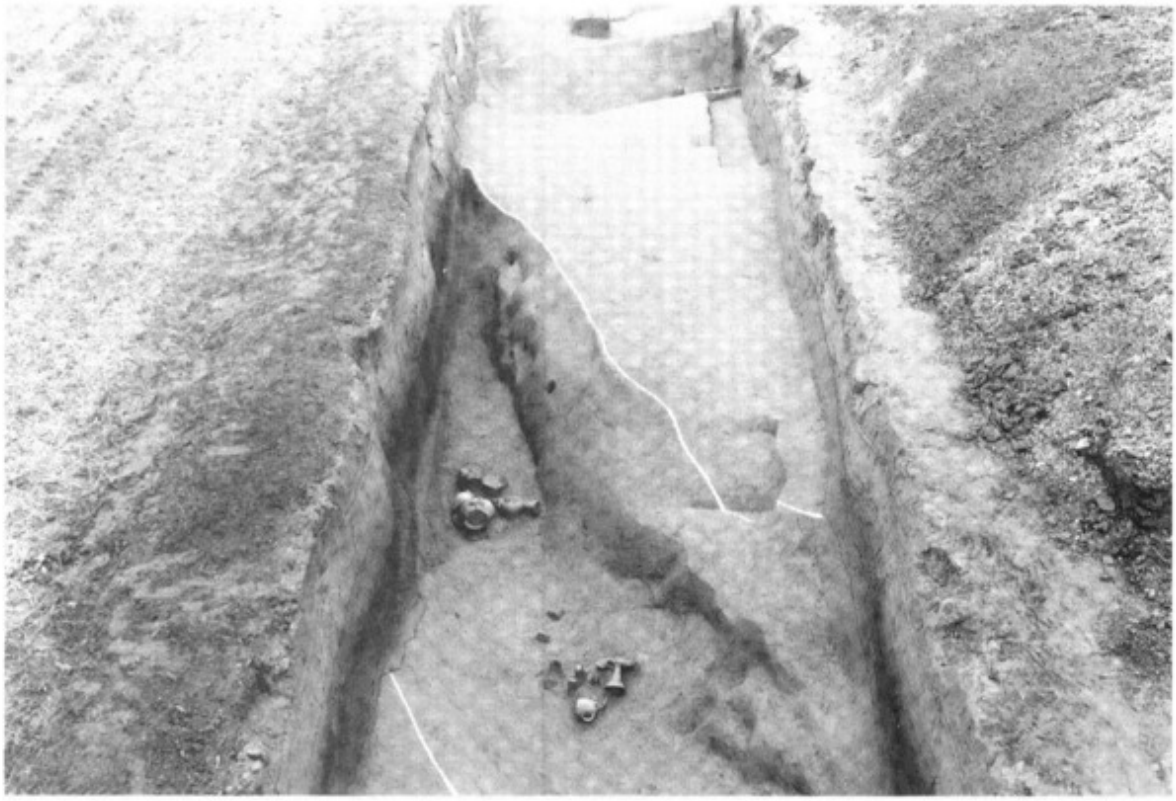
SD14出土土師器杯



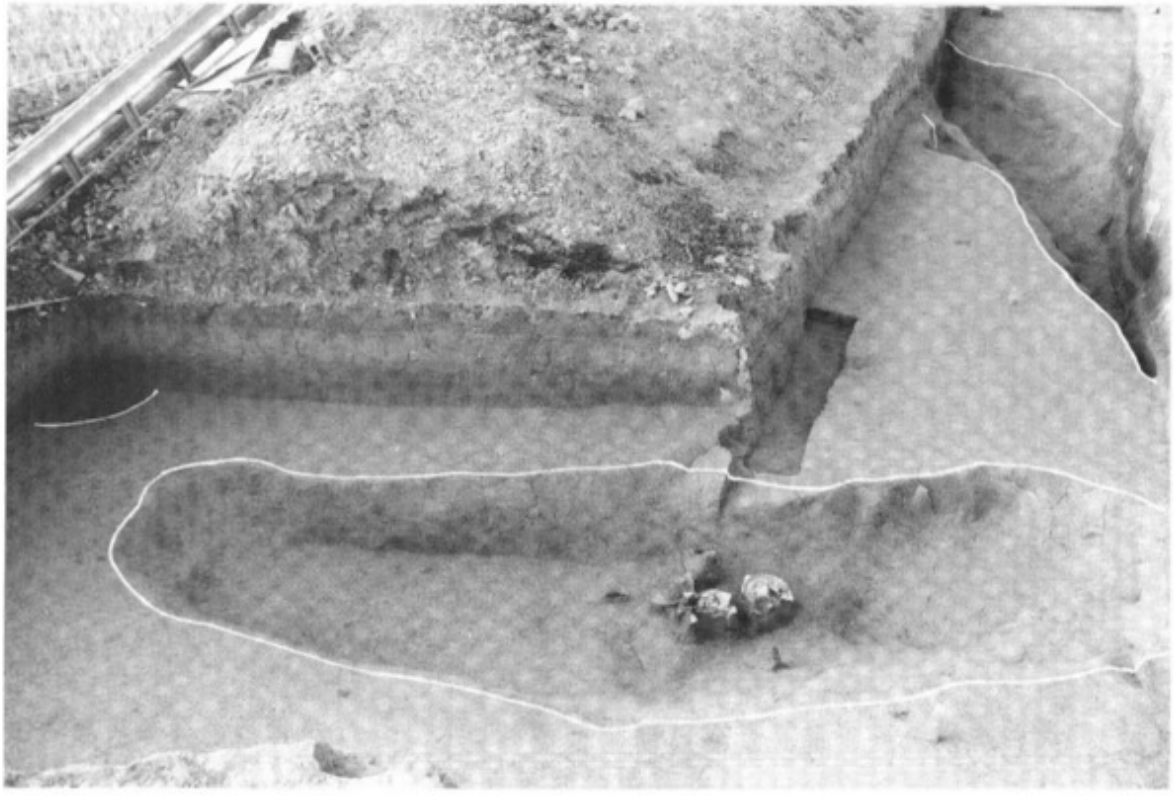
東区第1遺構面溝検出状況
南より



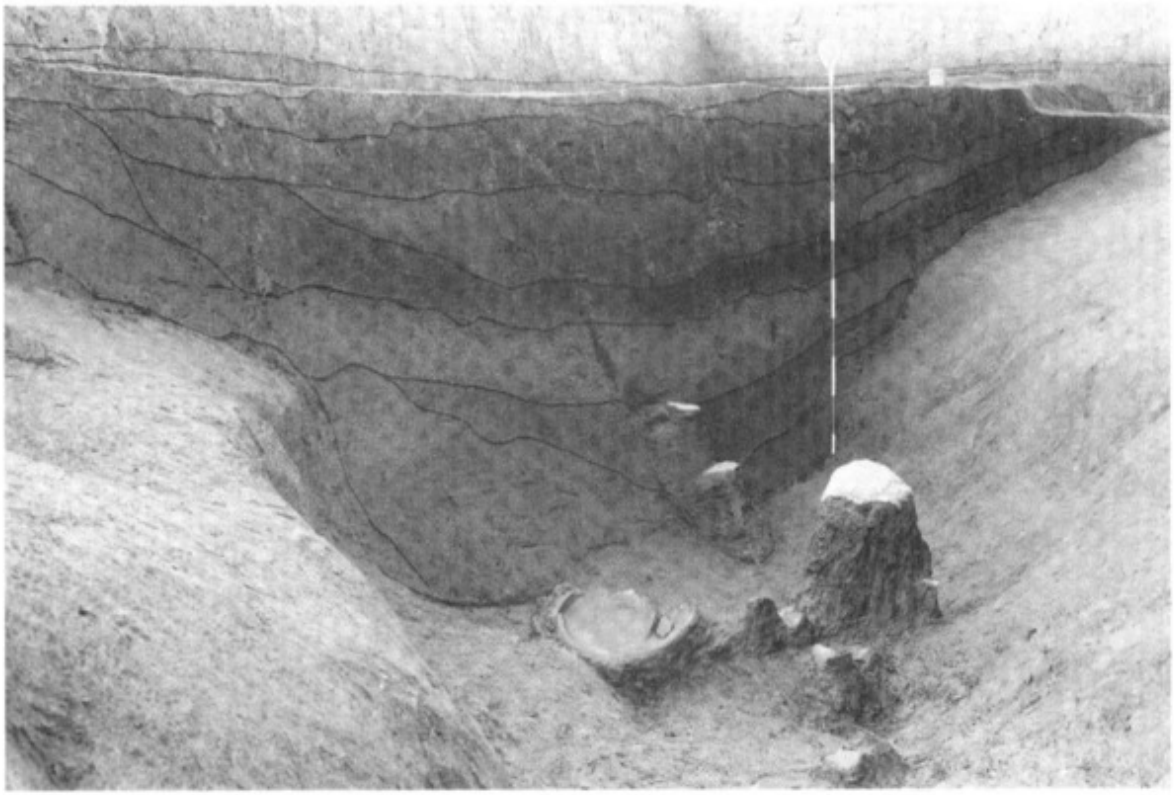
図版6



方形周溝墓SL18検出状況　　北より

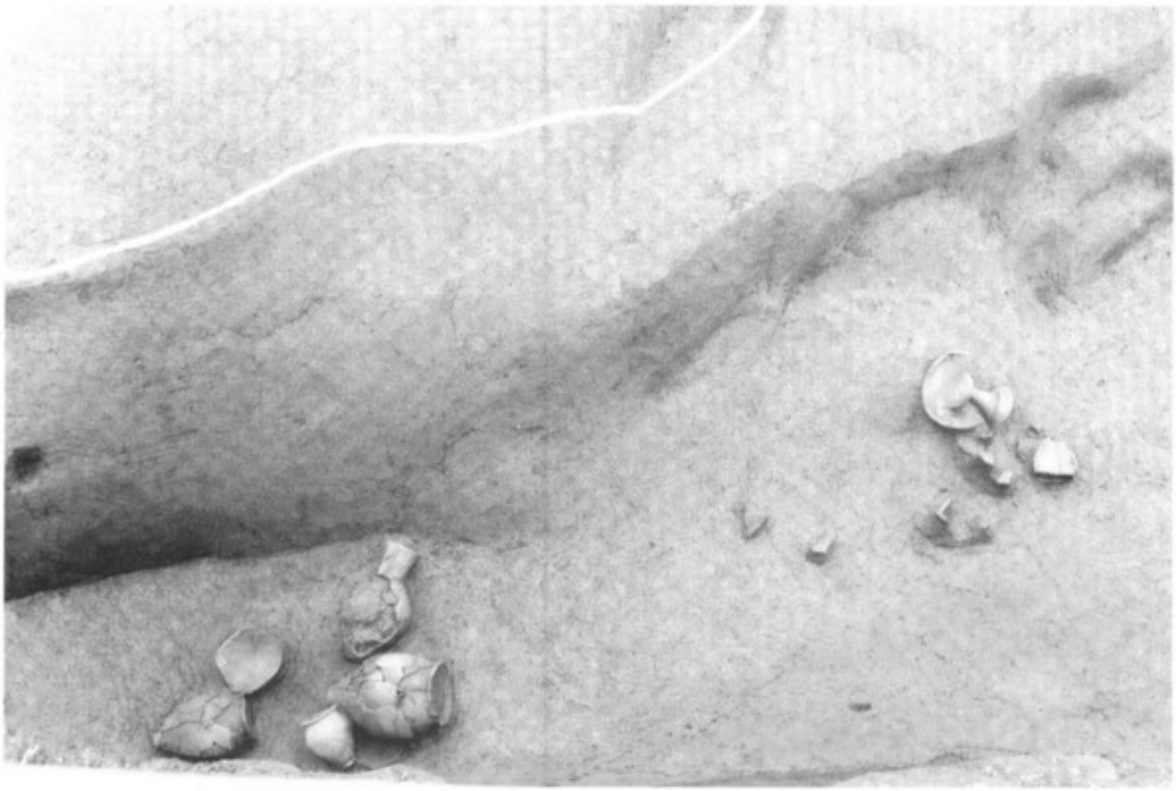


同　　上　　南より



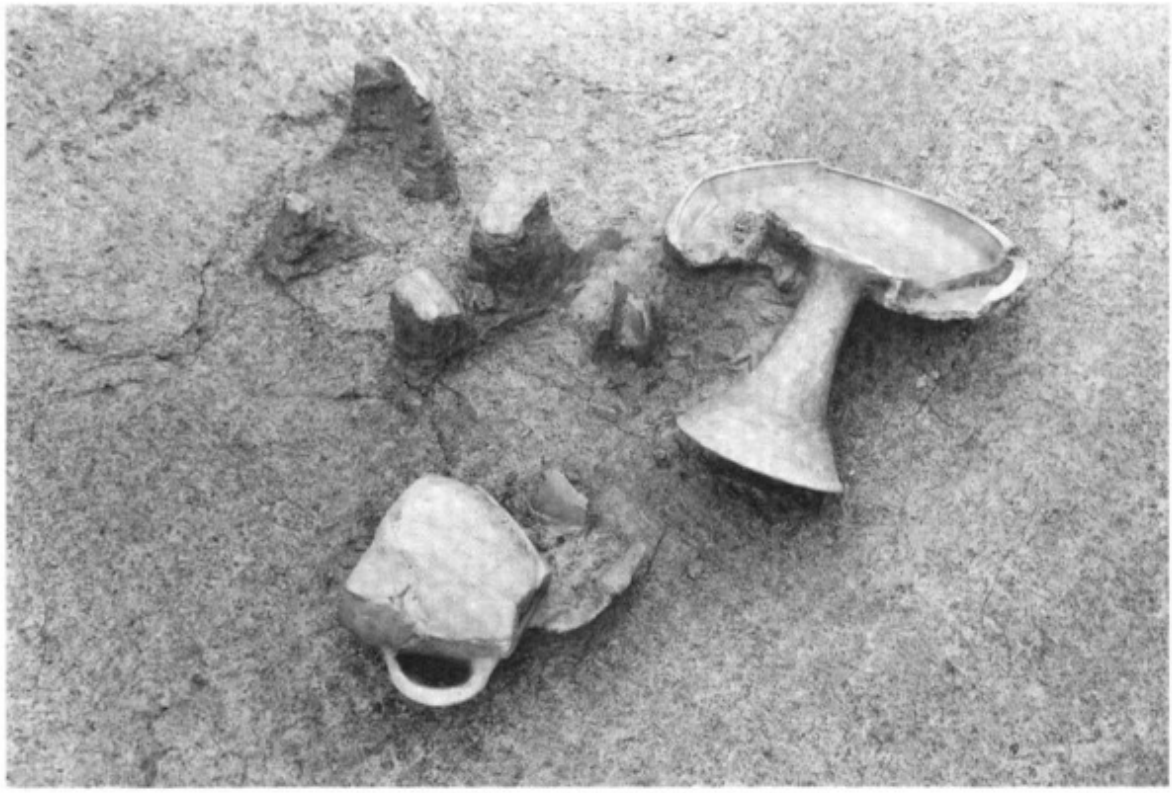
方形周溝墓SL18北東溝埋土堆積状況　　南東より

同　　遺物出土状況　　北西より



方形周溝墓SL18北東溝遺物出土状況　　東より

同　　上　　西より



方形周溝墓SL18北東溝遺物出土状況　　北より

同　南東溝遺物出土状況　　北より

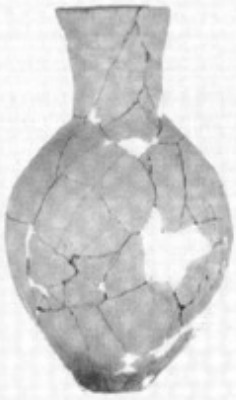
図版10

6

7

8

9



10

13

方形周溝墓SL18溝出土遺物

11

12

43

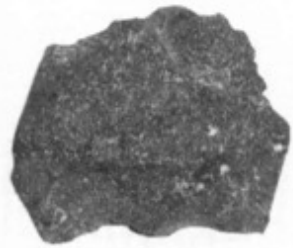
42

44

45

46

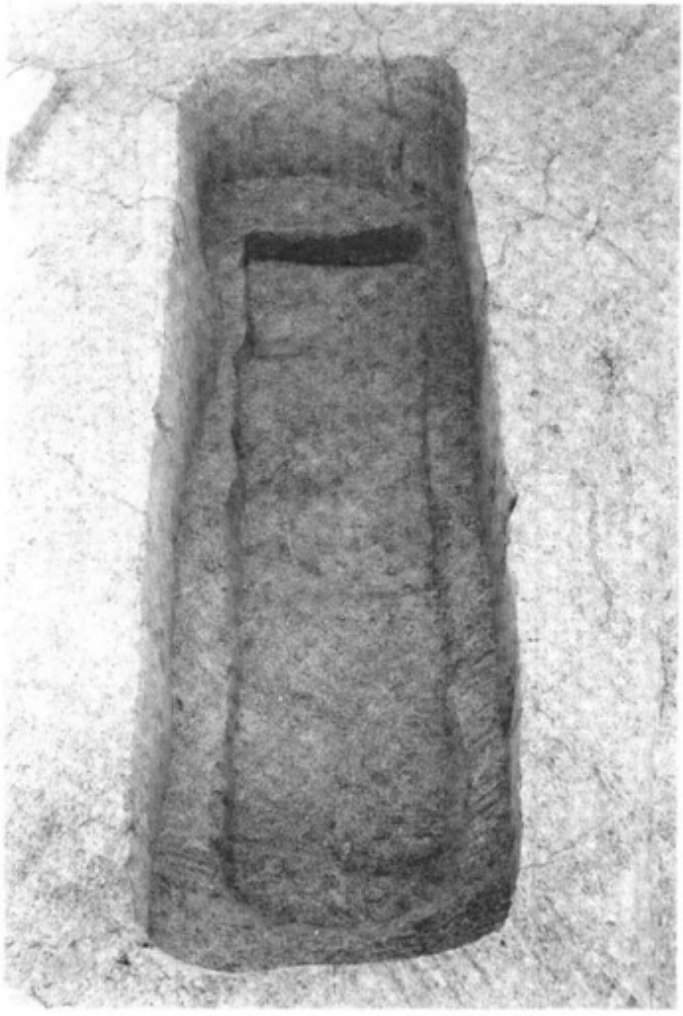
69



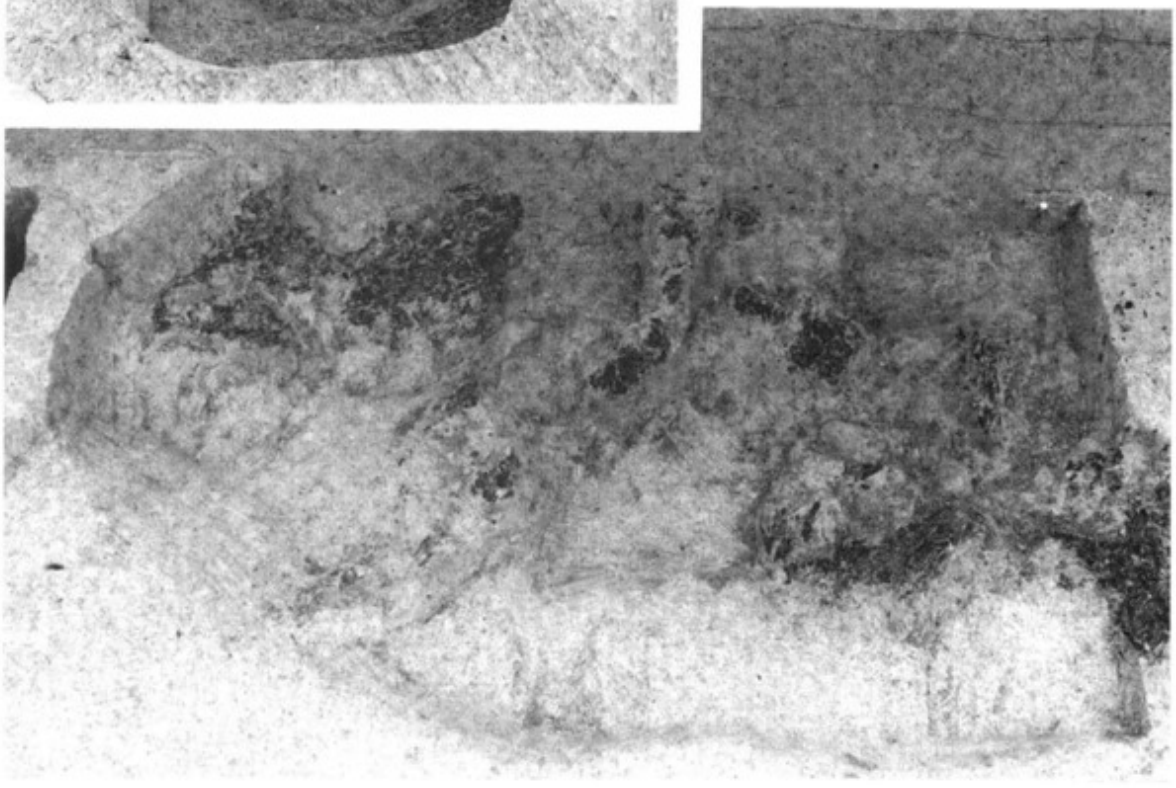
70

方形周溝墓SL18溝出土遺物

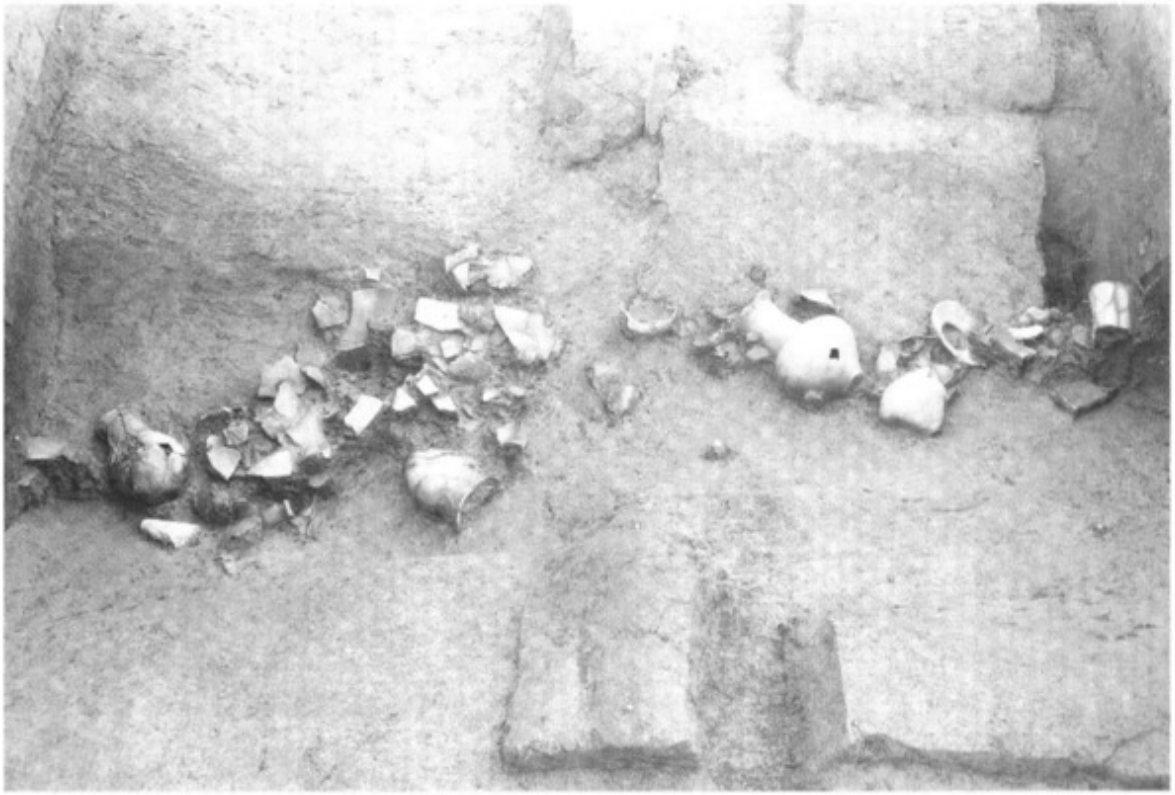
図版12



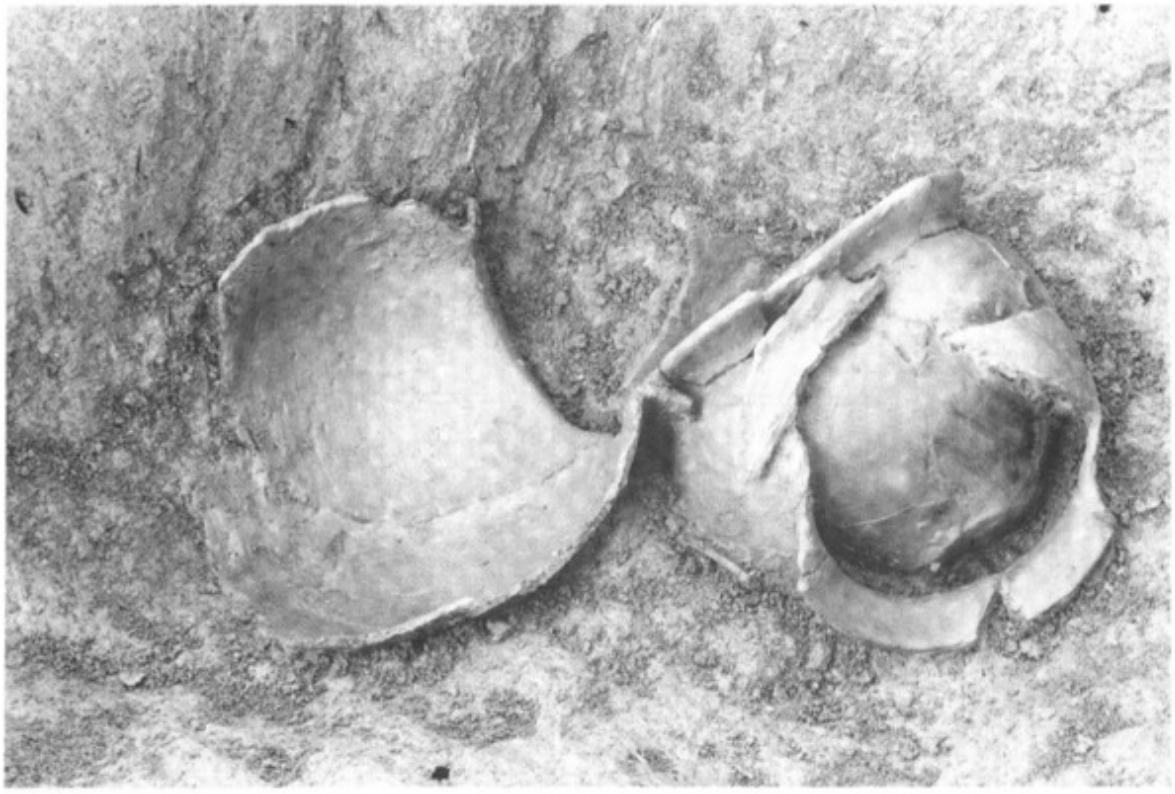
木棺墓SJ01検出状況　東より



焼土壙SK12検出状況（部分）　東より



溝SD101遺物出土状態　　北より



同　　上（部分）　　南より

図版14

48

49

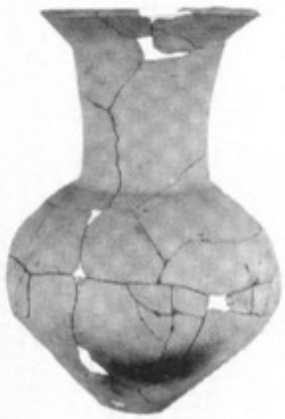
50

51

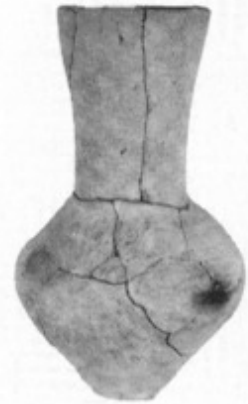
52

56

溝SD101出土遺物



58



59

57

60

61

62

溝SD101出土遺物

Ⅲ．名東遺跡発掘調査概要

――マンション建設工事に伴う発掘調査――

調査場所：徳島市名東町２丁目286番地

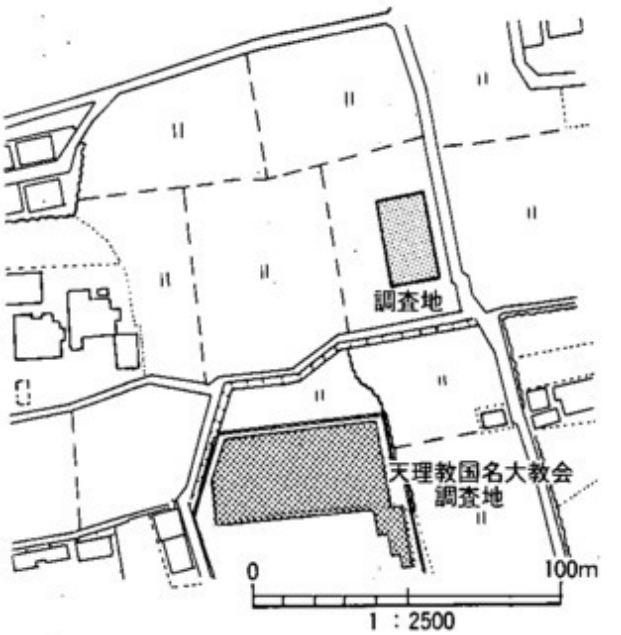
調査期間：平成４年５月７日～７月２日

調査面積：約500㎡

１．調査に至る経緯と経過（第１図，図版１）

名東遺跡は縄文時代晩期から江戸時代に至る県内屈指の集落遺跡として周知されている。今回の調査地は，昭和62年に銅鐸が発見された調査地[1]（天理教国名大教会地区）から北東へ約70mに位置する。

今回の調査は，マンション建設工事に伴うものであり，試掘調査の実施後当該地に遺構，遺物の検出が確認されたため，本調査を実施することで原因者との協議において合意に達した。



第１図　調査地概略図

昭和62年の調査では，縄文時代晩期から鎌倉・室町時代にいたる遺構，遺物が検出されており，調査地が近接することから，今回の調査においても，当初，中世集落跡，ならびに，弥生時代の墓域として方形周溝墓の検出が予測された。遺構検出面の標高は，昭和62年の調査での遺構検出レベルよりさらに高位にあたり，調査地における基本層序が，現代水田耕土層直下に黄色シルト層（遺構検出面）の堆積を示すことから，中世遺構面および弥生時代の生活面は削平を受けているものと考えられる。

調査では，現代水田耕土層を重機により除去し，以後，遺構，遺物の検出に努め，弥生時代の集落跡の一角および平安時代の遺構，遺物を確認している。なお，調査成果の一部は，平成４年度文化財調査報告会において，公開報告[2]を実施している。

2．調査概要

今回の調査では，弥生時代の集落跡の一角を検出するとともに，中世の屋敷墓としての土壙墓およびピットを検出している。以下，主な遺構・遺物について概略する。

竪穴住居跡

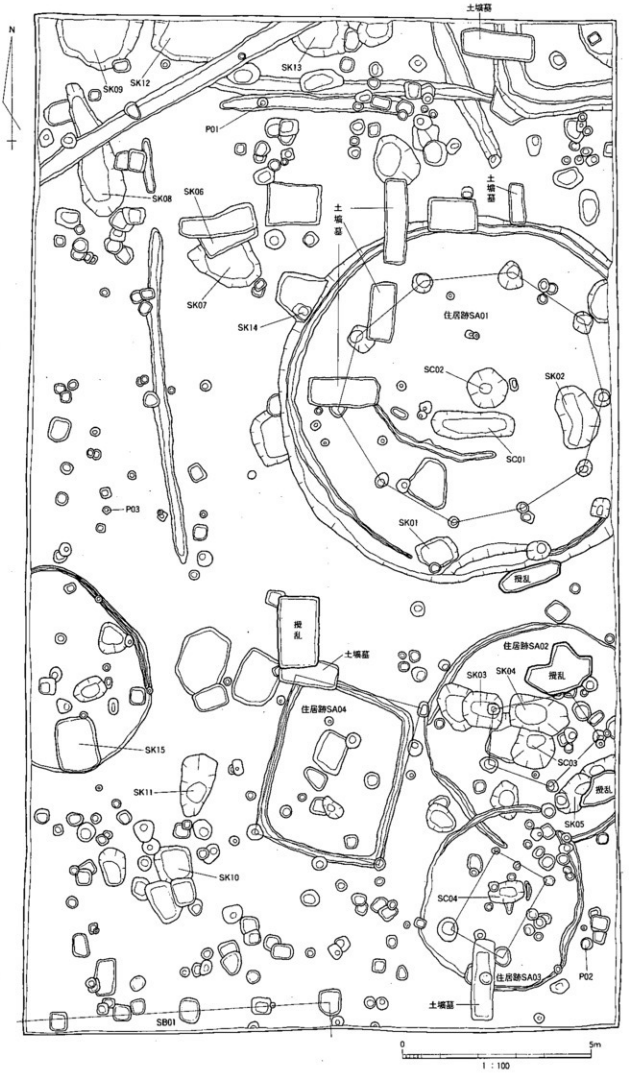
(1) 竪穴住居跡SA01（第2～7図，図版2～4，7，8，10）

東側が一部調査地外へ広がるが，平面形が一部に張出部を持つ円形を呈し，径10mを測る。埋土は，黒色シルト（上層）と，にぶい黄橙色シルト（下層）の2層に大別できる。壁高は50cmを測り，幅15～30cm，深さ5cmの壁溝が部分的に断絶しながら巡る。床中央には，長辺2.1m，短辺60cmの平面形が長円形を呈し，深さ20cmを測る土壙と径1.1mの平面形が円形を呈し，深さ50cmを測る土壙が隣接して位置する。いずれも，埋土に炭化層・焼土層が見られることから，炉跡と考えられる。主柱穴は，円形状に2～2.2mの間隔で10個配される。柱穴は平面形が円形を呈し，径20～40cm，深さ60～70cmを測る。柱穴SP03以外の柱穴底部には，拳大の礫を数個組んだもの（SP05）あるいは，板状礫を敷いたもの（SP01，02，04，06～10）が見られ，根石として使用されている。

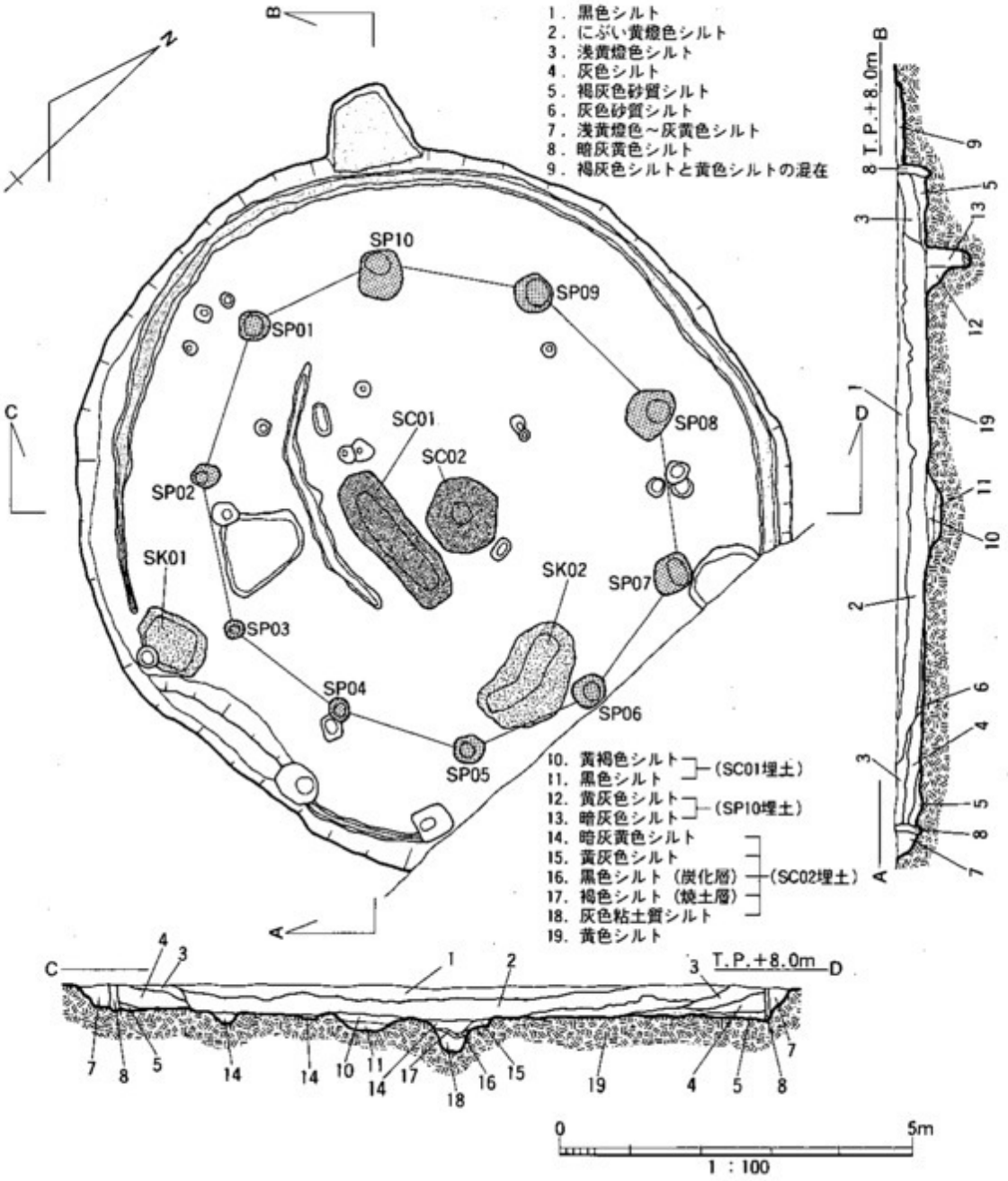
埋土上層より広口壺（1，2，3），短頸壺（11），甕（10），高坏（12），鉢（13），底部片（33～41），埋土下層より広口壺（4～7），細頸壺（14），短頸壺（15），無頸壺（17），甕（8，9，18～21），鉢（24，25），高坏（16，22，23），土錘（29），未製品紡錘車（30），勾玉（31），石鏃（47～55），石錐（56，57），底部片（42～46）が出土している。また，周溝部より高坏（28），勾玉（32），炉跡SC02より広口壺（26），土壙SK01より高坏（27）が出土している。

広口壺1は，直立する頸部から短く外反する口縁部を持ち，口縁部端面は無文である。広口壺3は緩やかに外反する頸部から大きく屈曲する口縁部を持ち，口縁部端面には擬凹線が見られ，口縁部端面にはヘラによる沈線文が施される。短頸壺11は緩やかに外反する頸部から口縁部へ至り，口縁端部は面取る。高坏12は皿形の坏部を持ち，体部から直立する口縁部の端部を内側へ肥厚させ，体部と口縁部の屈曲部に1条の凹線文が施される。

広口壺4，6，7は斜め上方に立ち上がる頸部から短く外反する口縁部に至り，口縁部端面に擬凹線を持つものと無文のものがある。細頸壺14は斜め上方に直線的に立ち上がる口頸部に凹線文が施される。また，無頸壺17も体部に数条の凹線文を持つ。甕8，9は体部から短く外反する口縁部を持ち，器壁は厚手である。甕18は口縁端部を上方に摘み上げ，口縁部端面には擬凹線を持つ。甕19～21は頸部の屈曲がシャープであり，20は口縁端部を斜め上下に拡張させ，19．20は口縁端部を斜め上方に拡張させる。高坏22，23はいずれも皿形の坏部を呈し，体部から直立する口縁部との屈曲部に凹線文が施される。

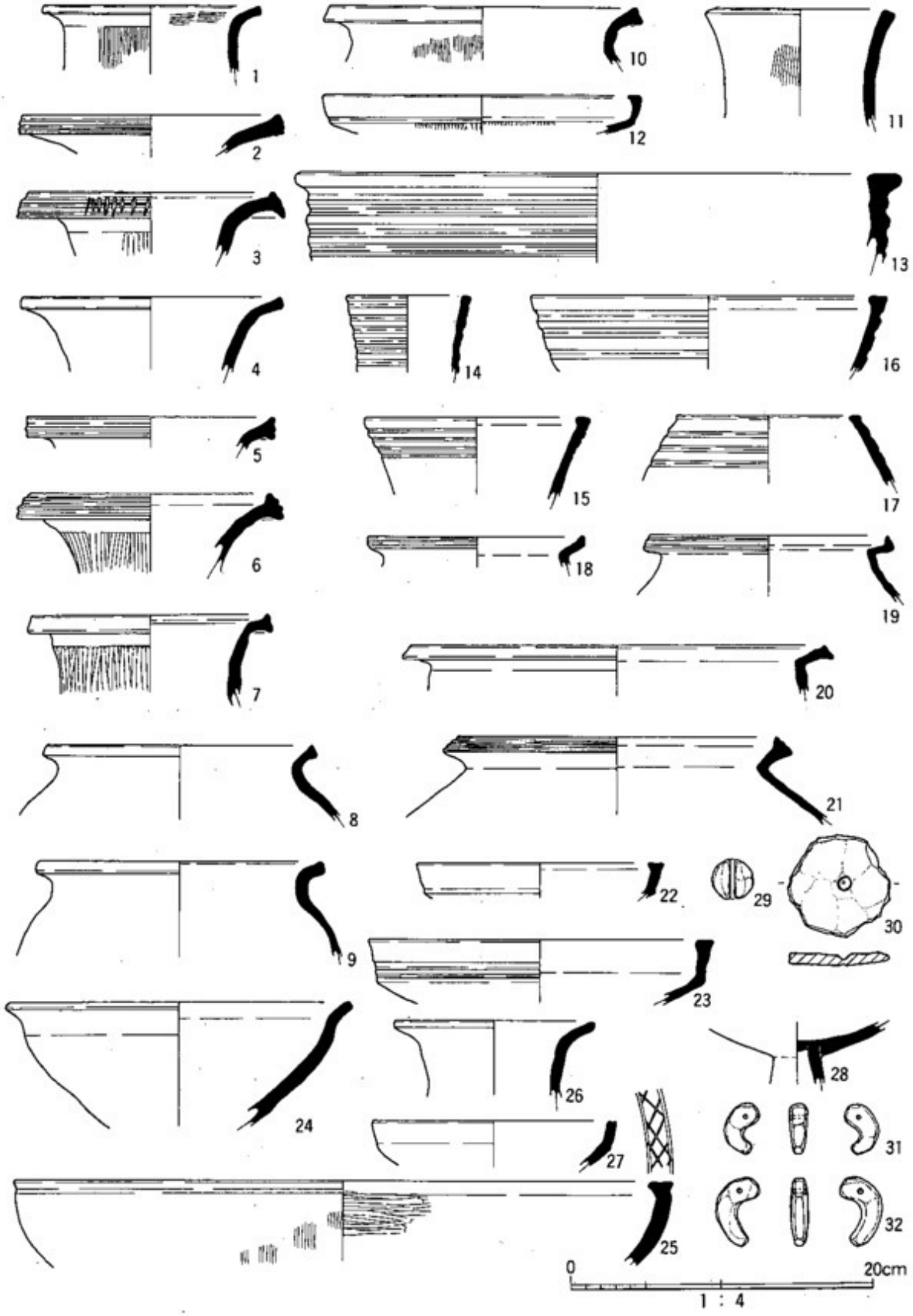

N
土壙墓
SK09
SK12
SK13
P01
SK08
SK06
SK07
SK14
住居跡SA01
SC02
SK02
SC01
P03
SK01
撹乱
撹乱
土壙墓
住居跡SA02
SK03
SK04
撹乱
住居跡SA04
SK15
SC03
撹乱
SK11
SK05
SK10
SC04
住居跡SA03
P02
土壙墓
SB01
0
5m
1：100

第２図　検出遺構図

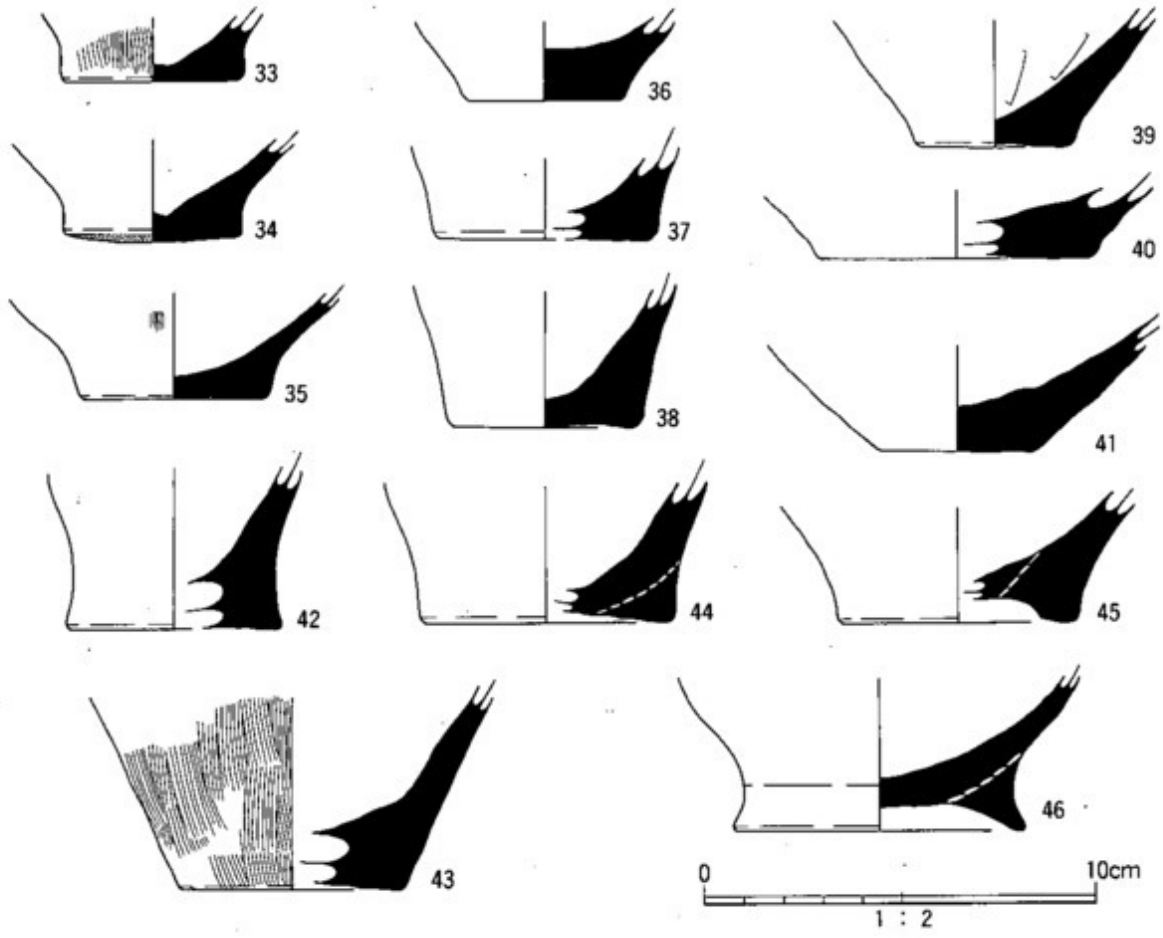


第3図　竪穴住居跡SA01

広口壺26は緩やかに外反する頸部から大きく屈曲する口縁部を持つ。また，高坏27は体部と口縁部との屈曲部に擬凹線文を持ち，口縁部はやや外反気味に開く。高坏28の坏部と脚部の接合法は差し込み式である。未製品紡錘車30は，土器片を利用したものであり，両面からの穿孔の痕跡がみられる。勾玉31，32はともに蛇紋岩製であり，31は白色，32は緑色を呈する。産地は不明であるが，眉山山系にも原産することが知られる。



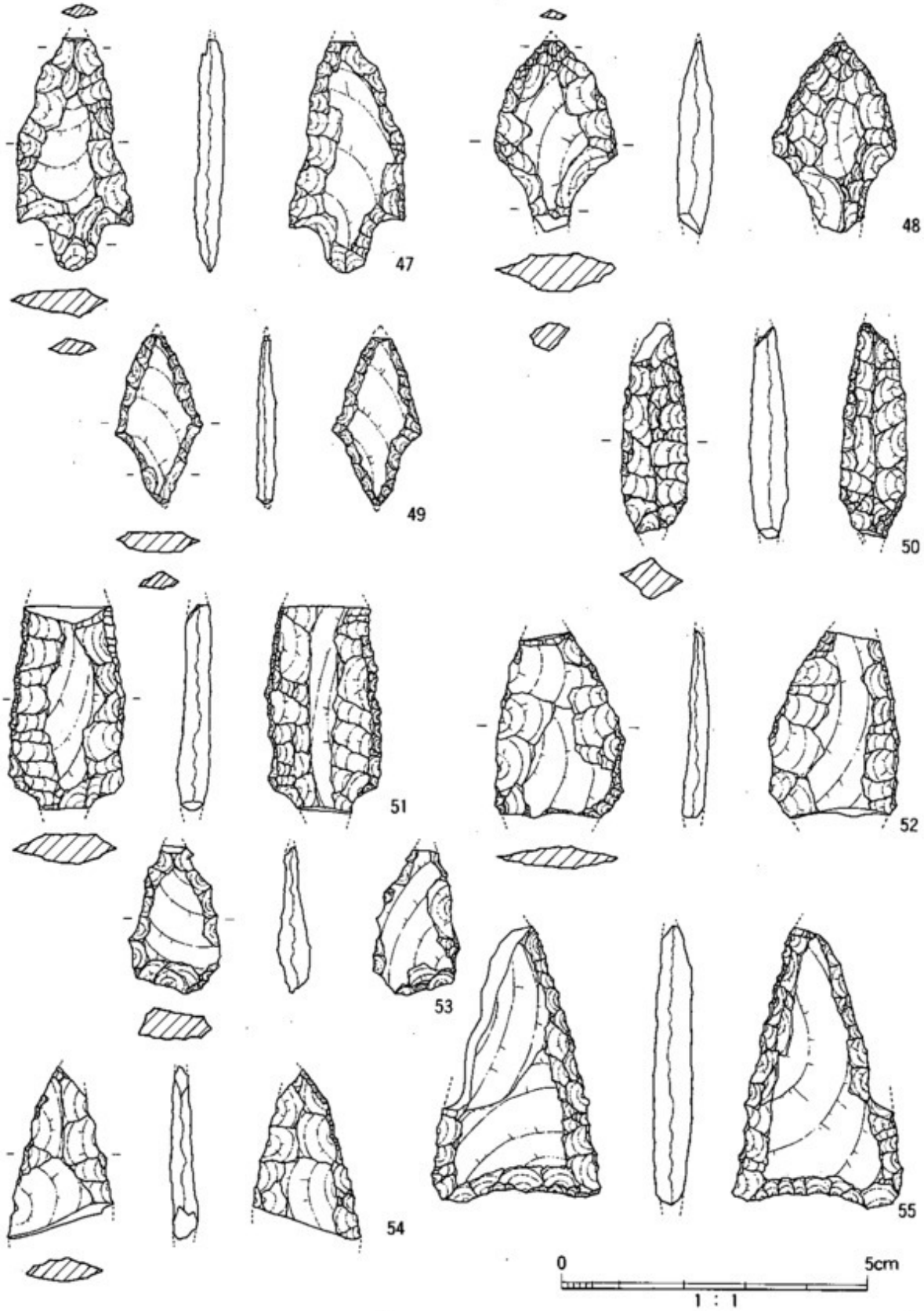
第４図　竪穴住居跡SA01出土遺物



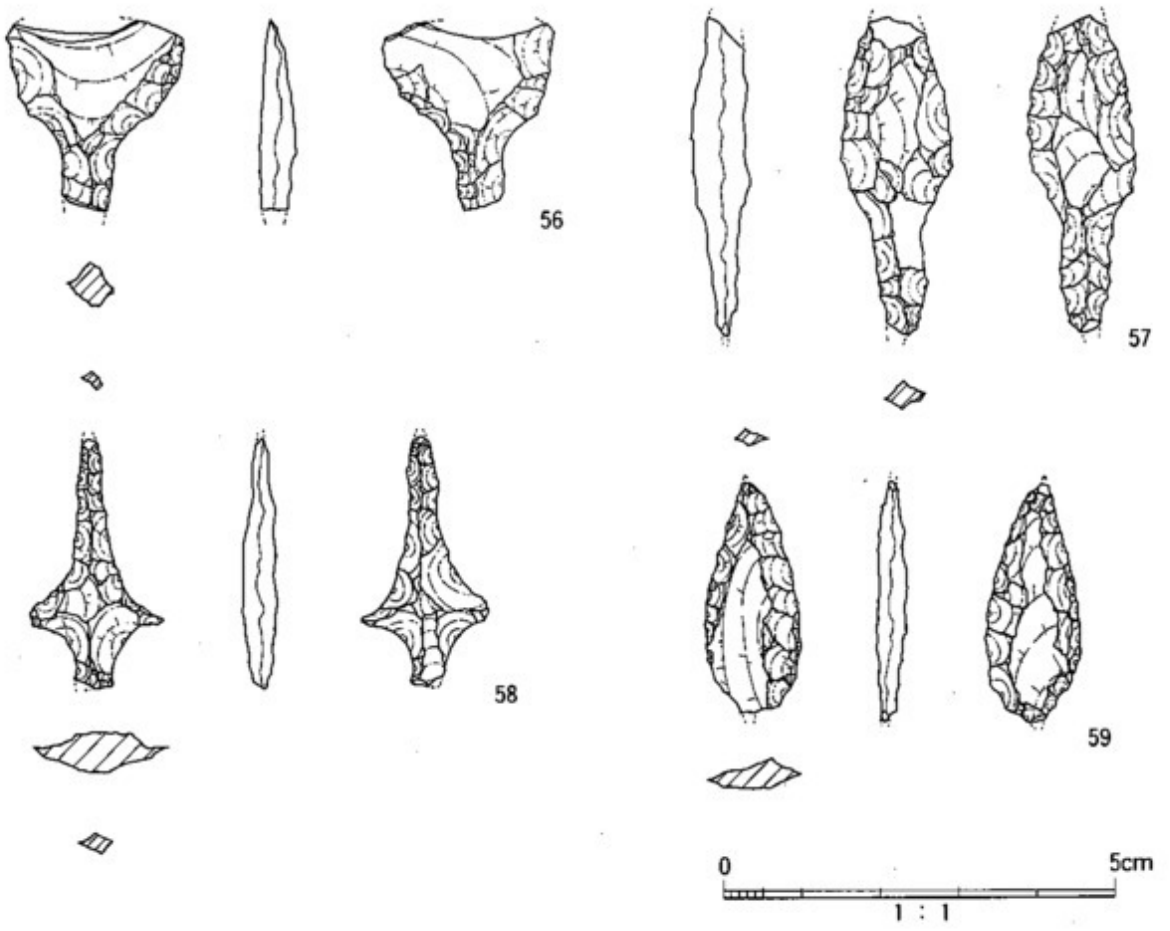
第５図　竪穴住居跡SA01出土遺物

底部片33～35は，底部外面にハケ調整が施されており，形態的に丸味を帯びている。44は丸底底部の外縁部に輪状の粘土紐を接合させ平底化させたものである。また，45は，輪状の底部形成後，中央部に粘土を充填させている。

石鏃，石錐はいずれもサヌカイト製であり，全てが，先端部ないしは基部が欠損している。石鏃の製作技術においては，厚形浅形片面調整が施されるものも見られるが，薄形浅形両面細部調整が主体である。そのため，主要剝離面および先行剝離面を器面の1/3～2/3程度に残存させるものが顕著に見られる。断面厚が薄手の剝片を素材とするため，細部調整において調整が施されず，整形により器体を整える技法が採られ，剝片剝離工程段階において，素材の形状を意識した剝片剝離が行われたものであろうか。あるいは，単に形状の整った剝片を偶然的に選定使用した結果であろうか。この技法は，すでに，縄文時代晩期から弥生時代前期の石鏃製作技術においても見られるものである。[3]



第6図　竪穴住居跡SA01出土遺物



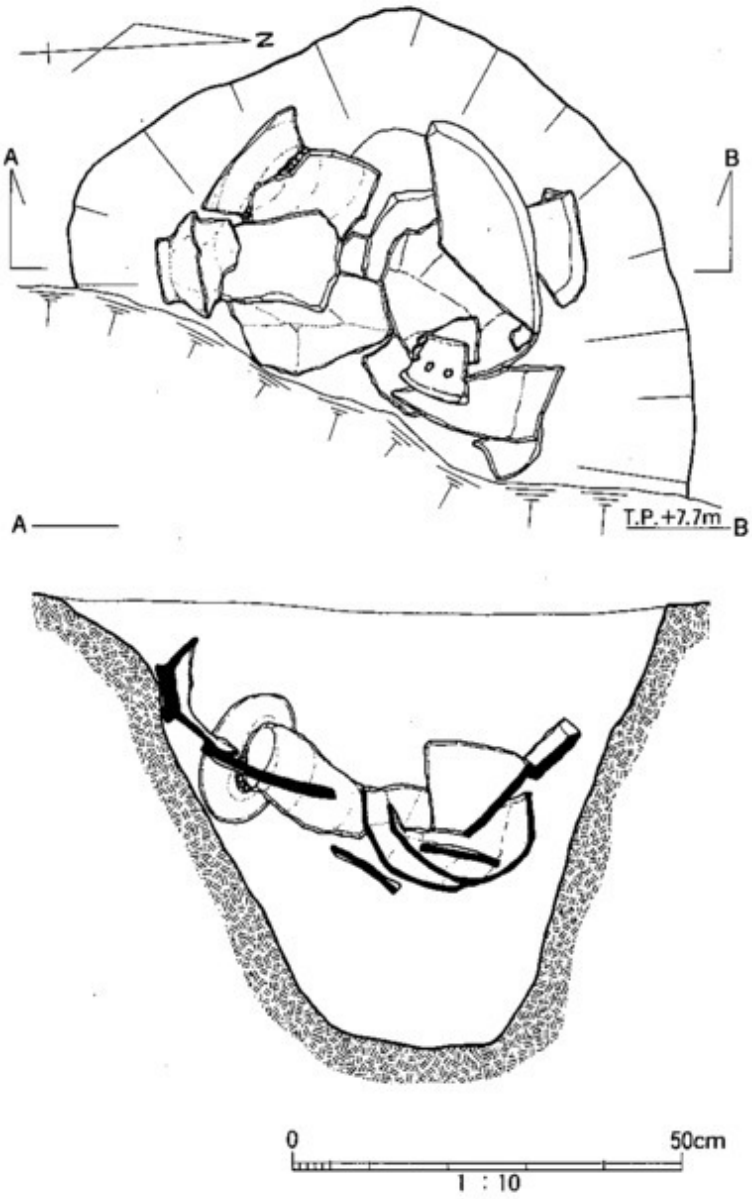
第７図　竪穴住居跡SA01，SA03出土遺物

(2)　竪穴住居跡SA02（第２，８～10図，図版５，９，10）

東側が一部調査地外へ広がり，平面形が不整円形を呈し，径６ｍを測る。埋土は，にぶい黄橙色シルトである。壁高は20cmであり，幅10cm，深さ５cmの壁溝が部分的に断絶しながら巡る。床中央部に，長径70cm，短辺50cmの平面形が長円形を呈する土壙がある。埋土に焼土層の堆積が見られることから，炉跡（SC03）と考えられる。主柱穴はこの炉跡（SC03）を中心に1.5～2.0mの間隔で五角形状に配置されるものと考えられる。

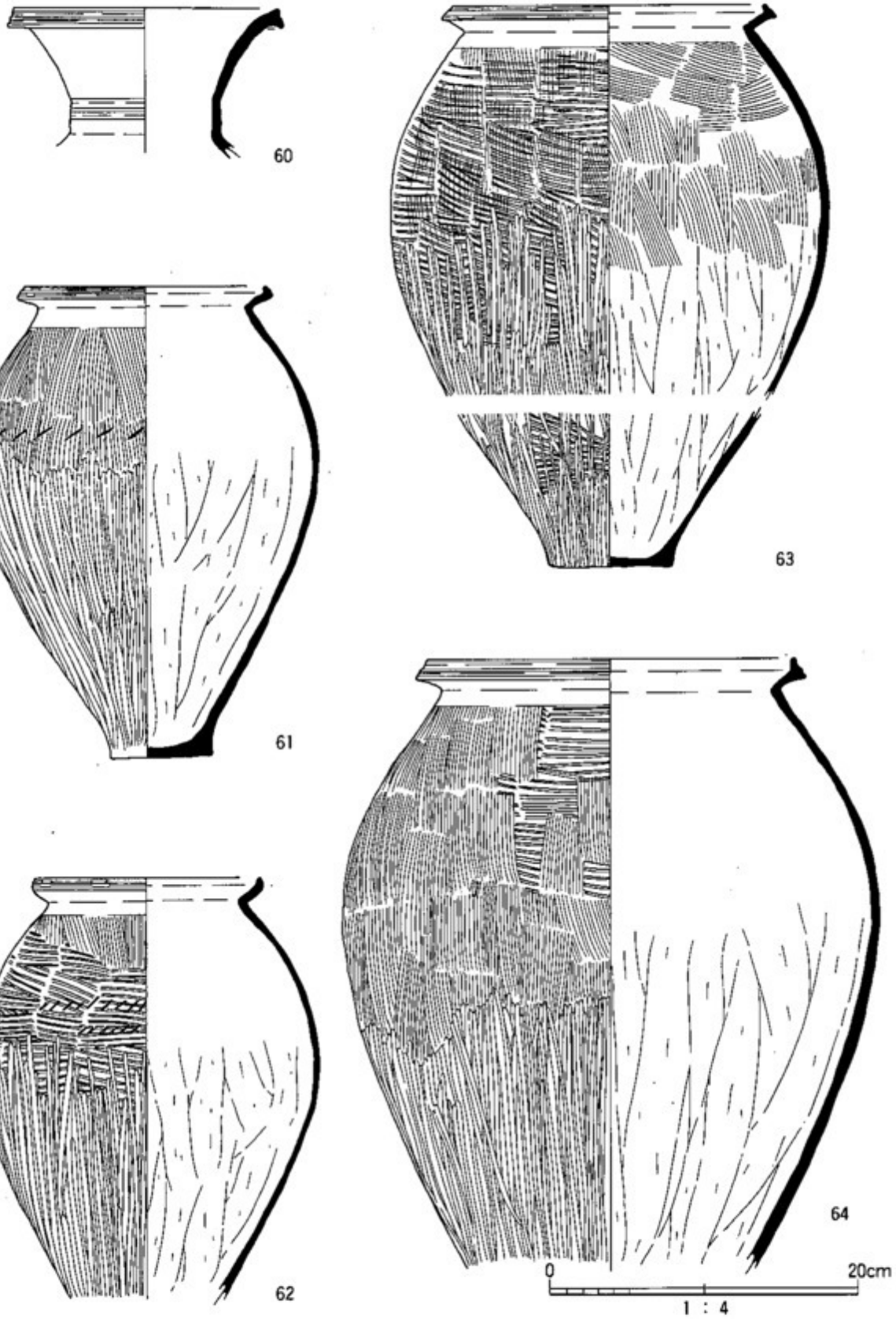
床面には，炉跡に近接して，長径1.1m，短径1.0mの平面形が不整円形を呈する土壙SK03と長径1.5m，短径1.1mの平面形が不整長円形を呈する土壙SK04がある。また，南東部には攪乱で半壊された土壙SK05がある。

住居跡埋土より，広口壺（60），甕（61～64），住居内土壙SK03より甕（69），土壙SK04より広口壺（70），高坏（71），甕（72，73），土壙SK05より広口壺（65，67，68），台付壺？（66）が出土している。



第8図　竪穴住居跡SA02内土壙SK05土器検出状況

広口壺60は，外反する頸部に2条の凹線文を持ち口縁部に至る。口縁端部を下方に拡張し，端面には擬凹線文を持つ。甕62は，口縁端部を上方に摘み上げ端面に擬凹線を持つ。体部外面上半には，縦位のハケ調整が施されるが，横位もしくは右下がりの平行叩き痕が残る。甕61，64は，口縁端部を斜め上方に，また，63は斜め上下に拡張する。いずれも，端面には擬凹線が見られる。甕61は，体部外面にハケ調整後，下位より2/3まで縦位のヘラミガキが施され，体部外面に刺突文が施される。甕63は，体部外面にハケ調整が施された後，体部下位より1/2まで，縦位のヘラミガキが施されるが，横位もしくは右下がりの平行叩き痕が体部上位から下位において残る。



第9図　竪穴住居跡SA02出土遺物

広口壺65は，体部と頸部の屈曲部に貼付突帯を施し指頭圧痕を付ける。広口壺68は口縁部が欠損するが65と同タイプである。

広口壺70は外反しながら立ち上がる頸部から大きく開く口縁部を持ち，口縁端部を上下に拡張させる。頸部および口縁部端面に数条の凹線文が施される。高坏71は椀形の坏部の口縁端部よりやや下がった位置に1条の凹線文を持つ。甕69，72，73は頸部の屈曲がシャープであり，72，73は端部を斜め上下方向に拡張させ，69は斜め上方に拡張させる。72，73の体部外面には縦位のハケ調整が施されるが，ハケ調整前の横位もしくは右下がりの平行叩き痕が見られる。

(3) **竪穴住居跡SA03**（第2，10図，図版9，10）

住居跡SA02と切り合い関係を持つ住居跡であり，長径5.0m，短辺4.0mの平面形が不整円形を呈する。切り合い関係において，住居跡SA02より新相の住居跡である。埋土は，にぶい黄橙色シルトである。壁高は20cmであり，幅10cm，深さ5cmの壁溝が部分的に断絶しながら巡る。床中央部に，長径1.0m，短辺60cm，の平面形が長円形を呈する土壙がある。埋土に焼土層の堆積が見られることから，炉跡（SC04）と考えられる。主柱穴はこの炉跡（SC04）を中心に1.8～2.4mの間隔で4個配置されるものと考えられる。

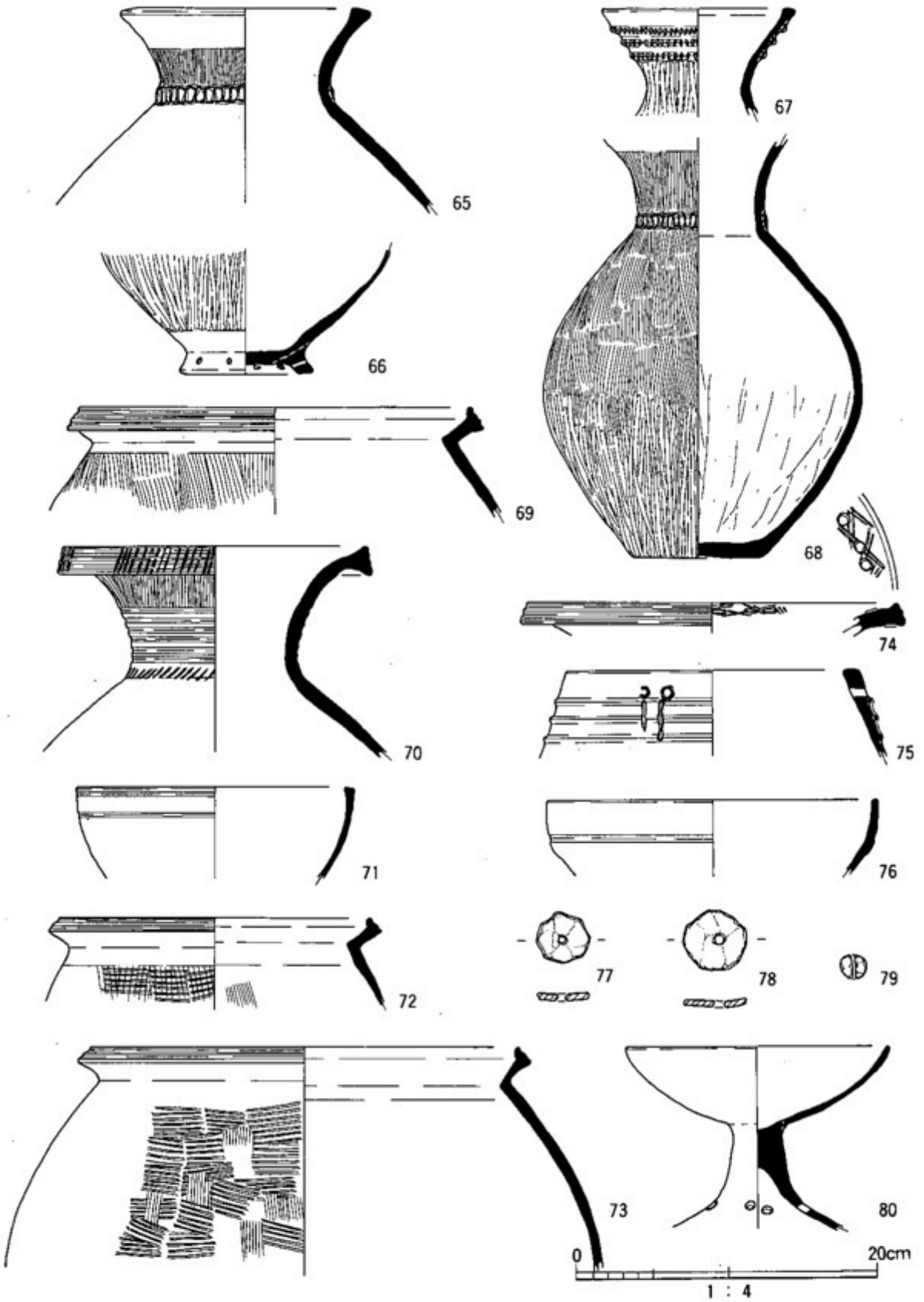
埋土より，広口壺（74），鉢（75），高坏（76），紡錘車（77，78），土錘（79），石鏃（58），石錐（59）が出土している。

広口壺74の口縁部端面は擬凹線を持ち，口縁部内面は，円形浮文とヘラ描沈線文との組み合わせにより加飾される。鉢75は3条の貼付突帯と棒状浮文とで加飾し，口縁端部よりやや下がった位置に2個1対の穿孔を受ける。高坏76は椀形の坏部の口縁部と体部の屈曲部に1条の凹線文が施される。紡錘車77，78は土器片を利用している。

(4) **竪穴住居跡SA04**（第2，10図，図版5，10）

長径4.6m，短辺3.5mの平面形が不整長方形を呈し，壁高15cmを測り，幅10cmの周溝が巡る。埋土は，黒色シルトであり，住居内中央部に土器片が散乱する。主柱穴が住居内に確認されず，また，炉跡も検出されない。住居外コーナー部に柱穴であろうと考えられるピットが検出されており，住居内無柱穴の住居跡であると考えられる。南東隅部の床面直上より高坏（80）が出土している。

高坏80は，内弯気味に立ち上がる坏部に脚柱部の裾が大きく広がる形態を示す。坏部と脚部の接合法は差し込み式である。



第10図　竪穴住居跡SA02内土壙SK03，SK04，SK05，SA03，SA04出土遺物

土壙

(1) 土壙SK06（第11図，図版10）

長辺1.6m，短辺80cmの平面形が長方形を呈し，深さ40cmを測る。土壙SK07により全体の1/2が攪乱される。埋土は，にぶい黄褐色シルトである。広口壺（88），無頸壺（91），甕（84～87），高坏（89，90），紡錘車（92）が出土している。

広口壺88は，斜め上方に立ち上がる頸部から短く外反する口縁部を持ち，口縁部端面には擬凹線が見られる。無頸壺91は体部に多条の凹線文が施され，口縁端部直下に穿孔を受ける。甕85，86は，口縁端部を上方に摘み上げ，84，87は，斜め上下に拡張させる。84の体部外面には縦位のハケ調整がみられるが，他は外面磨滅が著しく調整は不明である。高坏89，90は，接合資料ではないが，同一個体であると考えられる。椀形の坏部の口縁部と体部の屈曲部に2条の凹線文が施される。また，脚端部を上下に拡張させ，端面にも凹線文を施す。底部は円板充塡法である。

(2) 土壙SK07（第11図，図版10）

土壙SK06，07により攪乱を受けるが，径1.5mの平面形が不整円形を呈し，深さは深さ45cmを測る。埋土は，にぶい黄褐色シルトと黄色シルトの混在層であり，壺（93）が出土している。

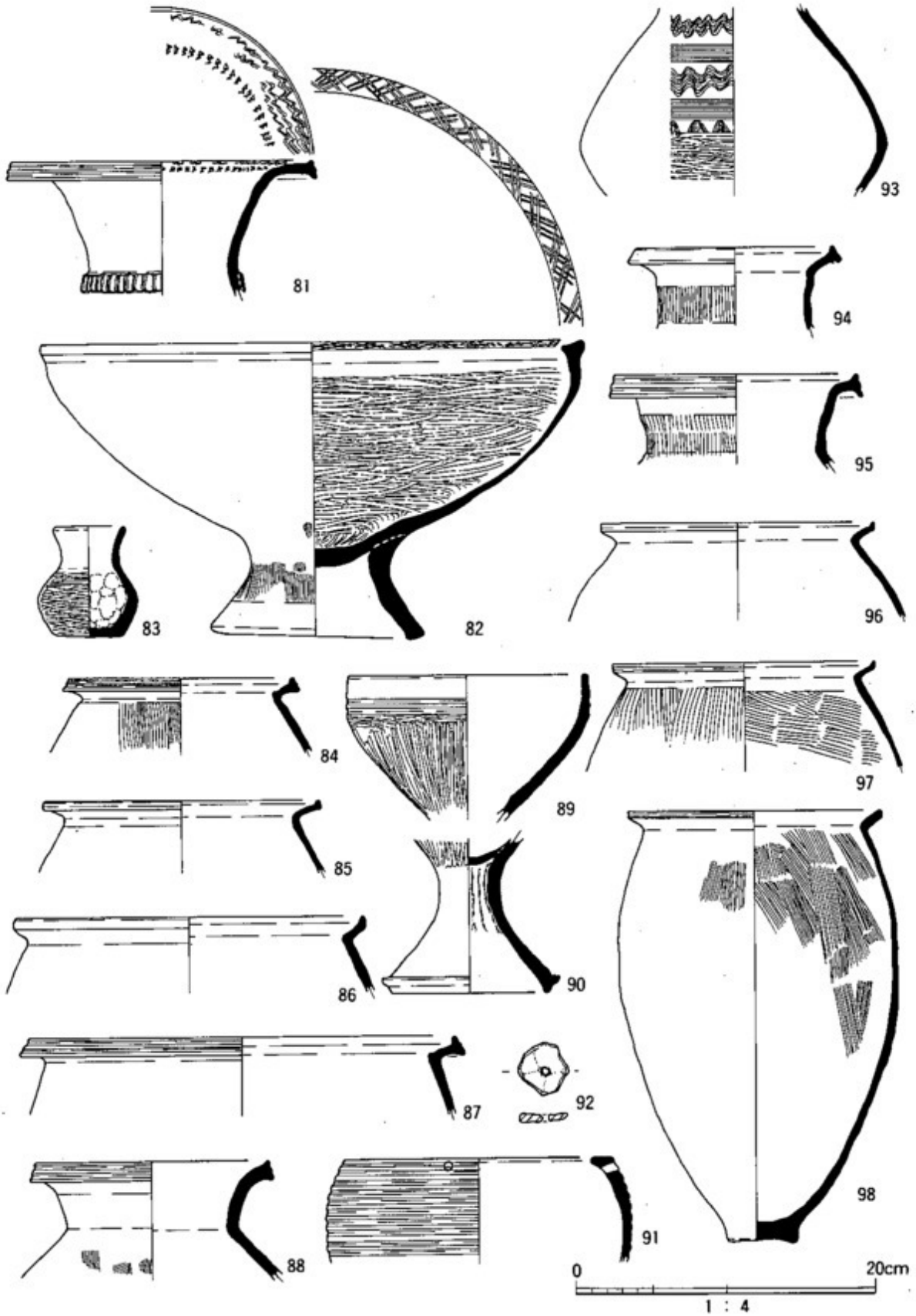
壺93は体部片であるが，体部の屈曲が比較的明瞭な長頸壺の一部と考えられる。体部外面上半部には，櫛描波状文＋直線文＋波状文＋直線文＋波状文がほどこされ，最下位の波状文は横位のヘラミガキにより一部消失する。体部外面下半には縦位のヘラミガキが施される。

(3) 土壙SK08（第11図，図版10）

溝SD01により中央部で斜断されるが，長径3.5m，短径0.5～1.0mの平面形が長円形を呈し，深さ50cmを測る。埋土は，灰黄色シルトである。広口壺（94，95），甕（96，97）が出土している。

広口壺94は直立する頸部から短く外反する口縁部を持ち，口縁端部を斜め上下に拡張させる。また，広口壺95は斜め上方に立ち上がる頸部から大きく外反する口縁部を持ち，口縁端部を上下に拡張させ，端面には擬凹線を持つ。いずれも，頸部には縦位のハケ調整が施され，口縁部を横位のナデで仕上げる。

甕96，97は頸部の屈曲がシャープであり，口縁端部を上方に摘み上げるタイプである。



第11図　土壙SK06～SK11出土遺物

(4) 土壙SK09（第11図，図版10）

調査地区外へ広がるが，長径1.3m，短径1.0mの平面形が不整長円形を呈し，深さ30cmを測る。埋土は，黄灰色シルトである。広口壺（81），台付鉢（82）が出土している。

広口壺81は斜め上方に立ち上がる頸部から水平方向へ外反する口縁部を持ち，端部を上下に拡張させ，端面には凹線文が施される。また，口縁部内面には，櫛描波状文と貝殻文により加飾される。頸部には貼付突帯が施される。台付鉢82は口縁端部が内傾し，端部を外側に拡張させる。体部内面には横位のヘラミガキが施され，口縁端部上面にはヘラ描沈線による斜格子文が施される。

(5) 土壙SK10（第11図，図版10）

一辺60cmの平面形が隅丸方形を呈し，深さ30cmを測る。埋土は，黄灰色シルトである。ミニチュア短頸壺（83）が出土している。

(6) 土壙SK11（第11図，図版10）

長径1.3m，短径0.6～1.0mの平面形が長円形を呈し，深さ1.2mを測る。埋土は，黄灰色粘土質シルト（上層）と浅黄色粘土質シルト（下層）に大別できる。下層より，甕（98）が出土している。

甕98は体部が膨らまず，長胴形を呈し，短く外反する口縁部をもつ。体部外面に一部縦位のハケ調整の痕跡が残る。また，体部内面にも，縦位のハケ調整が施される。

(7) 土壙SK12（第12図，図版11）

調査地区外へ広がるが，長径1.5m，短径１mの平面形が長円形を呈し，深さ30cmを測る。埋土は，黄灰色シルトである。短頸壺（99），甕（100）が出土している。

短頸壺99は斜め上方に立ち上がる頸部から口縁部が短く直立し，端部をわずかに内傾させる。頸部から体部にかけて縦位のハケ調整が施され，口縁部は横位のナデで仕上げる。甕100は「く」の字状に屈曲する口縁部の端部を斜め上方に拡張させ，頸部に貼付突帯を施し指頭圧痕を付ける。

(8) 土壙SK13（第12図，図版11）

調査地区外へ広がり，形状は明確ではないが，調査地区内において，長辺1.5m，短辺１mの不整長方形を呈し，深さは50cmを測る。埋土は，黄褐色シルトである。短頸壺（101），甕（103，106～108），高坏（102），ミニチュア広口壺（104，105）が出土している。

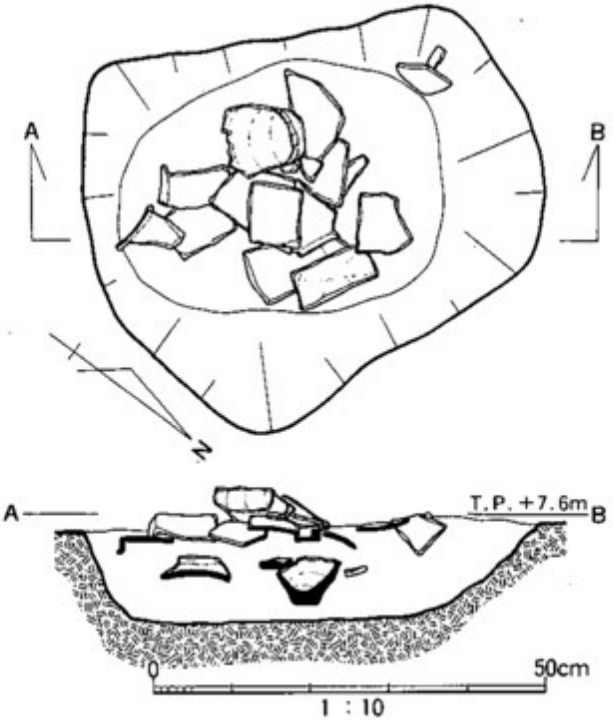
短頸壺101は，斜め上方に直線的に立ち上がる口頸部を持つ。甕103は，口縁端部を上方に摘み上げるタイプである。106～108は，「く」の字状に屈曲する口縁部を持ち，107，

108は端部に擬凹線が見られる。106の体部外面には下位より2/3まで縦位のヘラミガキ，また，体部内面には下位より2/3まで縦位のヘラケズリが施される。高坏102は脚部片であるが，脚端部を上方に拡張させ，裾部外面に複線鋸歯文が施される。

(9) 土壙SK14（第12，13図，図版4，11）

住居跡SA01の張出部で検出され，長辺50cm，短辺20cmの平面形が不整長方形を呈し，深さ5cmを測る落ち込みである。張出部に伴う遺構か否かの判断が困難なため別記しておく。甕（109～111）が出土している。

甕109，110は口縁端部を上方に摘み上げ，111は斜め上方に拡張する。110，111の口縁端部には擬凹線が見られる。



第12図　土壙SK14土器検出状況

(10) 土壙SK15（第14図，図版11）

長径1.5m，短径1mの平面形が長方形を呈し，深さ35cmを測る。埋土は，浅黄色シルトである。甕（113）が出土している。

甕113は，「く」の字状に屈曲する口縁部の端部を斜め上方に拡張させる。体部外面には縦位のハケ調整後，下位より3/4まで縦位のヘラミガキが施される。また，体部内面には，縦位のヘラケズリ後，上半部にハケ調整が施される。

ピット

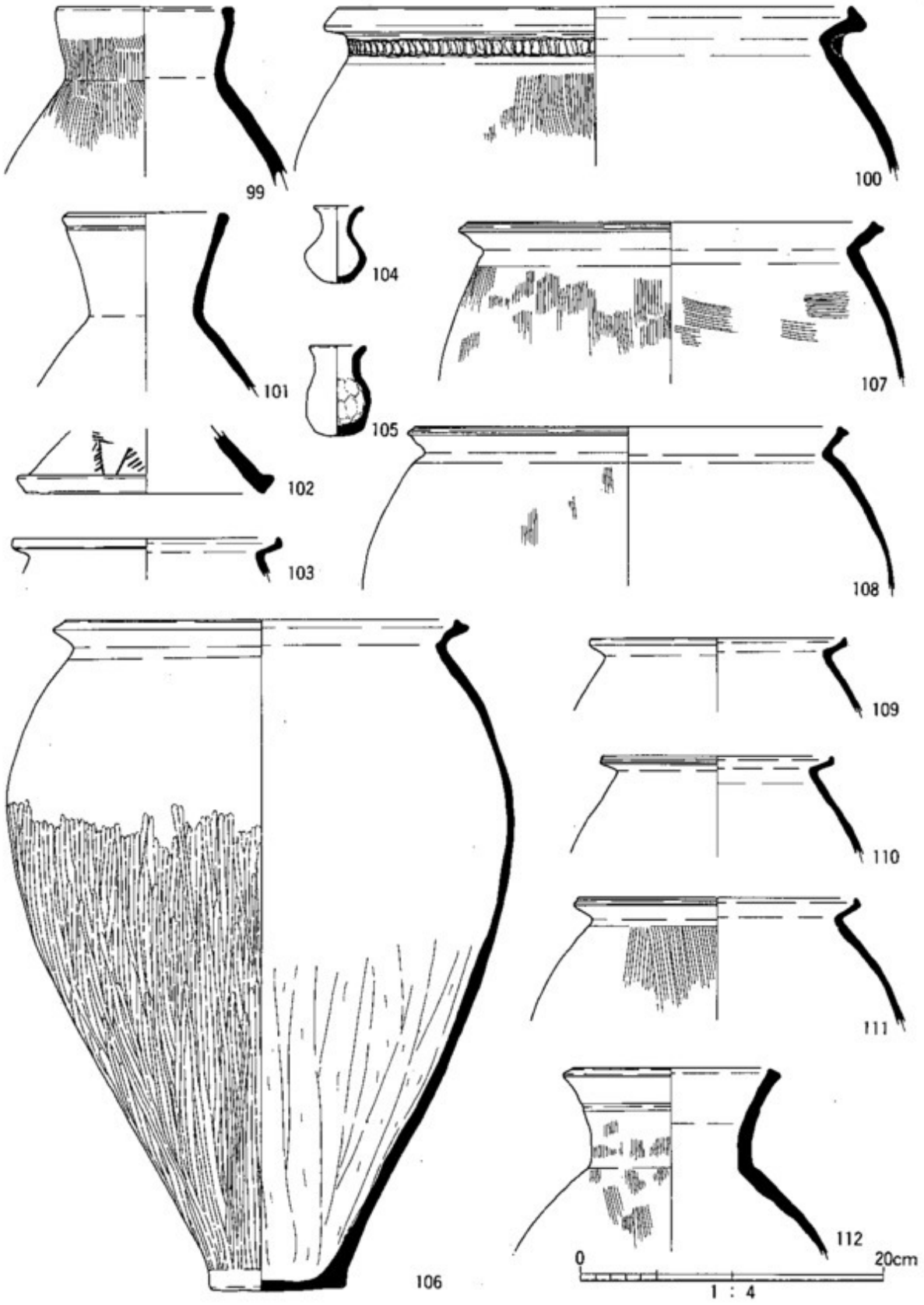
(1) P01（第13図，図版11）

径25cmの平面形が円形を呈し，深さ20cmを測る。埋土は，黄灰色シルトである。短頸壺（112）が出土している。

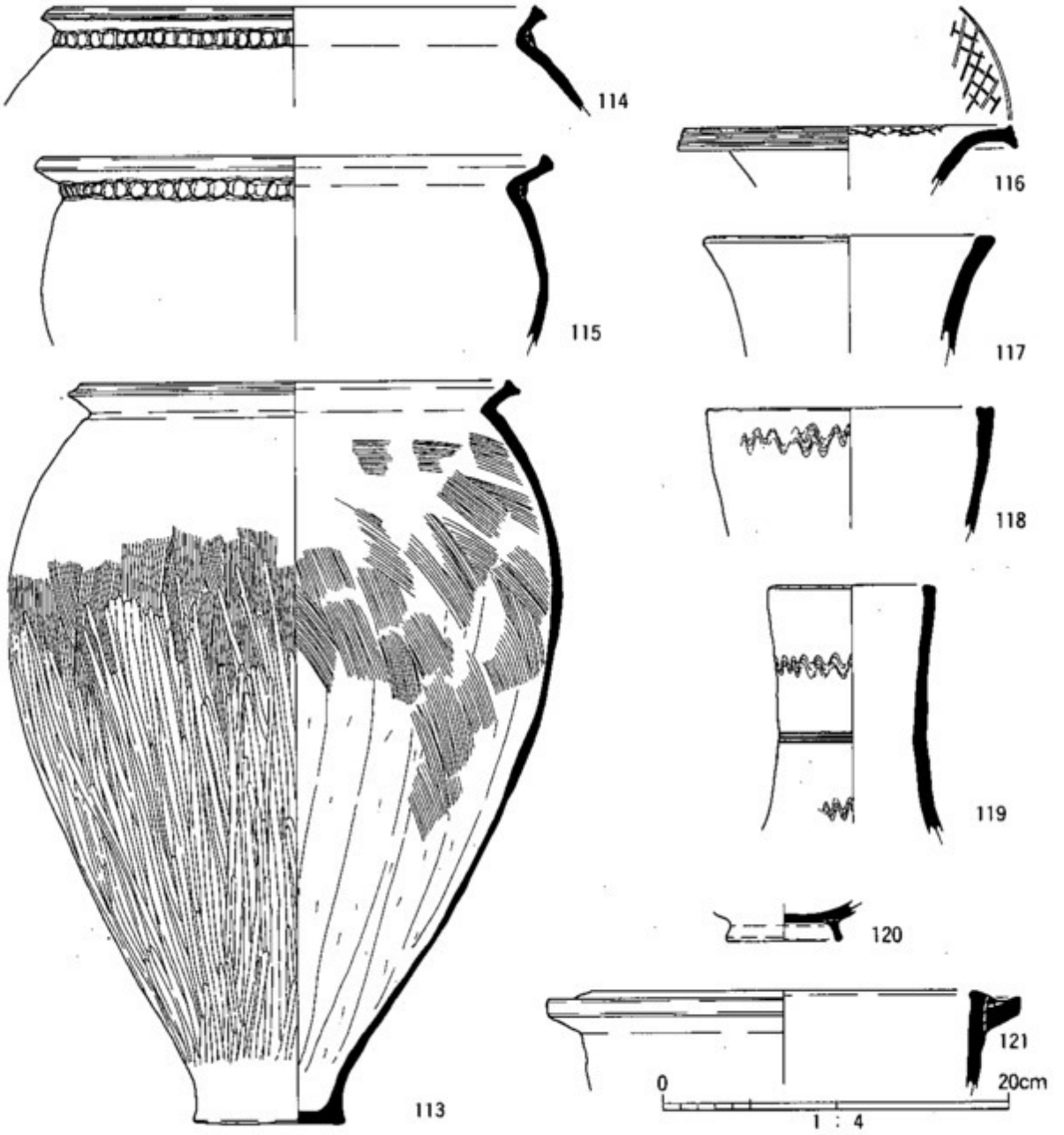
短頸壺112は外反する口頸部に1条の凹線文を施し，口縁端部を面取る。頸部外面から体部外面上位にかけては縦位のハケ調整が施される。

(2) P02（第14図）

径30cmの平面形が円形を呈し，深さは30cmを測る。埋土は，黄灰色シルトである。甕（114，115），広口壺（116），短頸壺（117，118），長頸壺（119）が出土している。



第13図　土壙SK12～SK14，P01出土遺物



第14図　土壙SK15．P02，P03出土遺物

広口壺116は外反する頸部から水平方向へ開く口縁部の端部を上下に拡張し，端面に擬凹線が見られる。口縁部内面には，ヘラ描沈線による斜格子文が施される。短頸壺は117は外反する口頸部を持ち，118の口縁部直下には櫛描波状文が施される。長頸壺119の頸部には，櫛描波状文＋直線文＋波状文が施される。甕114は，「く」の字状に屈曲する口縁部の端面に擬凹線を持ち，頸部に貼付突帯が施される。115は，内弯気味に立ち上がる体部から「く」の字状に屈曲する口縁部に至り，端部を斜め上方に拡張させ，頸部に貼付突帯

が施される。

(3) P03（第14図）

一辺30cmの平面形が方形を呈し，深さは20cmを測る。埋土は，暗灰色シルトである。黒色土器（120），土師器釜（121）が出土している。

黒色土器120は，B類椀の底部片である。また，土師器釜121は，口縁部直下に鍔を持つ。

掘立柱建物

(1) **掘立柱建物SB01**（第2図）

調査地の南端部において建物の北桁行4間分を確認しており，桁行が西側および梁行が南側へ伸びる建物跡と考えられる。柱穴の平面形は一辺が50～60cmの方形を呈し，深さが50cmを測る。柱間寸法は1.8m等間である。柱穴より遺物は出土していない。

土壙墓群（第2図）

調査地内において，計7基が確認されている。平面形が長辺1.1～2.2m，短辺40～70cmの長方形を呈し，深さ20～30cmを測る土壙である。壁面が垂直であり，床面が水平を呈し，土壙墓であると考えられる。この形態の遺構は，名東遺跡において，頻繁に確認されるものであり，従来より，住居地に隣接して存在するため屋敷墓と考えている。出土遺物に時期が判別できるものは見られない。

3．小　結

今回の調査地は，前述したとおり，昭和62年に方形周溝墓群域から銅鐸が出土した調査地に近接しており，今回検出された住居跡は，銅鐸埋納地ならびに墓域空間等，集落内における諸機能空間の領域を考える上で貴重な追加資料であると思われる。

住居跡SA01は，名東遺跡において現在確認されている中では，最大規模を誇る住居跡であり，SA01に隣接する住居跡SA02～04は規模的に特出するものではないことから，近接する方形周溝墓の造営集団さらには銅鐸保有集団の中核的な一住居跡として考えられよう。

張出部を持つ形態の住居跡は，名東遺跡，矢野遺跡，黒谷川郡頭遺跡において確認されており，時期的にはいずれも，弥生時代後期後半から庄内期に位置付けられる。しかし，住居跡SA01の張出部は，住居の全体面積に対して占有する割合が少なく，規模・構造的にも黒谷川郡頭遺跡SB102，106，501[(4)(5)]に見られるような張出部とは異なる。また，住居跡SA02からSA03への変化は，円形住居のプラン崩壊現象を示すものであろうか。主柱穴の配置においても，多角形配置から4本柱配置へと変化する。そして，SA04においては，その平面形は不整形の長方形であるが，方形プランへの過渡的な状況としての可能性が考

えられる。

出土遺物についてみると，住居跡SA01出土遺物は，広口壺２，３，５～７，甕19，20，21，高坏12，22，23をはじめ，体部に凹線文を多条に施す鉢13，25や無頸壺17には中期的な形態や加飾法が採用されている。一方，広口壺１，４，26は，口縁端部を単純形態に仕上げ，凹線文ならびに擬凹線文すら持たない。口縁部に関しては完全に無飾化しており，広口壺２，３，５～７とは別系統の一群として捉えることができる。また，甕18は口縁端部の形態が，斜上下方向に拡張する中期的な形態とは異にし，上方に摘み上げる形態を示す。この形態の甕は，住居跡SA02においても確認されており，口縁端部を斜上下方向に拡張する甕47，49，50を伴う。これらの甕の特徴は体部外面に横位もしくは右下がりの平行叩き痕を残すことに求められ，丁寧なハケ＋ヘラミガキ調整で仕上げる中期的な甕とは区別されると考えられる。また，鉢24の形態は，わずかに内弯気味に立ち上がる体部から大きく外反する口縁部を持ち，この形態の鉢は，後期段階では確実に存在しているものの，その出現に関しては明確ではなく，鉢13，25の中期的な形態とも区別されよう。さらに，高坏28の坏部と脚部の接合は差し込み式であり，円板充填法は使用されていない。底部片においては，底部径の縮小化が見られ，底部外面が丸味を持ちハケ調整が施されているものが見られ，また，底部製作においては，丸底底部に輪状の粘土紐を接合させる手法や，輪状底部に粘土を充填させる手法が採られる。

このような，中期的な土器様相の中に新出的な土器様相が認められる資料として，土成前田遺跡土壙SK03，SK04一括資料[6]があるが，従来の編年観においては，住居跡SA01の出土遺物に対して，中期末の時期設定を行うことは危険性がなく極めて順当であると考えられる。しかし，中期的な状況が圧倒的である中において，前述したような少なくとも異なる様相を示す一群の土器が見られることにおいては，何らかの変化を求めることができよう。今回掲示した資料の多くは破片であり，量的にも少量である。型式および器種構成の明確化は不可能であり，土器様相についての断定はし難いが，現段階までの調査状況において一つの可能性を含んだ解釈を提示してみることにする。

おそらく，中期的な土器様相の完全撤退が遅れており，土器様式において純然たる変換がなされず，各器種における型式変遷が徐々に進行する過程においても，中期的な様式を根強く残す融合状態である過渡的状況としての一時期が存在する。しかも，この状況は中期的な様相が払拭される名東遺跡溝SD05上層資料[7]までの時期幅をもって存続するものと考えたい。なぜなら，現在，中期末から後期中葉以降を繋ぐ資料，すなわち，後期前半と

しての資料が名東遺跡では皆無であり，この時期の集落経営が全くの空白期になるからである。

しかし，今後の良好な層位的調査により，純粋な後期様式が確立されることが充分に考えられることであり，当面，名東遺跡に残された大きな課題の一つとして提示しておくことにする。

（註）

(1) 名東遺跡発掘調査委員会『名東遺跡発掘調査委員会』，徳島，1990年。

(2) 徳島市教育委員会「第８回文化財調査報告会資料－名東遺跡」。

(3) 用語および使用細部調整用語については，山中一郎「森の宮遺跡出土の石器について」難波宮址顕章会刊『森の宮遺跡第３．４次発掘調査報告書』，大阪，1978年，PP124～147に従うものとする。また，調整より整形を使用する技法は，名東遺跡自然落ち込み遺構SX01出土石鏃に見られる。（名東遺跡発掘調査委員会『名東遺跡発掘調査委員会』，徳島，1990年。）

(4) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』，徳島，1986年。

(5) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡Ⅴ』，徳島，1990年。

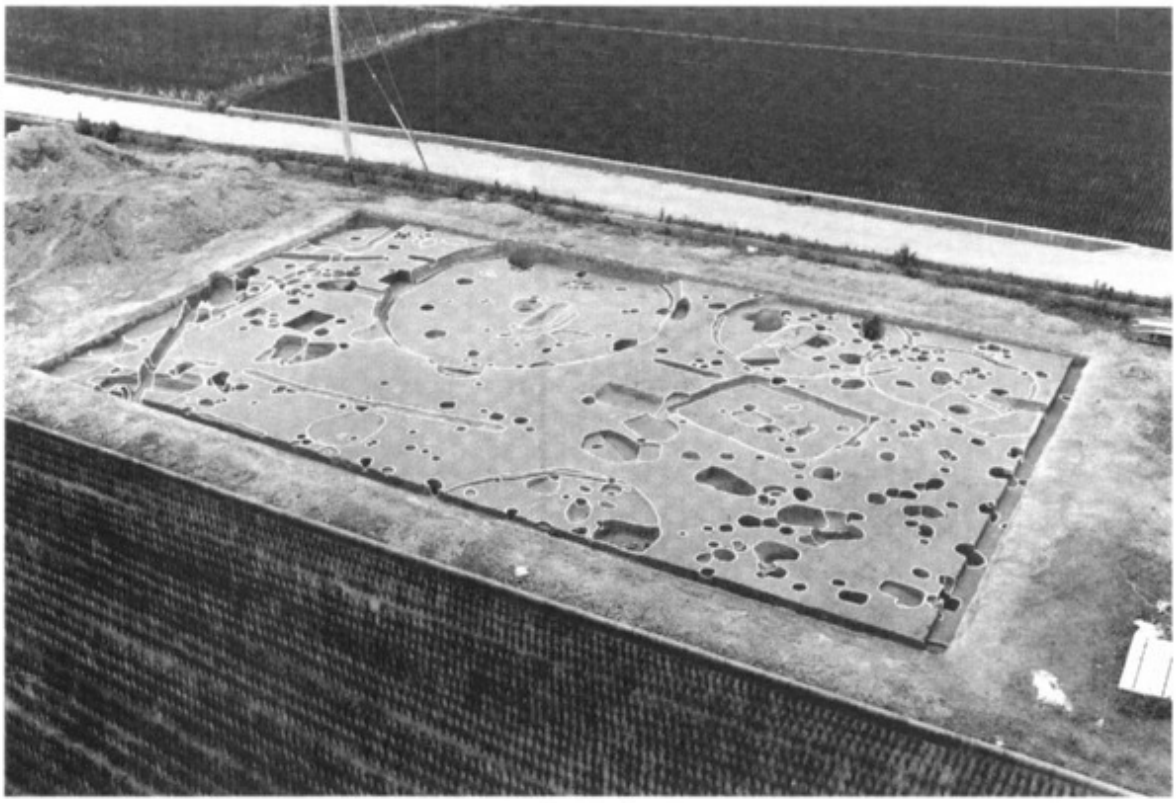
(6) 徳島県教育委員会『土成町北原遺跡』，徳島，1988年。

(7) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要１』徳島，1989年，PP33～73。名東遺跡溝SD05上層資料には，口縁叩き出し手法が認められる甕が存在する。編年観では，「黒谷川Ⅰ式」直前段階に相当すると考えられる。

調査地と銅鐸出土調査地　　北より

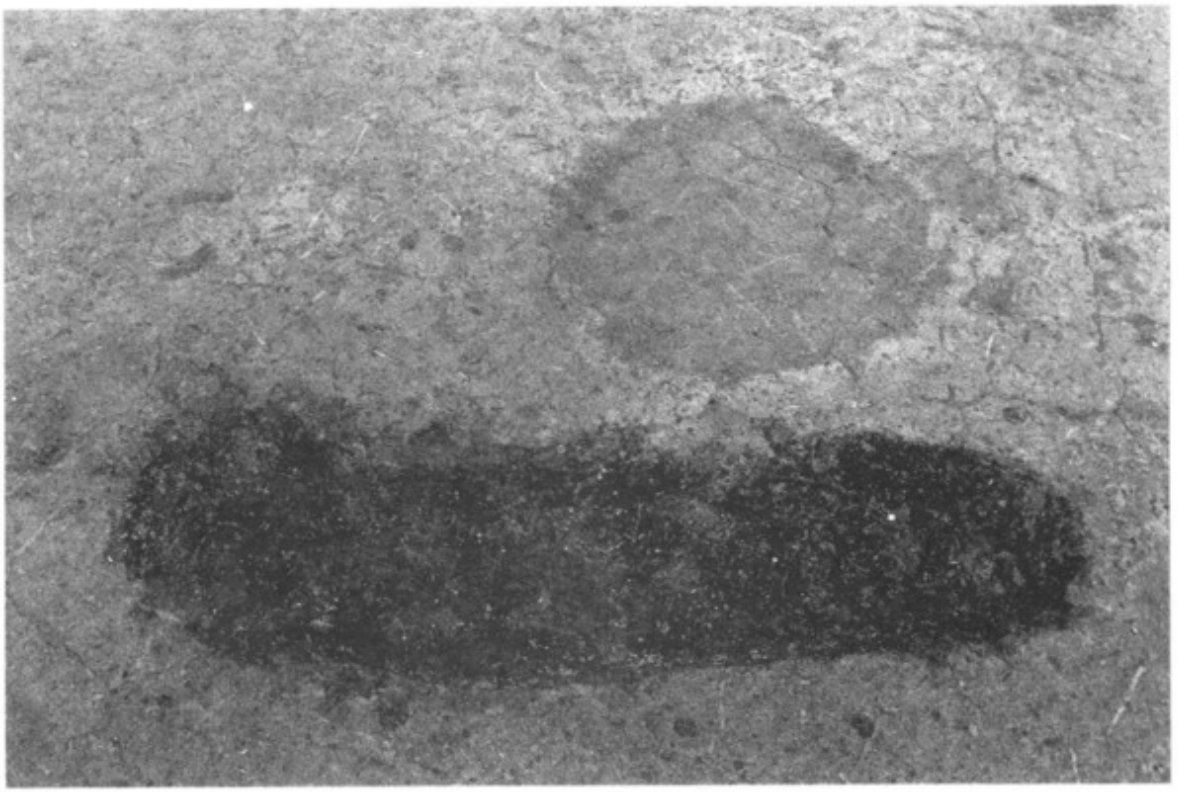
図版一

図版2

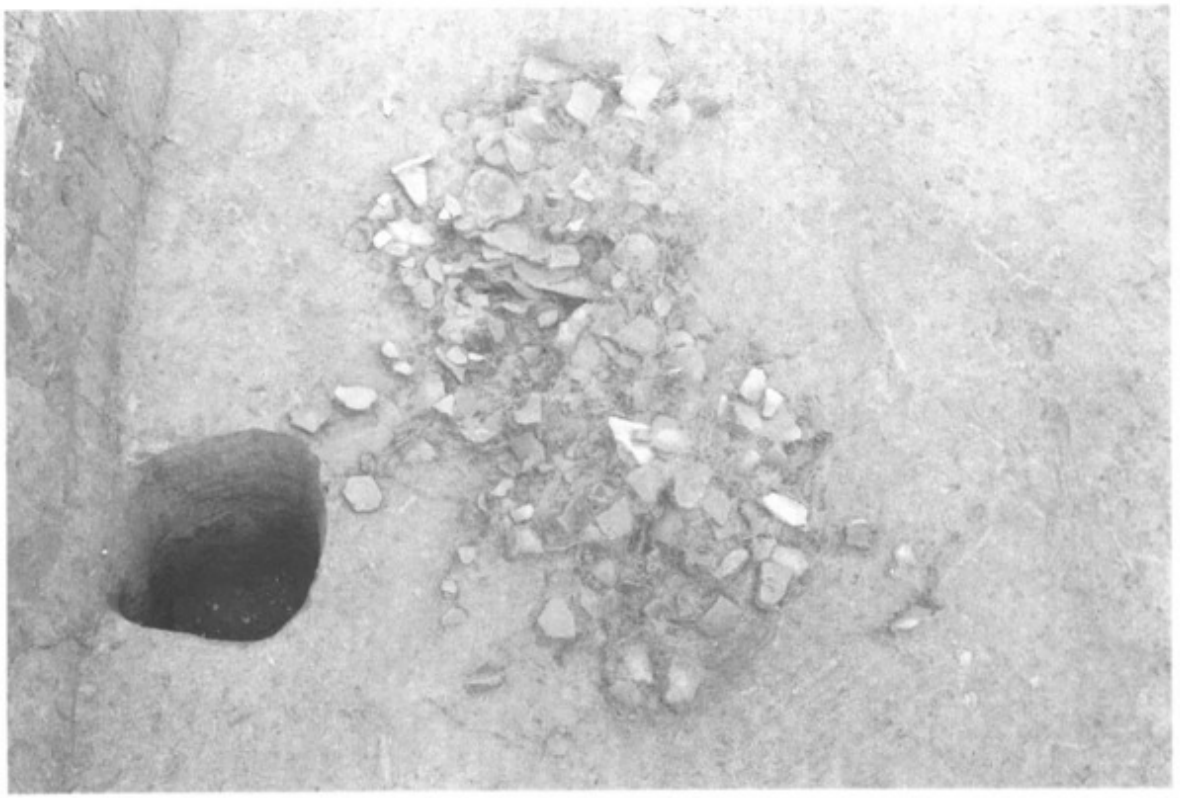


調査地全景　南西より

竪穴住居跡SA01　南西より



竪穴住居跡SA01内炉SC01，SC02検出状況　　南より



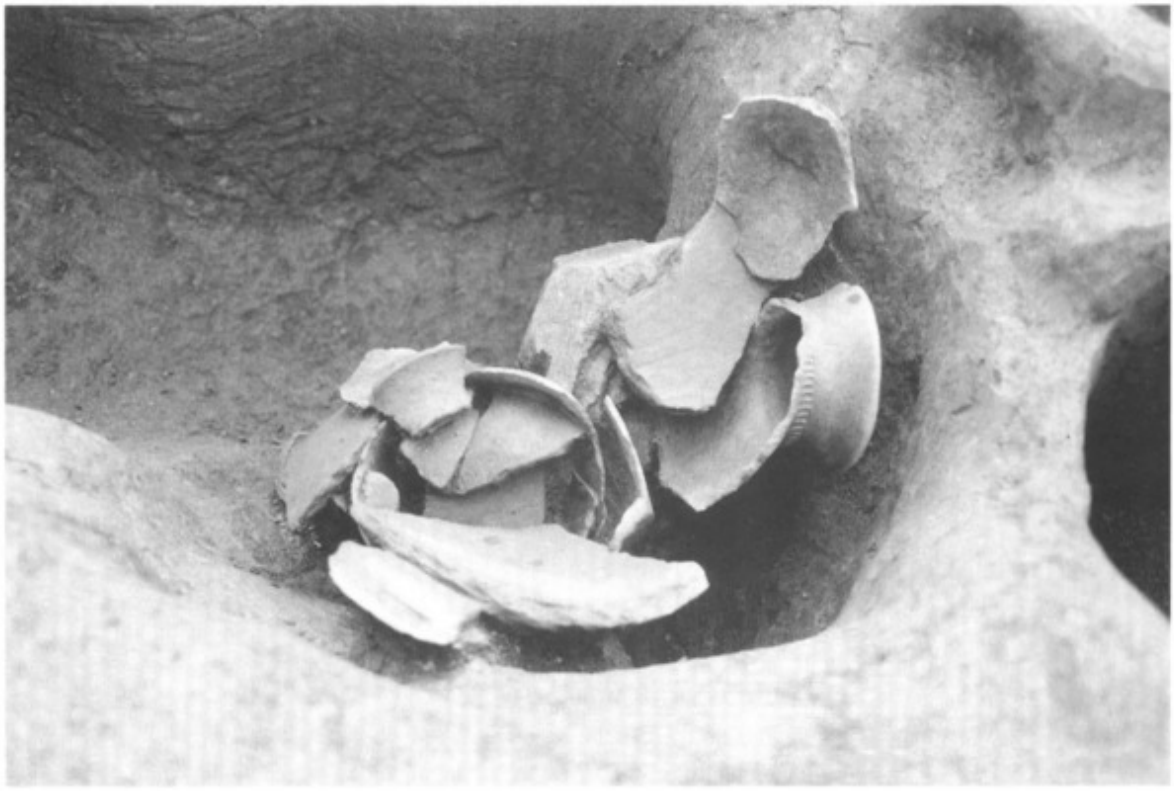
竪穴住居跡SA01床面土器出土状況　　北より

図版4

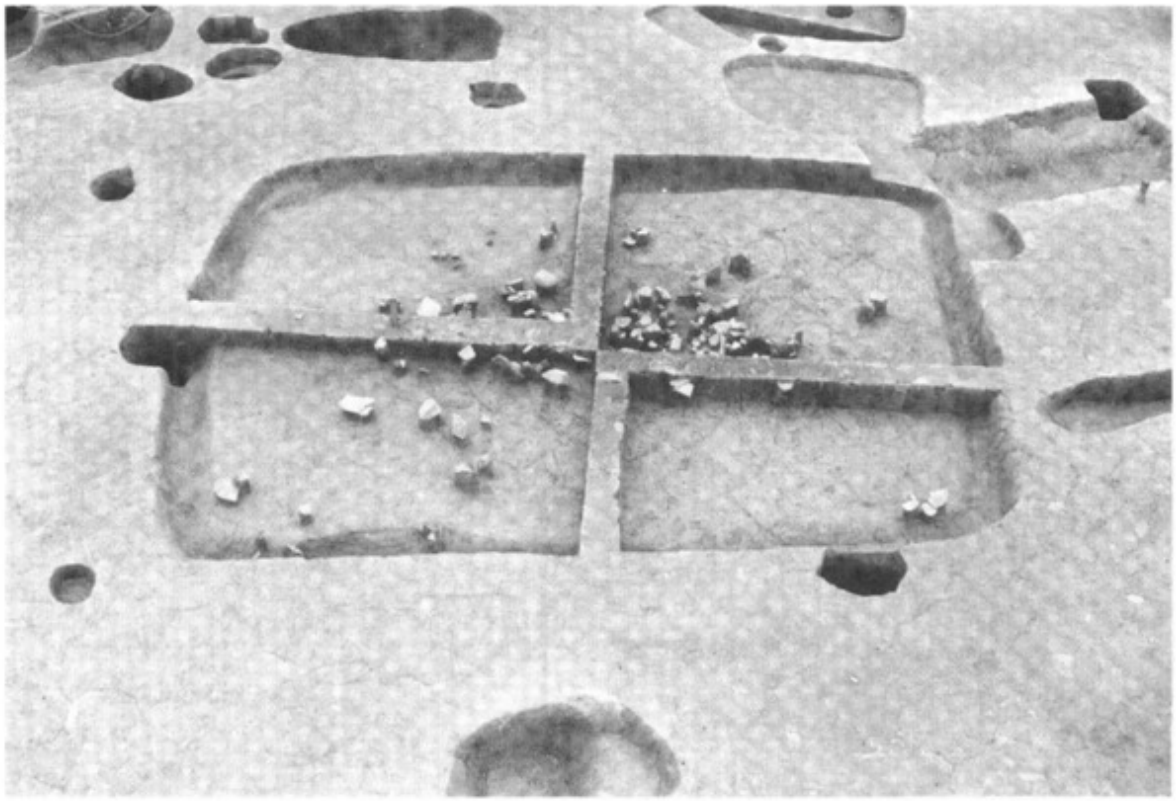
竪穴住居跡SA01張出部土器検出状況　　北より

竪穴住居跡SA01内SP01検出状況　　南西より

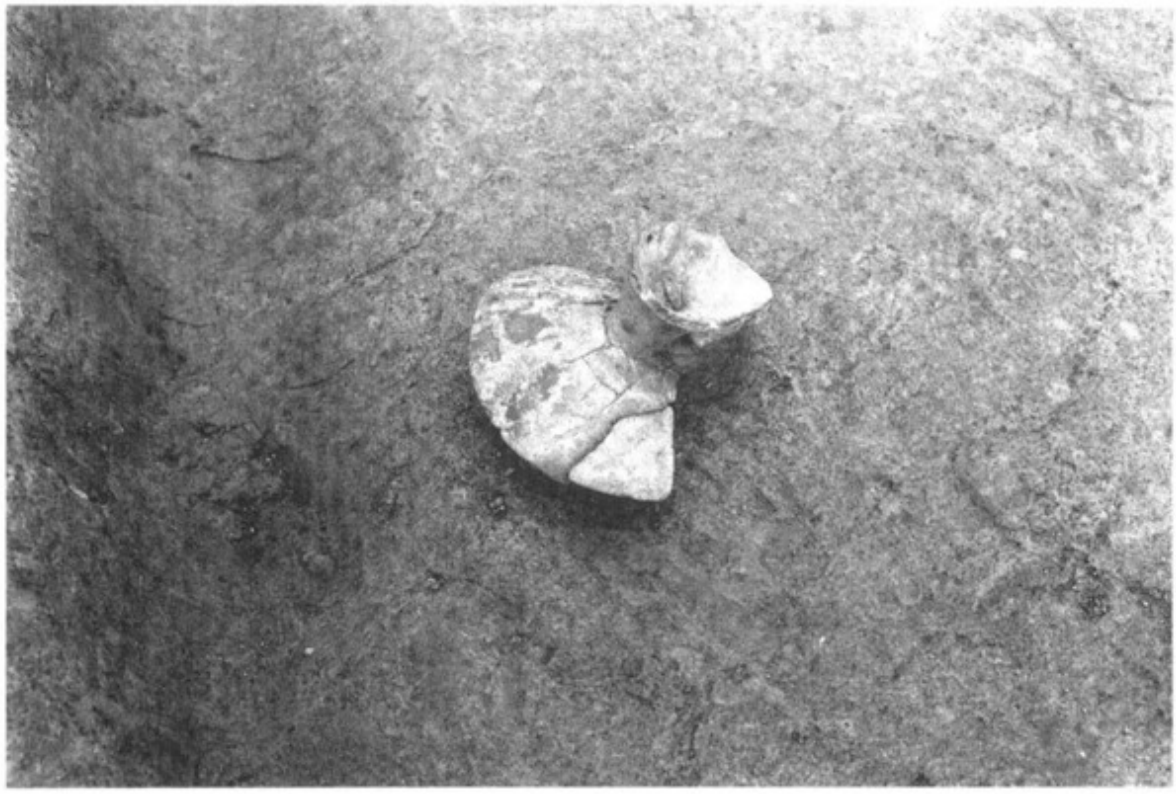
竪穴住居跡SA02内土壙SK05土器出土状況　　南より



竪穴住居跡SA02内土壙SK05土器出土状況　　北より



竪穴住居跡SA04土器出土状況　　東より



竪穴住居跡SA04床面土器出土状況　　東より

1

8

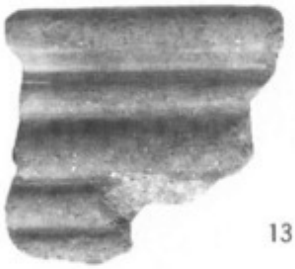
17

3

9

22

4


13

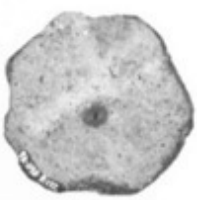
23

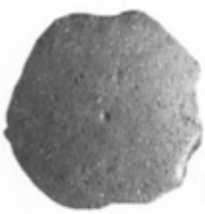
6

7

15

24




30

29

31

32

竪穴住居跡SA01出土遺物

33

34

35

36

37

38

42

43

44

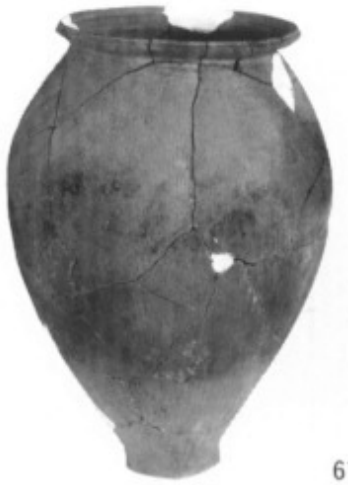
45

46

竪穴住居跡SA01出土遺物

60

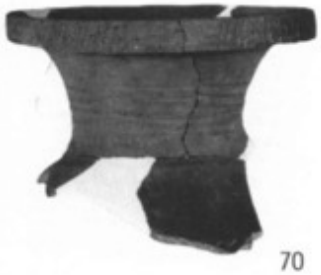
69


61

65

75

62


70

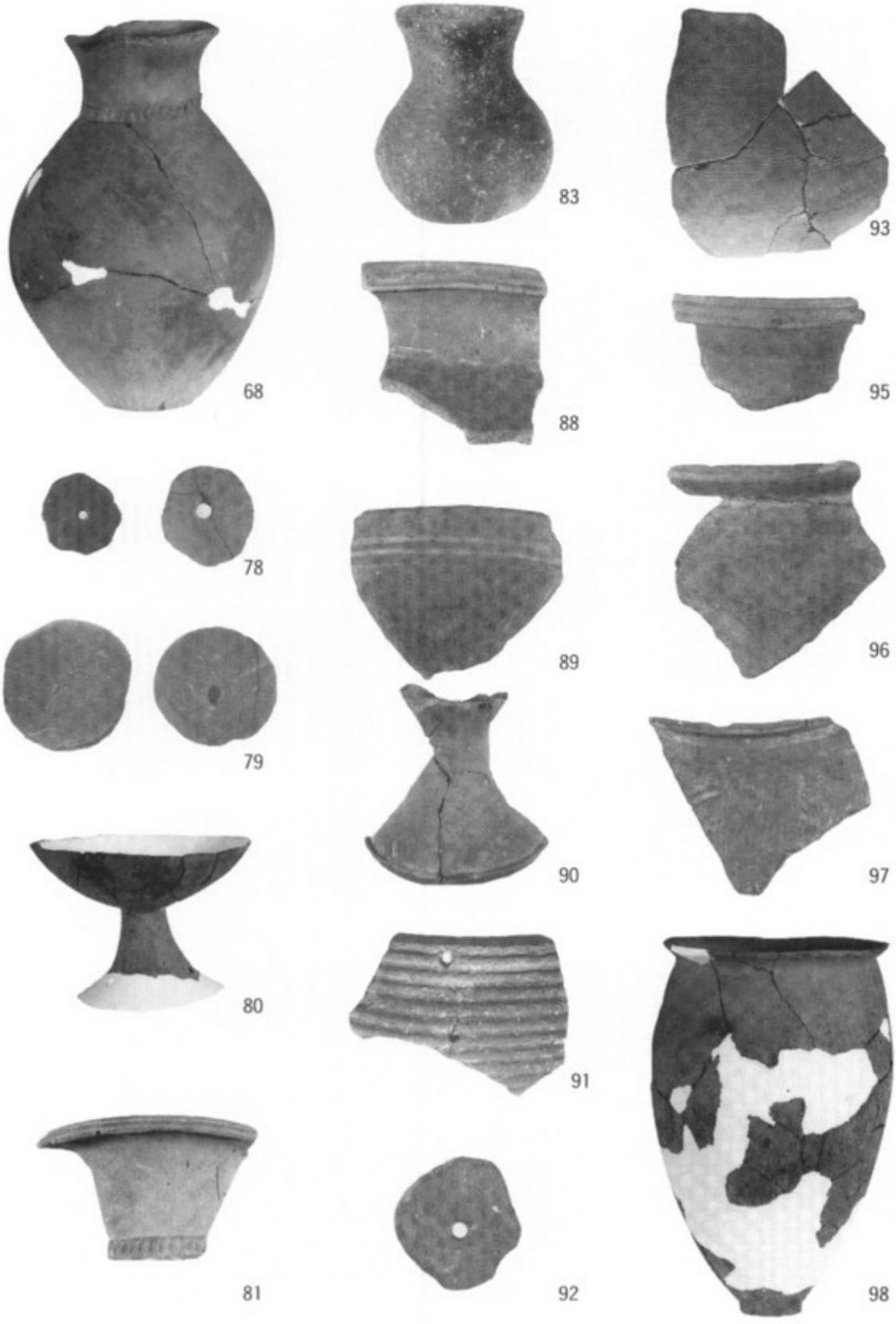
72

73

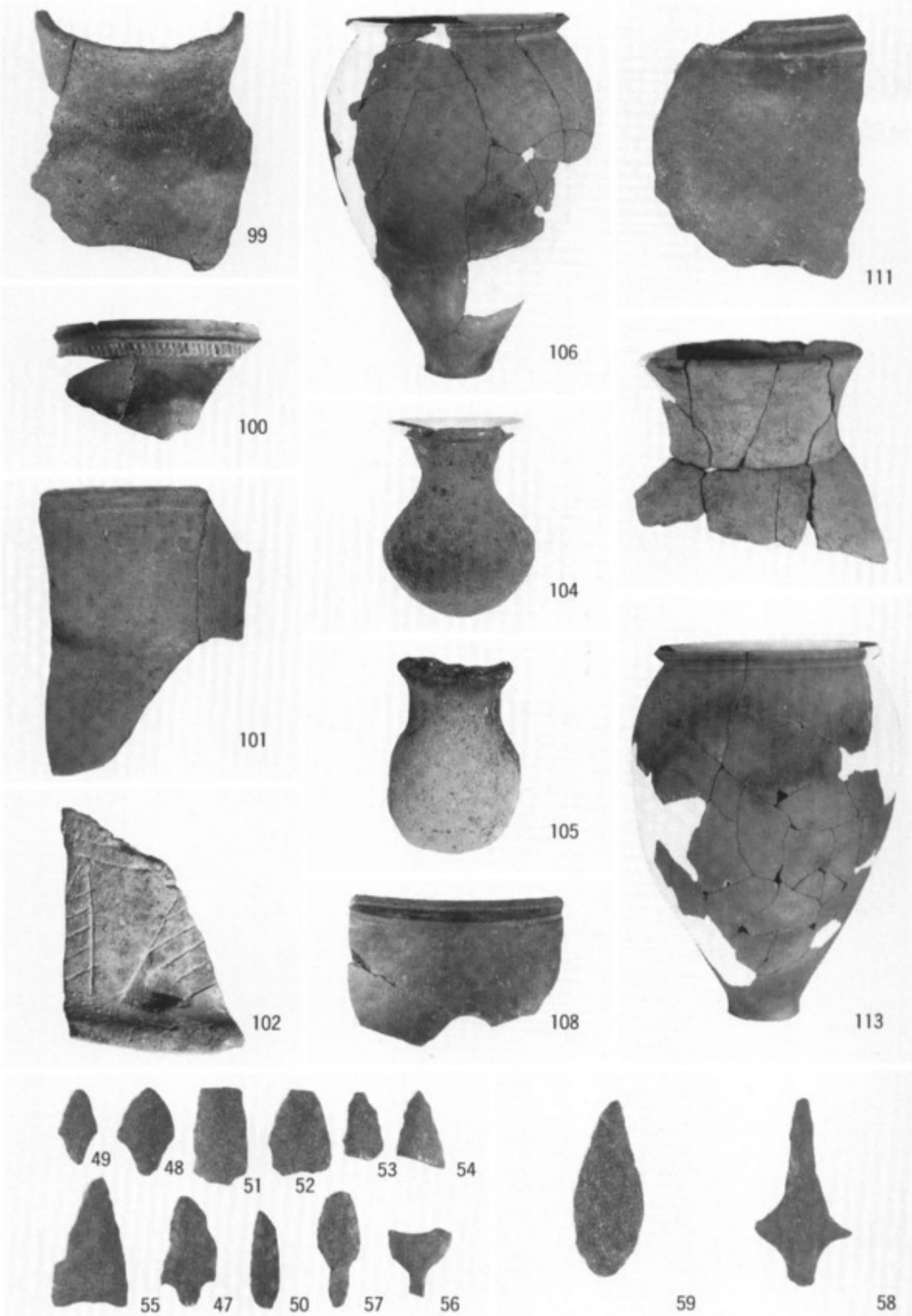
63

竪穴住居跡SA02，SA02内土壙SK05出土遺物

図版10



竪穴住居跡SA02内土壙SK05，竪穴住居跡SA03，SA04，土壙SK06～SK11出土遺物



土壙SK12～SK15，P01，P02，竪穴住居跡SA01，SA03出土遺物